

内発的イノベーションによる地域づくりの実践的研究

同志社大学大学院総合政策科学研究科
総合政策科学専攻博士課程（後期課程）

2017年度 1005番 松原 明美

目次

1. 研究の枠組み	1
1.1. 研究の背景と動機	1
1.2. 研究の目的とリサーチ・クエスチョン	3
1.3. 研究の方法	4
1.4. 研究の意義	5
1.5. 本論文の構成	6
1.6. 鍵概念	8
2. 「個人の内発的発展」を重視した内発的発展論	9
2.1. 内発的発展論の登場と展開	9
2.2. 個人の可能性に着目した鶴見和子の内発的発展論	12
2.2.1. 鶴見論の原点の模索	12
2.2.2. 社会変動論としての内発的発展論	14
2.2.3. 個人の発展を重視した内発的発展論	16
2.2.4. 晩年の鶴見の視座	20
3. 「個人の内発的発展」を基礎とした地域づくりの模索	23
3.1. 「個人の内発的発展」を促進する自己教育	23
3.2. 開発僧 ^{かいほつ} による自己教育に基づく地域開発	26
3.2.1. 地域開発を担う 開発僧 ^{かいほつ}	26
3.2.2. 開発僧 ^{かいほつ} が手がける自己教育	27
3.2.3. 自己教育を基礎に置いた地域開発の実践	29
3.3. ミャンマーの開発僧 ^{かいほつ} による地域開発のフィールド調査	30
3.3.1. 社会的背景	31
3.3.2. 調査概要	35
3.4. 調査結果の分析	39

3.4.1. 分析方法.....	39
3.4.2. 分析結果と考察.....	41
3.4.3. 開発僧による地域づくりが村人に与えた影響.....	49
3.4.4. 小括.....	54
3.5. プロトタイプの提示.....	56
4. 「個人の内発的発展」を促進する「わたし研究室」.....	60
4.1. 一般社団法人こころ館とは.....	60
4.2. 「わたし研究室」の概要.....	61
4.3. 「個人の内発的発展」を促進する技法.....	63
4.3.1. Self-Anchoring Method.....	63
4.3.2. Being ファシリテーション.....	70
5. 社会実験 -大阪府豊能町「とよのわたし研究室」による地域づくり-.....	74
5.1. 豊能町の現状と課題.....	74
5.1.1. 概況.....	74
5.1.2. 豊能町の地域課題.....	75
5.1.3. 豊能町における地域づくりの取り組み.....	77
5.2. 「とよのわたし研究室」を通じた地域づくりの概要.....	78
5.2.1. 【第0フェーズ】事前準備.....	81
5.2.2. 【第1フェーズ】「わたし研究室」.....	83
5.2.3. 【第2フェーズ】伴走支援.....	95
6. 検証と分析.....	99
6.1. 検証1（受講生のアイデンティティ形成に関する検証）.....	99
6.1.1. 検証の方法.....	99
6.1.2. 結果と考察.....	100
6.1.3. アイデンティティ形成に作用した要因の検討.....	107

6.2. 検証2（受講生の自利利他の精神の発現に関する検証）	117
6.2.1. 検証の方法	117
6.2.2. 結果と考察	117
6.2.3. 自利利他の精神が発現した要因の検討	120
6.3. 検証3（相互扶助の醸成に関する検証）	123
6.3.1. 検証の方法	123
6.3.2. 結果と考察	124
6.3.3. 相互扶助の関係性を醸成した要因の検討	127
6.4. 検証4（内発的イノベーションに関する検証）	128
6.4.1. 検証の方法	128
6.4.2. 結果と考察	128
6.5. 地域づくりモデルの提案に向けた考察	131
7. 「内発的イノベーション地域づくりモデル」の提案	136
7.1. 概要	136
7.2. 枠組み	137
7.3. モデルを機能させる諸条件	139
7.4. 総括	141
8. おわりに	143
8.1. 研究の総括	143
8.2. 本研究の意義と独自性	144
8.3. 課題と展望	146
参考文献	1

1. 研究の枠組み

1.1. 研究の背景と動機

わが国の人口は、2005年に戦後初めて減少に転じ、以来人口減少と少子高齢化が進展の一途を辿っている。経済活動が停滞し、縮小社会・縮退社会を前提とした将来ビジョンが求められる現在、各地方自治体においても「低成長と資源制約下での自治」（新川 2016：4）を前提とした独自の地域運営がこれまで以上に求められるようになった。こうした状況下において、これまで日本の地域発展・地域政策に影響を与えてきた理論である内発的発展論が改めて見直される時代に来たと筆者は考える。

内発的発展論とは、「各地域固有の資源をベースとして、それぞれの地域の固有伝統、文化に基づきつつ、地域住民の主導により進められる発展」（西川 2004：37）を志向する一連の議論のことである。1970年代に社会学者の鶴見和子が提唱して以来、現在に至るまで地域政策等の地域づくりに関する議論に一定の影響を与え続けた。近年では、観光資源の開発やイベント等による地域プロモーションなど、地域独自の文化や潜在力を活かした内発的発展による地域づくりや、コミュニティ・デザイン¹の手法を用いて住民主体の内発的発展を促進する動きも活発化している（URL1）。たとえば、島根県隠岐郡海士町（e.g. 平岡・江成 2017；木村 2018；佐野 2020）²や徳島県神山町（e.g. 佐野 2020）³など、先進的な地域発展の事例として取り上げられるもののなかには内発的発展の事例に当てはまるも少なくない。他にも、内発的発展論の概念に地域イノベーションや生態学エコシステム・組織開発論等の理論を組み合わせて、人口減少が進行する小規模自治体における地域発展のモデルを構築した佐野（2020）の研究のように、内発的発展論は多様な理論や手法と混じり合いながら今もなお発展する、地域づくり⁴の代表的理論と見なすことができるだろう。

¹ 「住民が主体性を持って取り組むまちづくりをワークショップを中心とした手法でサポート」（山崎 2016：14）することを通して、「地域に住む人たちが、その地域の課題を自らの力で乗り越える」（山崎 2012：95）プロセスをデザインすることを指す。コミュニティ・デザインに従事する者は「コミュニティ・デザイナー」と呼ばれる。

² 「創造的過疎」をコンセプトに、若いクリエイティブ人材を移住者として地域に受け入れつつ、多様な人材間の化学反応により様々な地域イノベーションが生まれる「場とつながりづくり」を重視した官民協働の取り組みを行う事例である（佐野 2020：93）。

³ 町長のリーダーシップのもと、徹底した行政改革と産業創出によって、地縁集団と移住者等によるNPO/社会的企業が共有のビジョン・価値観により結びつくと同時に、多くの優秀なUIJインターン者の移住や人口減少の抑止を実現した事例である（佐野 2020：109）。

⁴ なお、本論文における「地域づくり」とは、主に地方自治体や地元住民組織、NPO団体等が取り組む、地域の問題や課題を解決ないし克服し、地域住民のよりよく生きる力を高めることで地域の発展をめざす諸々の活動や取り組みを指す。

一方で、時代の変化と共に、内発的発展の捉え方そのものにも変化が見られるようになりつつある。特に、内発的発展論の提唱者である鶴見は、その晩年、地域を個人に潜在する可能性を発現する場として捉え直し、地域に生きる住民の成長の理論として内発的発展論を大きく変化させた（蜂屋 2017 : 23）。こうした議論のなかで、住民一人ひとりの潜在する可能性⁵をいかにして創発⁶するかという問題意識のもと、筆者は鶴見論の特徴から、個人に関する議論に着目し、潜在していた可能性を自覚し、アイデンティティを形成することで人間的に発展、成長する営みを「個人の内発的発展」と名づけて概念化した（松原 2019 : 112）。「個人の内発的発展」を重視した地域づくりの事例には、山形県置賜地方にて展開される「人と地域をつなぐ事業」（梅沢ほか 2020）などがあげられる。こうした取り組みは、地域活性のために住民が自治体に協力する、という従来の地域づくり活動とは異なり、住民の望みや叶えたいことといった個人の内発的な動機を出発点に、地域の内発的発展が促進されていくものである。

では、そうした「個人の内発的発展」に基づく地域づくりはいかにして実践しうるのか。筆者はその手がかりとして「自己教育」に着目する。自己教育とは、人が潜在的に持っている才能や能力などの可能性を十分に用い、実現することを目指す学習活動である。「21世紀においては、自己教育を本質とする社会教育⁷の理論を組み込んだ内発的発展論が求められている」（宮崎・鈴木 2006 : 11）と言われるように、自己教育を地域の社会教育活動に取り入れることは、地域で「個人の内発的発展」を促進する鍵になると考えられる。

また、そうした自己教育を基礎とした地域づくりの先行事例として、本研究では東南アジアの上座部仏教徒の僧侶によって実践される地域開発の取り組みに着目したい。筆者はかつてミャンマー農村部の人道支援活動⁸に参加した経験がある。この活動には現地の僧侶らが多数関わっており、僧侶らは「人には誰しも可能性があり、いかにその可能性を発揮して生きるかが重要である」という考えのもと、「人を変えるのではなく、まず自らが

⁵ 「潜在する可能性」とは、「その人が本来、潜在的に持っていた可能性（才能、能力、価値観、人間性などの資質全般）のこと」を指す。本文中に登場する「潜在的可能性」もこれと同義として扱う。

⁶ 「人々の相互作用によって、予期しないような活動や事業が生まれること」（飯盛 2015 : 38）を指す。

⁷ 社会教育は、広義には「学校教育に対するものとして学校教育以外の教育を包含する概念」であり、近年は2018年に「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策」が文部科学省の中央教育審議会で議論されるなど、地域の「人づくり・つながりづくり・地域づくり」の好循環を生み出す役割として注目されるものである（URL2）。

⁸ ミャンマーで得度を受けた上座部仏教徒の日本人僧侶が主宰するNPOによる活動である。参加者は布施行と呼ばれる物資支援を体験し、活動を通して人道支援のあり方を学んだ。筆者は2006年から2015年にかけて年に複数回この活動に参加しており、ミャンマーを中心に、カンボジアなどに渡航している。

変わる」という仏教思想に基づき、地域住民の潜在する可能性を発掘することから地域開発に取り組んでいた。筆者は、このミャンマーでの学びを活かして個々人が潜在する力を発揮するための人材育成プログラムをその後を開発し、教育現場や企業・自治体等で実践を行っている⁹。上述のような、住民の潜在する力の発掘を重視した仏教的地域開発は、ミャンマーのみならずタイやスリランカ等の仏教国で「開発僧」¹⁰と呼ばれる僧侶らにより取り組まれており、特にタイの^{かいほつ}開発僧による地域づくりに関しては、内発的発展の観点から西川・野田（2001）らにより事例研究の蓄積がなされてきた。

以上の背景および先行研究や事例を踏まえて、本研究では、地域づくりの根源は住民のうちにある可能性を見出し、それぞれの住民が自らの可能性を十全に発揮することであることと捉え、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を基礎とした地域づくりのあり方を追究していきたい。

1.2. 研究の目的とリサーチ・クエスチョン

本研究の目的は「人口減少・少子高齢化など多様な課題を抱える地域における、『個人の内発的発展』を促進する自己教育を重視した新たな地域づくりモデルを模索し、提案すること」である。

そして本研究は、「『個人の内発的発展』を促進する自己教育とはどのようなものか。また、そこから見出された可能性を地域で成長・発展させるためには、行政や社会起業家、NPO等の中間支援団体はどのような関わり方や支援方法が考えられるか」をリサーチ・クエスチョンとし、「個人の内発的発展」を促進することを通して、新しい価値を創造していく「内発的イノベーション」による地域づくりのプロセスを探究していく。そのうえで、「個人の内発的発展」を重視した新たな地域づくりモデルを提案していくこととする。

⁹ アイデンティティの形成を促進するプログラムを考案し、企業研修や自治体が主催する人材育成講座等に提供している。自分がどんな人間かを理解するために、自分の感情や行動に注意を払う習慣を身につけるトレーニングをワークショップ形式で実施している。

¹⁰ 開発僧とは、特にタイやカンボジア等の東南アジア諸国において、仏法に基づき地域の社会開発に物心両面から取り組む上座部仏教の社会行動仏教者を指す。社会行動仏教 (socially engaged Buddhism) とは、「仏教修行によって自らの悟りを求めるのみならず、寺院を出て積極的に社会の諸問題に取り組み、行動していこうという仏教」としてベトナム人僧侶ティク・ナット・ハンにより提唱された概念である (西川・野田 2001 : vi)。

上記のリサーチクエスションに対し、本研究では研究仮説を次のように設定した。「住民同士の相互学習を通じたアイデンティティ形成¹¹を支援する自己教育を地域づくりに導入することで、「個人の内発的発展」が促進される。また、そこから見出された可能性に応じた伴走支援を、行政・中間支援組織・社会起業家などの地域内外の多様なセクターや主体との協働を通して行うことで、住民が他者との関わりを通してその可能性を地域で発揮できるようになり、結果として地域の発展や課題解決にも寄与していく」。

1.3. 研究の方法

先にも述べた通り、本研究の目的は、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりモデルを提案することである。そこで本研究では、文献研究や先行事例の調査を通して仮説的地域づくりモデルとなるプロトタイプ（原型モデル）を構築したうえで、社会実験を通してその検証を行い、実践から得られた知見を踏まえて最終的なモデルを提案する。

プロトタイプを示すにあたっては、住民の潜在的可能性に着目した内発的発展論を展開した鶴見和子の論考と、人々が可能性を発揮していくことを目指す自己教育に関する理論を整理し、理論的枠組みと位置付ける。さらに、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりの先行事例として、ミャンマーの^{かいほう}開発僧による地域開発の事例に着目し、調査研究を通して実践枠組みを構築していく。調査研究では、現地にて^{かいほう}開発僧を対象にした半構造化インタビューを行い、その結果をインタビュー分析の代表的な手法である M-GTA¹²を用いて分析することで、^{かいほう}開発僧による地域づくりのプロセスやその詳細を明らかにし、日本での地域づくり想定した実践枠組みを提示する。以上の理論的枠組みと実践枠組みの検討を踏まえ、プロトタイプを仮説的に提示する。また、プロトタイプ内に示される自己教育プログラムの具体的な実践方法を検討するにあたっては、筆者が考案した研修プログラム「わたし研究室」に着目し、それが「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムとして有効である可能性を示す。

¹¹ 本研究では、アイデンティティ形成について、青年期におけるアイデンティティの確立に向けた営みはもちろん、すでに自覚しているアイデンティティの問い直しや新たなアイデンティティの発見など、成人期におけるアイデンティティの再形成の意味を含むものとして扱う。

¹² M-GTA は、質的データ分析法の代表的な手法のひとつであり、多様なメカニズムを把握し理論構築を行う方法論とされる（木下 2003 : 89）。詳細は第 3 章第 4 節第 1 項に示す。

続いて、筆者が大阪府豊能町にて実施する女性活躍人材育成事業「とよのわたし研究室」を社会実験の場と位置付け、プロトタイプの検証を行う。社会実験とは「現代社会に生成する問題の発見・解決に向けて実践活動を通じてアプローチを行うこと」（三田 2015:3）である。本研究における一連の社会実験は、「研究者が実践者の一人となり、現場に寄り添いながら活動を進めるスタイル」（長島 2015:48）の研究であるアクション・リサーチの手法を用いることとした。アクション・リサーチには、目標とする社会的状態の実現へ向けた変化を志向した広義の工学的・価値懐胎的な研究であること、そしてその目標状態を共有する研究対象者と研究者による共同実践的な研究であることという特徴がある（矢守 2016:48）。これらの手法を用いることで、あくまでもいち実践者として、現場と実践を往復した研究に徹する、という研究に向かう姿勢を重視していく。さらに、プロトタイプの検証にあたっては、質的データ分析法に基づく受講生の語りの分析や、仮説と実践結果との照合を行うものとする。併せて、実践を通して見出された地域づくりモデルを考案するうえでの要件についても検討を行っていく。

最後に、ここまでの論考を統合し、プロトタイプを改訂して、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりの道筋を示した「内発的イノベーション地域づくりモデル」を提案する¹³。

1.4. 研究の意義

本研究の意義は、次の4点である。1点目は、内発的発展の地域づくりに関する研究において、これまで十分に議論されてこなかった住民の潜在的可能性を地域で発掘・発揮する具体的な手立ての提示を試みる点である。

2点目は、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりモデルを提案することを通して、日本の各地域が抱える地域の担い手不足や地縁的なつながりの希薄化等の課題解決に資することである。「個人の内発的発展」が地域で促進されることで、結果的に地域の担い手が増え、地域課題の解決につながる営みもまた副次的に生まれることが期待される。

¹³ 本研究の前段となる研究は、研究ノート（博士資格論文）として同志社政策科学研究に投稿し、すでに掲載済である（第21巻第1号、2019年8月）。この研究では、文献調査に基づき、鶴見の論考とタイの開発僧による地域開発事例から「内発的イノベーション地域づくりモデル」の前身となる「内発的イノベーションモデル」を提示した。また、ミャンマーでの調査研究については、2019年3月に地域活性研究に掲載されている（第12巻）。

3 点目は、本研究の理論的枠組として鶴見和子の内発的発展論を発展的に継承することである。後述するように、鶴見は住民の潜在的可能性に着目した地域発展論を展開した社会学者である。しかしながら、その理論を現実化する具体的な手立ては明らかにされておらず、鶴見の内発的発展論における残された課題のひとつとなっている。本研究は、鶴見の目指した住民の可能性に着目した内発的発展を実現するひとつの道筋を示すものとして、鶴見論のさらなる発展に寄与できるものとする。

4 点目は、住民の潜在的可能性の創発を基礎に置いた地域づくりの先行事例として、ミャンマー^{かいほつ}開発僧による地域開発の事例に着目し、そのプロセスや構成要素といった枠組みを日本の地域づくりに取り入れるという新たな試みを行う点である。^{かいほつ}開発僧による地域開発に関する研究は、内発的発展の事例のひとつとして着目されてきたものであるが、その知見を日本の地域づくりに応用する試みは管見の限り見当たらない。社会的・文化的背景の異なるミャンマーの地域づくりを参照することで、地域の固有性を超えて適応可能な、普遍性の高い地域づくりモデルを構築することが可能になると考えられる。以上の意義を果たすために、研究を進めていくこととする。

1.5. 本論文の構成

本論文は全 7 章から成っている。

第 1 章では、本研究の枠組みを示している。

第 2 章では、住民の潜在的可能性に着目した地域づくり論の先行研究として鶴見和子の内発的発展論に焦点を当て、本研究で提案する地域づくりモデルの理論的枠組みを提示する。第 1 節では、1970 年代に提唱された内発的発展論が今日に至るまでどのように議論されてきたのか、内発的発展論の変遷を整理する。第 2 節では、内発的発展論のなかでもとりわけ人間の可能性に着目した議論として鶴見の論考に着目し、その原点から晩年に至るまでの論考を整理したうえで、個人の潜在的可能性が地域発展の起点になることを示した晩年の鶴見論が本研究の理論的枠組みになることを示す。

第 3 章では、「個人の内発的発展」を促進する取り組みとして、自己教育に着目する。第 1 節では、その理論を概観し、地域の社会教育に導入することの意義を述べる。続く第 2 節以降では、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりの実践例としてミャンマーの^{かいほつ}開発僧による地域開発に着目し、その地域づくりのプロセスをフィールド調査から明らかにしていく。第 2 節では、^{かいほつ}開発僧による地域づくりの特徴を先行研

究に基づいて概観する。第3節では、ミャンマーの社会的背景について文化的・思想的な特徴を中心に概観したうえで、現地で実施したフィールド調査の概要と調査方法を示す。

第4節では、フィールド調査で実施した^{かいほつ}開発僧・村人インタビューの調査結果を分析し、^{かいほつ}開発僧による地域開発のプロセスや詳細を明らかにする。そして第5節では、日本での実践を想定した地域づくりモデルのプロトタイプ（原型モデル）生成を行う。

第4章では、筆者が考案した研修プログラム「わたし研究室」に着目し、それがプロトタイプに示した「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムとして機能する可能性を示す。第1節では、「わたし研究室」の提供団体である一般社団法人こころ館について概観する。第2節では、「わたし研究室」で用いる技法の概要を述べる。そして第3節では、「わたし研究室」の枠組みを示し、「個人の内発的発展」を促進する可能性を示す。

第5章では、プロトタイプに準ずる地域づくりの実践事例として、筆者が大阪府豊能町で取り組む女性活躍人材育成事業「とよのわたし研究室」を基礎とした地域づくり事業に焦点を当て、その実践を社会実験として位置づける。第1節では、豊能町の概要と地域づくりにおける課題を示す。第2節では、「とよのわたし研究室」の概要を示す。

第6章では、社会実験の結果に基づきプロトタイプの検証を行うとともに、社会実験を通して見出された地域づくりの要点を考察していく。第1節から第4節では、プロトタイプに示した仮説の検証を行い、その結果に至った要因についても併せて分析・考察していく。そして第5節では、社会実験全体をふり返り、プロトタイプには示しきれていなかった要件について考察し新たな可能性について示唆する。

第7章では、ここまでの論考を総括してプロトタイプのモデルを改訂し、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりモデルとして「内発的イノベーション地域づくりモデル」を提案する。第1節では、モデルの概要を示す。第2節では、モデルの枠組みを示す。第3節では、モデルの機能条件を示す。そして、第4節では、モデルを導入することによって期待される効果を示す。

最後に、第8章では、本研究の意義と結論、および課題と展望を述べる。第1節では、結びとして本研究の結論を述べる。第2節では、本研究の意義を述べる。第3節では、本研究がソーシャル・イノベーションの創出に資する可能性を述べる。そして、第4節において、今後の課題と展望を述べていく。

以上の流れに沿って本論文を展開していくこととする。

1.6. 鍵概念

本研究に登場する鍵概念とその定義を、表1に示す。

表1 本研究の鍵概念とその定義

概念名	本研究における定義
個人の内発的発展	潜在していた可能性を自覚し、アイデンティティを形成することで人間的に発展、成長すること（松原2019:112）。
内発的イノベーション	「個人の内発的発展」を促進することを通して、新しい地域の価値を創造していくこと。
潜在的可能性	本人が自覚していない、才能、能力、価値観、人間性などの資質全般。
自己教育	地域住民がその自己疎外を克服して主体形成を遂げようとする学習活動（鈴木 1992:42）。自己実現（才能や能力・潜在能力を十分に開拓すること）を目的とする。
開発（かいほつ）	社会や個人が本来のあり方や生き方に目覚め、共生のために、自らの潜在能力を開花させ、人間性を発現していく物心両面における内発的な実践（西川・野田2001:19）。
心の開発（かいほつ）	瞑想法などによって、自分自身を知っていくことで、本来備えていた潜在能力を発現していく実践（西川・野田 2001：21-2）。
アイデンティティ	自分が何者であり、社会の中でどのように位置付けられる存在であるかという自己定義。
活動人口	社会活動に参画する人口（長野県 2013:69）。
関係人口	長期的な「定住人口」でも短期的な「交流人口」でもない、地域や地域の人々と多様に関わる者（総務省2019:31）。
社会関係資本	個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範（Putnam 2000 [訳 2006:14]）。

2. 「個人の内発的発展」を重視した内発的発展論

本章の主題となる内発的発展論は、1970年代の半ば、当時主流であった近代化論に対抗して生み出された社会理論である。内発的発展、すなわち「各地域固有の資源をベースとして、それぞれの地域の固有伝統、文化に基づきつつ、地域住民の主導により進められる発展パターン」（西川 2004：37）を志向するこの議論は、これまでの日本の地域づくりに関する議論に数々の影響を与えてきた。そのなかでも、社会学者の鶴見和子が展開した内発的発展論は、「それぞれの個人の人間としての可能性を十分に発現できる条件を創り出すこと」（鶴見 1980：193）を目指して提起されたものであり、さらにその晩年には『『自分を変え』、自分の中の可能性を引き出す理論』（西川 2011：411）として展開されたことで知られる。そうした鶴見の議論からは、本研究が目指す住民の潜在的可能性の創発を重視した地域づくりのあり方を検討するにあたって、多くの示唆が得られると考えられる。

そこで本章では、内発的発展の概念を理解するために、まずはこれまでの内発的発展論の展開を概観する。そのうえで、改めて鶴見の内発的発展論に立ち返り、本研究における地域づくりの理論的枠組みとして整理していく。

2.1. 内発的発展論の登場と展開

内発的発展論が登場した背景には、当時主流であった「西欧的近代化論の直輸入に対する批判」と、その反動としての「非西欧社会における独自の価値伝統の再評価」（西川 1989：5）という2つの動向がある。経済成長という一元的な発展パターンを想定した近代化論に対し、内発的発展論は地域に応じた多元的な発展を尊重し、経済的発展と同時に文化的・社会的発展にも注意を払うものであることにその特徴がある（西川 2004：37）。そこで本節では、主な内発的発展論の議論を辿りながら、その登場から現在に至るまでの展開を概観していくこととする。

松本（2017）によると、内発的発展論が生まれた社会背景には、主に次の2点がある。1点目は、南北格差問題である。この時期には、格差の原因になったとされる、欧米主導で作り上げられた国際分業体制への不満が第三世界の国々を中心に高まった。南北間の格差問題は、近代化論に代表される従来の発展論への疑問を生み出すとともに、欧米以外の社会が有する伝統や価値への着目を促す契機となり、格差の解決に向けた新たな発展モデルの模索が始まる（松本 2017：2）。2点目は、1960年代後半以降に注目が高まった環境問題である。日本の水俣病をはじめとする公害問題の拡大や、アメリカの海洋生物学者で

あるレイチェル・カーソン (Carson, Rachel, 1907-1964) が 1962 年に出版した *Silent Spring* (Boston: Houghton Mifflin 邦訳『沈黙の春』) の登場により、それまで目指されてきた経済発展の負の側面に焦点が当たることとなった。さらに、1972 年には地球資源の有限性に着目したローマクラブのレポート *The Limits to Growth: A Report for the Club of Rome's Project on the Predicament of Mankind* (London: Pan Books 邦訳『成長の限界』) が発表されたことで、欧米型モデルに準ずる開発は、自然環境、ひいては人類の生活の持続可能性と相容れぬものであるという認識が広がっていった (松本 2017 : 2)。

このような世界的情勢のなかで、近代化論への対抗理論として誕生したのが内発的発展論であった。「内発的発展」という言葉を初めて用いたのは 1975 年の発表されたスウェーデンのダグ・ハマースキョルド財団の報告書 *What Now* (邦題『なにをなすべきか』) とされる (西川 1989 : 3)。同報告書の中では、当時主流であった近代化論に基づく発展に対置される「もう一つの発展 (Another Development)」のあり方として、「内発的 (endogenous)」という言葉が「自力更生 (self-reliance)」¹⁴と並んで用いられた (Dag Hammarskjöld Foundation 1975 : 34)。

同報告書は、今後の望ましい「もう一つの発展」を検討するなかで、「もし発展が、個人として、また社会的存在として、解放と自己展開をめざす人間の発展であるとするならば、このような発展は事実上、それぞれの社会の内部から発現するものでなければならない」とし、発展とは、あくまでも内発的なものでなければならないと言及している。そして、発展を「人間集団が、自分たちのもつもの—自然環境、文化遺産、男女のメンバーの創造性—に依拠し、他の集団との交流をとおして、自分たちの集団をより豊かにすること」と定義し、そうすることによって「それぞれの発展の様式と、生活の様式とを、自律的に創り出すこと」が可能になるとしている (Dag Hammarskjöld Foundation 1975 : 34 [訳=鶴見 1989 : 8])。こうしたハマースキョルド財団が示す内発的発展は、国民よりも地域住民のレベルを重視している点や、各地域共同体の直面する問題を、各地域特有の生態系に適合したかたちで解決するところから出発するべきであることを説いている点にその特徴がある (鶴見 1996 : 9)。

さらに、ハマースキョルド財団が内発的発展を提唱した翌年の 1976 年、社会学者の鶴見和子により独自の内発的発展論が提起された。鶴見は、近代化論が示す経済成長を軸とし

¹⁴ 当該社会のおかれた自然的・文化的環境の下で、社会の構成員や内部の資源を活用して発展すること (Nerfin 1977 : 10-1) を意味する。

た一元的な発展モデルを批判し、「それぞれの地域の住民の創意工夫によって自分たちの自然環境に合った、自分たちの文化的な伝統に見合った、そして人びとの生活の必要に応じた発展をそれぞれちがうかたちで、それぞれの地域でやっていくことが必要」（鶴見 1997 : 16-7）として、各地域のリソースや歴史的・文化的背景に応じた多系的発展を推奨する立場をとった。そして、「西欧をモデルとする近代化論（中略）がもたらすさまざまな弊害を癒し、あるいは予防するための社会変化の過程」（鶴見 1989 : 43）として独自の内発的発展論を展開していく。鶴見が示した内発的発展の定義は次の通りである。

内発的発展とは、目標において人類共通であり、目標達成への経路と、その目標を実現するであろう社会モデルについては、多様性に富む社会変化の過程である。共通目標とは地球上のすべての人々および集団が、衣・食・住・医療の基本的必要を充足し、それぞれの個人の人間としての可能性を十分に発現できる条件を創り出すことである。それは、現在の国内および国際間の格差を生み出す構造を、人々が協力して変革することを意味する。そこへ至る経路と、目標を実現する社会の姿と、人々の暮らしの流儀とは、それぞれの地域の人々および集団が固有の自然生態系に適合し、文化遺産（伝統）に基づいて、外来の知識・技術・制度などを適合しつつ、自律的に創出する。地球的規模で内発的発展が展開されれば、それは多系的発展となる。そして、先発後発を問わず、対等に、相互に手本交換をすることができる（鶴見 1980 : 193）。

1979年、鶴見は上智大学の国際関係研究所で内発的発展研究会を組織し、他分野の研究者らと共に内発的発展論を発展させていく。日本における内発的発展論は、鶴見を中心とする学際的なグループの系譜と、そこから派生しつつも一定程度批判的な立場をとる、経済学者の宮本憲一らのグループとに分かれ、その後はそれぞれの系譜ごとに理論的な深化や実践的な広がりを見せしてきた（松本 2017 : 3）。このように、今日に至るまで、内発的発展論は経済学、社会学、政治学、歴史学、自然科学など多様な学問領域に展開され、議論が進められている（熊倉 2011）。

また、欧米主導の近代化論に相対する理論として提起された内発的発展論であるが、昨今は従来のトップダウン型の開発政策とは異なる地域特定のボトムアップ型の開発として、「ネオ内発的発展論（Neo-Endogenous Development）」と呼ばれ、EU諸国においても注目を集めるようになってきている。ネオ内発的発展論の中心的な論者である C. レイ（Christopher Ray）は、本議論の鍵概念として地域の内と外をつなぐ「中間組織」や実質的な担い手であるアクター（行為主体）間の「パートナーシップ」を強調する（Ray 2001 :

11) 。このように、ネオ内発的発展論において外部との連携が強調された背景には、「どの地域にも外来的な力と内発的な力は存在しており、地方レベルでは地方と外部が相互に関係し合わなければならない」（小田切 2011：1）とあるように、地域の内発性のみを偏重するのではなく、地域外部の持つ作用力を認識し、利用することを重視する考えがある。このようにネオ内発的発展論は、地域に重点を置きつつ、内発的発展の原則を政策化することで地域を超えたアクターとの連携を目指すものという特徴がある（糸林 2019：4）。

ネオ内発的発展論のように、外部アクターとの連携を強調した内発的発展論は、近年の日本の地域づくりにもしばしば見られる議論となっている。たとえば、2019年に国土交通省が作成した日本の地域づくりに関する報告書には、従来型の内発的発展のように地域住民の主体的な取り組みを強調するだけでなく、「地域の主体性を前提としつつも、外部アクターとの連携を強調する新しい内発的発展」についての議論が散見される（URL3）。このように、内発的発展論は、時代に応じた議論を展開しながら、現代に至るまで日本の地域づくりの方策に根強く影響を与える議論のひとつとして位置づけられるものである。

2.2. 個人の可能性に着目した鶴見和子の内発的発展論

ここまで、内発的発展論が登場した背景と、日本における内発的発展論の展開について概観した。なかでも鶴見が示す内発的発展論は、「それぞれの個人の人間としての可能性を十分に発現できる条件を創り出すこと」（鶴見 1980：193）を目指して提起されたものであり、その晩年には「『自分を変え』、自分の中の可能性を引き出す理論」（西川 2011：411）として展開されている。そうした鶴見の議論は、本研究が目指す住民の潜在的可能性を活かした地域づくりのあり方を検討するうえで、多くの示唆を与えるものと推測される。そこで本節では、鶴見の思想をたどりながら、鶴見が人の可能性に着目する議論をどのように展開していったか、そして内発的発展論を「自分の中の可能性を引き出す理論」としていかに展開していったのかを概観していく。

2.2.1. 鶴見論の原点の模索

内発的発展論を提唱する以前の 1950 年代、鶴見は「生活記録運動」に精力的に取り組んでいた。「人間の内発的な成長のあり方の探究」（山本 2017：39）を目指したこの実践は、のちに提唱する内発的発展論に大きく影響を与えたと筆者は考える。本項では、鶴見

が人の可能性に着目するようになったきっかけとして生活記録運動の実践に着目し、鶴見の思想的原点を見出していきたい。

戦後の1950年代、鶴見はヴァッサー大学で学んだデューイの「コモン・メンズ・フィロソフィ」（ふつうのひとびとの哲学）の精神を基盤に、東北の教師たちによって展開された子どもの主体形成の教育理論・運動実践である「生活綴方教育」に影響を受け、大人の生活主体としての再形成を促す生活記録運動を推進していった（須賀 2014 : 36）。

生活記録運動とは、「歴史をつくる国民が、国民の歴史を書き、書くことをとおして自分たちをつくりかえていく運動」である、と鶴見は述べている（鶴見 1998 : 527）。この生活記録運動の取り組みには、労働者階級や農家などの庶民と言われる女性らが参加していた。「畑で、工場で、家の中で、働いてきた。今も働きつづけている。（中略）家庭でも職場でも、女の方が男よりわりのわるい立場に立たされている」（鶴見 1998 : 309）という一文に現されるように、当時の女性は社会的にも弱い立場におり、家事労働や内職などに追われながら、抑圧的な生活を送っていたことがうかがえる。鶴見は、そんな女性たちのことを「自分の生活実感をもとに社会を変えることができる人」と位置づけており、女性たちが高い生活意識を持つことで「新しい社会を切り拓く大いなる可能性」（須賀 2014 : 37）があると信じていた。そこで鶴見は、彼女たちが自らの生活を記録することを通して、自分や周囲の人々が直面する課題と向き合い、自らの「人格再形成、思想再形成」（山本 2017 : 43）に取り組む場として、生活記録運動の会である「生活をつづる会」を主宰したのである。「生活をつづる会」について、鶴見は次のように説明する。

「生活をつづる会」は、さまざまな地域の主婦や、いろいろな職場で働く娘や、わたしのような自由人のあつまりです。それぞれにちがった暮らし方、考え方、感じ方を裸になって出し合い比べ合うことによって、お互いに刺激を与え合うと同時に、ちがった立場の人たちが、共通の問題意識をもって、いっしょに問題を解決していく心のつながりを持つことが、わたしたちの目標です（鶴見 1954 : 34）。

上述のように、「生活をつづる会」では、女性たちが生活のなかで実感していることをありのままに書き綴り、綴ったものを互いに読み合うことを通じて自分の思いをかたちにする実践を行っていた。このような実践を、鶴見は「なによりも『よりよく生きるために書くこと』であり、『自己改造』のための教育手段として位置づけていた」（和田 2003 : 81）とされる。また、「人々の生き方を問うだけではなく、鶴見もまた、人々とともに学

び、体験を仲立ちにして、自らの研究者としての行為をも問い直した」（猿山 2011 : 15）とあるように、鶴見また「自己改造」を行う実践者の一人であったことがうかがえる。

こうした「生活をつづる会」の特徴のひとつとされるのは、共同学習を通じた対話による、相互探求的なコミュニケーションであろう。「自分ひとりで考えていると、ものごとのかんげいや、イミが、わからないのだが、集団の中にもちこんで、書いたものを発表し、みんなで討論しあっているうちに、だんだんに、事物のかんれん性、体験の共通性、出来事の起こってきた条件や原因がはっきりしてくる。そうしたときに、できごとの本質的なイミがわかってくる」（鶴見 1998 : 337）と鶴見が述べるように、「自己改造」は自分ひとりの世界では完結できないものであり、他者との交流を通じて促進されるものとわかる。集団学習を通じた「自己改造」は、自分と他者とのつながりを実感する機会となっており、「自分のよろこびやかなしみが、自分の仲間のよろこびやかなしみにつながっていることを自覚し、そのように行動できる人間」（鶴見 1998 : 366）を育むことにも寄与していたことがうかがえる。

このように、生活をつづるという実践を通じて、鶴見は当時の女性たちが「『あたらしい女性』になること、すなわち抑圧体系であった封建的遺制である『家』から解放されて、自己確立すること」（和田 2003 : 81）を目指していた。一連の実践からは、一人ひとりを変容し自己解放・自己確立を遂げていくことが、草の根から社会を変える第一歩であるという鶴見の思想を読み取ることができる。その前提には、人は誰もが社会を変える主体であり、社会を変える可能性を持っているという信条があったものと推測される。のちに鶴見が、人間の成長を目標に、人が持って生まれた可能性を十全に発揮できる社会を目指す内発的発展論を発表した背景には、こうした実践の影響が少なからずあったと考えることができよう。

ここまで、内発的発展論を提唱する以前の鶴見に着目し、その思想形成の原点になったと考えられる生活記録運動について述べた。社会学者として知られる鶴見であるが、上記の取り組みの様子からは、社会変動を志向したひとりの実践者としての姿がうかがえる。

2.2.2. 社会変動論としての内発的発展論

生活記録運動に従事したのちの 1962 年から 1966 年、鶴見はアメリカのプリンストン大学で社会学を専攻し、近代化論と社会変動論を学ぶこととなる。そして帰国後には、上智大学国際関係研究員に就任し、近代化論の再検討を進めてきた。その過程で鶴見は、西

欧型の画一的な発展モデルに疑問を抱くようになる。「それぞれの地域で、それぞれ違う形、それぞれ違う経路の発展があつていい。だけど非常に大事なことは、近代化は経済発展、経済成長が指標で、それによって測る。ところが内発的発展は人間の成長が目標で、持って生まれた可能性を十全に発現するような社会を目指す。そうすると経済成長は条件であつて、指標じゃない。目的じゃないのよ。目的は人間がそれぞれ持って生まれたものを、思いきり発現することなの」（中村・鶴見 2002：37）と述べるように、鶴見はそれまで学んだ近代化論に対置するかたちで内発的発展論を提唱した。

鶴見は自身の内発的発展論を「それぞれの地域の生態系に適合し、地域の住民の生活の基本的必要と地域の文化の伝統に根ざして、地域の住民の協力によって、発展の方向と筋道をつくりだしていくという創造的な事業」（鶴見 1999：32）と特徴づけ、同時に「発展の政策および戦略にかんするだけでなく、より身近な、暮らしのスタイルの工夫にも関わり、人々がなにを楽しみくらしと感じるかの、生活の感覚および価値観にあいわたってこれまでの画一的な近代的生活様式を根底から考え直そうというラディカルな提案」（鶴見 1996：11）とも表現している。このことは、内発的発展論が、政策や国家戦略などのマクロレベルから、市井の人々生活様式といったミクロレベルまでを想定した射程範囲の広い理論であることの表れとも言えるだろう。

こうした鶴見の内発的発展論は、鶴見と普段から親交のあった柳田國男の民俗学に大いに影響を受けて構築されたものである。その影響が見られる点ひとつには、社会変動論の担い手としての「常民」の概念が挙げられる。柳田は、社会変動論の担い手となるのは、知識人（鶴見の表現を借りれば「書き言葉を中心として生活し、話し言葉も書き言葉によって支配されている人」）よりも常民（「話し言葉を中心として生活し書き言葉をもたない人」）であることを主張した（鶴見 1977：7-9）。柳田は、近代化論の「原始—古代—中世—近代」というはっきりした時代区分に対して否定的な立場をとり、もしその区分から世の中を見た場合には、常民の生活や思想・感性の変化がとりこぼされてしまうことを懸念している（鶴見 1977：27）。なぜならば、常民のなかには、現代的な生活を送る人もいれば、前近代に近い生活を送る人もいるからである。それらの人々が同じ時代に共に存在していることを捉えた柳田の視点を、鶴見は長さの違うつららが垂れ下がっている状況に例えて「つららモデル」と表現した（蜂屋 2017：17）。このような柳田論を援用することで、画一的な近代化の生活様式を根本から考え直す方法論を編み出すことができると考

えた鶴見は、従来の発展論において軽視されてきた常民の文化や伝統に着目し、それを問題解決の重要な糸口としようとした（小栗 2005 : 22）。

以上のように、鶴見は日本独自の社会変動論、そして人間発展論として内発的発展論を展開していった¹⁵。この時点での鶴見の内発的発展論は、「国家よりも小さな地域の自律性に基づいて創出される発展の在り方があり、先発・後発を問わず、相互に、対等に、活発に手本交換が行われる『多系的発展』」（蜂屋 2017 : 23）を志向する理論、すなわち従来の近代化論によってもたらされた画一的な発展モデルに対抗する社会変動論としての性格が強かった。その後、5年にわたる水俣病患者の聞き取り調査や南方熊楠研究などにも影響を受け、その理論は「『自然と人間』の本質から捉えた人間論」（須賀 2014 : 43）、そして「地域に生きる住民の成長の理論」（蜂屋 2017 : 23）として展開されていくこととなる。のちに鶴見が自身の内発的発展論について「人間の内発性、それを軸にして社会変動を考える、それが内発的発展論である」（鶴見 1999 : 342）と述べるように、鶴見の理論は「個人の生活の自律性確立に始まって、自分のうちなる可能性を引き出す人間発展、そして、個々の人間発展を通じて社会発展を導く理論」（西川 2011 : 16）、すなわち地域に暮らす個人の力が社会の構造に影響することを論じた、個を起点とする社会変動論として展開していった。こうした鶴見論の展開は、前章で言及した「生活記録運動」を彷彿とさせるものであり、個人が社会に与える影響への関心、ひいては、ひとりの人間が持つ可能性に対する関心が、一貫して鶴見論の根幹をなしている様子がうかがえる。

2.2.3. 個人の発展を重視した内発的発展論

社会変動論としてはじまった鶴見の内発的発展論であるが、「内発的発展における『発展』とはほかならぬ人間の成長 (human development) をさしている」（川勝 1999 : 352）とあるように、その関心があくまでも人間の成長にあることは、先にも述べた通りである。鶴見の内発的発展論における「個人の発展」に関する論考に着目した松原（2019）は、鶴見が示す個人の発展を「個人の潜在的に持っていた可能性が創発されることで、新たなア

¹⁵ こうした鶴見の内発的発展論は、発展の単位を地域とした点や、地域固有の自然生態系との適合、外部と交わりながら地域の文化遺産（伝統）に基づいた創造を行うことに言及した点で、同時期に内発的発展の概念を提唱したハマーショルド財団のものと共通点が見られる。鶴見は、自身が内発的発展論を提起した時点ではハマーショルド財団が報告書の中で「もう一つの発展」という言葉を使っていたことを「知らなかった」と述べているが（鶴見 1989）、一方でその概念が自身の内発的発展と非常によく似ていることに言及しており、鶴見の内発的発展を違う言葉で言えば「もう一つの発展」とであると認めている（鶴見 1999 : 329）。

アイデンティティが形成され人間的に成長すること」と捉え、「個人の内発的発展」として概念化を行った（松原 2019 : 112）。そこで本項では、鶴見の内発的発展論の人間発展論としての側面に着目し、とりわけ、内発的発展の起点となる可能性の創発に関連した議論を概観していくこととする。

鶴見の内発的発展論の特徴を整理した川勝（1999）によると、鶴見論の特徴は 12 点にまとめられる（表 2）¹⁶。その内容を見ていくと、12 項目のうち（3）（4）（5）（8）が、可能性の創発について何らかの言及がなされていることがわかった。

表 2 鶴見の内発的発展論の 12 の特徴（川勝（1999）を参考に筆者作成）

1	内発的発展論は生命あるものを対象とし、生命論としての特徴をもっている。生命はその本質において自律的である。人間は他人の生命を生きることにはできない。自己の生命を自己の責任においてまっとうする以外にない。
2	内発的発展論は森羅万象を開かれた性格をもつものとみなしており、それを分析する方法論も閉じられた体系ではない。生成する体系である。生命は自己完結性を志向し、自己完結的ではあるが、完全には自己完結しえない。内発的発展論は自律する固有の生命体に焦点をあてつつも、それをつつむ自然との関係を不可分の対象としており、生成する開かれた体系である。
3	内発的発展論は創造の過程を対象としており、創造とは何かを理解する方法論である。創造とは自己のうちにある可能性が発現することである。
4	内発的発展論は関係性をみる。外部との関係性の中から固有の形を探り当てるところに内発的発展論の特徴がある。また異なる地域の発展系列のネットワークの可能性を探る方法論でもある。
5	内発的発展論はアイデンティティ論である。アイデンティティを探求する方法論でもある。
6	内発的発展論の最大の対象は人間であり、人間論としての特徴を持つ。内発的発展における「発展」とは他ならぬ人間の成長（human development）を指している。
7	内発的発展論はリーダーシップとは何か、指導者とは何かを「不条理な苦痛を軽減し人間の成長に資する」という指標の元に明らかにする指導者論である。
8	内発的発展論は危機を対象とし、危機を克服するダイナミック・セオリー（動態論）である。危機を克服しようという確信のもとに、危機の実態を真正面から明らかにする危機の理論である。
9	内発的発展論の分析単位は地域である。内発的に発展するのは人間であるが、人間は地域文化の刻印を押された具体的存在である。人間と生態系とを一体としてとらえる地域の理論はどこまでも具体相のもとにとらえられる。
10	内発的発展論は多様な地域性、多様な発展系列、多様な人間群像を寿ぐ価値多元論である。
11	内発的発展は地球志向をもつ。あるいは全体性を視野に入れた発展論である。地球を全体としたときの部分にあたるのが地域である。部分の中に全体が宿っているという立場を徹底し、多即一、一即多の世界観を宗教的観点からみればアニミズムになる。
12	内発的発展論の原型は西欧ではなく、日本やアジア発の理論である。

（3）では、内発的発展論を「創造とは何かを理解する方法論」（川勝 1999 : 350）であるとして、次のように解説している。

内発的発展論は創造の過程を対象としており、創造と何かを理解する方法論である。創造とは自己のうちにある可能性が発現することである。みずからのうちにある可能性がたちあらわれてくる。最近の言葉でいえば創発（emerge）である。潜在している生命の力、自己の可能性が自覚され、それが顕在化してくるところに真の創造のいとなみがある。（川勝 1999 : 350）

¹⁶ 川勝がまとめた内発的発展論に関する解説を見て、鶴見は「こんなふうに私の内発的発展論を読みこんでくださった方は、いままでになかったんです。（中略-筆者-）じつに的確に、しかも明確に鋭く書いていただいた」（川勝・鶴見 2008 : 42）と絶賛した。よってこれらの 12 の特徴は鶴見の内発的発展論の特徴を包括したものとしてある程度の妥当性があると言える。

上記の一節は、内発的発展論が「潜在している生命の力、自己の可能性」が顕現する過程に着目した理論であることを裏付けるものとも言えるだろう。これに続いて川勝は「発展は与えられるものではない。自己のうちにある生命力や可能性を自覚的に創発させる自己啓発の努力である」（川勝 1999 : 350）と述べており、「自己のうちにある生命力や可能性」を能動的に発揮しようとすることは、鶴見論における「発展」そのものであることが読み取れる。

さらに鶴見の内発的発展論からは、そうした可能性が創発する際、どのような要素が影響を与えているのかについても示唆を得ることができる。下記に示す(4)の一節からは、うちにある可能性は、外部との出会いによって創発することが読み取れる。

内発的発展論は関係性をみる。(中略)潜在しているものが創発する契機は、自然、人、文物、情報、思想など何ものか外部との出会いである。開かれていなければ出会いの刺激はなく、可能性は隠れたまま潜在してしまい、創造につながらない。外部との出会いがきっかけになり、刺激となって、外的要素と自己との緊張関係をとおして、うちにある可能性が創発する。(川勝 1999 : 351)

「開かれていなければ出会いの刺激はなく、可能性は隠れたまま潜在してしまい、創造につながらない」という一節からは、可能性を顕在化するためには、他者や新たに出会うものごとを遮断せず受け取り、自己を外部に開くことが求められるとわかる。

さらに、続く(5)では、内発的発展は「内部の生命力や可能性が顕現してくる過程」（川勝・鶴見 1999 : 351）であることが説明されている。

内発的発展論はアイデンティティ論である。内発的発展とは外部との接触によって内部の生命力や可能性が顕現してくる過程である。それは可能性の自覚である。自己の可能性が発現し、力が自覚されれば、人間は自立する。それは自己発見でありアイデンティティの確認である。内発的発展とは人間の自覚の深まりであり、社会的自立・精神的自律の高まりであり、個性としてのアイデンティティの確認である。内発的発展論はアイデンティティを探求する方法論でもある。(川勝 1999 : 351)

上記において、川勝は、「可能性が発現」することを「自己発見でありアイデンティティの確認」と言い換えている。すなわち、内発的発展論において、可能性が発現することと、新たなアイデンティティを発見することは、ほぼ同義の扱いであると考えられよう。このことから、アイデンティティの探求を行うことは、潜在的可能性を発掘する道筋のひとつであることが示唆される。

最後に、潜在的 가능성이顕現するもうひとつの契機として挙げられるのが、(8)に示される「危機」である。

内発的発展論は危機を対象とし、危機を克服するダイナミック・セオリー（動態論）である。（中略）危機に際してこそ、それまで気づかれずに眠っていた可能性や力が目覚める（中略）。潜在している力が発現してくるさまは human development 人間の成長という意味の「発展」概念がぴったりである。（川勝 1999：353）

ここでいう「危機」とは、外発的開発によってもたらされた環境汚染や経済崩壊等、地域の存続を揺るがす困難を指すものと考えられる。内発的発展論は「危機を克服する力の存在をさぐりだしてみせ、危機の実態を見さだめ、その解決の方向性を示す」（川勝 1999：353）とあるように、危機に直面することで、その危機を克服するために、それまで意識されていなかったうちなる可能性が引き出されるものと考えられる。

ここまで、川勝の論考を参照しながら、鶴見の内発的発展論における可能性の創発に関連した議論を概観してきた。川勝が示した鶴見論の12の特徴（表2）のうち、残る（1）（2）（10）（11）は、内発的発展のあるべき姿を示した項目であると考えられる。具体的には、内発的発展は自律的であること、森羅万象に開かれたものであること、価値多元性を肯定すること、地球志向であること、といったものである。（6）は、内発的発展の最大の対象が人間であることを示した項目、（9）は内発的発展論の単位が地域であることを示した項目、そして（12）は内発的発展論が西欧ではなく日本やアジア発の理論であることを強調した項目である。これらはいずれも、鶴見の内発的発展論の特徴を説明するうえで欠かせない要素であるが、本項の着眼点である可能性の創発に関する記述については特に見られなかった。

以上、本項で明らかとなった、可能性の創発に関する議論の要点は次のとおりである。川勝がまとめた鶴見の内発的発展論の12の特徴のうち、（3）で示されるように、鶴見の内発的発展論は創造、すなわち自己のうちにある可能性が発現する過程を対象としている。そのような潜在している力を含んだその人の可能性が発現してくるさまを、鶴見は「発展」、すなわち「人間の成長」と表現していた。さらに、潜在的 가능성이創発する契機には、（4）に表される外部との出会いや、（5）に示されたアイデンティティの探求、あるいは（8）にあるような危機が影響することが示唆された。これらの議論は、本研究が志向する、住

民の潜在的可能性の創発を重視した地域づくりを実践するうえで有用な示唆になると考える。

最後に、可能性の創発を考えるうえで、鍵概念のひとつとなる「アイデンティティ」の意味合いについて考察しておきたい。一般に、アイデンティティとは「自分とは何者であるかという自己定義、あるいは自分自身はこの社会の中でこう生きているのだという実感、存在意義」（無藤 1979）などの意味で用いられる概念である。鶴見の内発的発展論で用いられる際のアイデンティティの意味については、明確な定義づけは行われていないものの、鶴見の次の発言から推測することができる。

「アイデンティティ」という言葉は日本語で非常に使われているけれども、私、まちがっていると思うの。というのは、自分が何者であるかということを知ることというけれど、そうじゃなくて、自分が何者であるか、自分がどういう種または集団に属するものか、この両方が一致しないと、自分は何者であるかがわからない。（中略）種と自分との関係を直観する。そういう能力ですね。（川勝・鶴見 2008：58）

上記の一節を踏まえると、自分が何者であることを説明するには、自分が社会のなかでどのような「種または集団」に属するかを自覚している必要があるという鶴見の考えが読み取れる。この鶴見の発言を参考に、本研究ではアイデンティティを「自分が何者であり、社会の中でどのように位置づけられる存在であるかという自己定義」という意味合いで用いることとしたい。

2.2.4. 晩年の鶴見の視座

ここまで、鶴見が生活記録運動を展開し、内発的発展論を発表するに至るまでの経緯を概観してきた。ここまで見てきたように、鶴見の論考には、常に人の可能性に関する視点が含まれていることがわかる。一方で、その晩年に行われた生物学者の中村桂子との対談において、鶴見はそれまでの自身の内発的発展論では「個体というものをあまり考えてなかった」（中村・鶴見 2002：106-7）と述べ、内発的発展論に個人を単位とする視点が欠如していたことを明らかにした。

内発的発展論における個体の位置づけについて、鶴見が意識的に考えるようになったのは、自身の病がきっかけとされる。1995年、脳出血に倒れた77歳の鶴見は、「倒れたその夜、若い頃に親しんでいた和歌と英詩が怒濤のごとく出てきた」（須賀 2014：43）と

いう思いがけない体験をした。その後、一命を取り留めてから 88 歳で亡くなるまでの間にも、日常的に和歌が思い浮かぶようになったという¹⁷。この時の体験について、のちに鶴見は「哲学とか、社会学というものが自分の本筋にあって、歌なんてもの（中略）をつくっている暇がない、という本当に愚かな考えを持った。（中略）そして五十年こつこつ学問をやってきて、その間に全然歌から離れていた。もう涸れてしまったし、涸れたというより、抑えて、抑圧していた。それがやっと、病気になって初めてわかった。これが本当に自分がやりたいことだったんだ、ってわかったんです」（佐佐木・鶴見 2002 : 180）と述べている。和歌があふれ出た体験について、「たくあん石をポンと外したら、自然にあふれ出ちゃった」と語るように、「抑えても抑えても私の個体から出てくるものが内発性」であるということ、鶴見は身をもって体感したのである（佐佐木・鶴見 2002 : 18）。この時の体験は、誰もが当人も気づいていない潜在的な可能性を持っている、という前提を鶴見に確信させるきっかけになったと推測される。同時に、「内発的」という言葉の意味をより深いところで掴ませ、「一人ひとりの『個』の中における『内発的發展』という見方」を鶴見にもたらしたとも言えるだろう（須賀 2014 : 43）。

さらに、「個体のなかからでてくるものが、今度は地域という集合になる」（中村・鶴見 2002 : 107）という発言にもあるように、「『個』の中における『内発的發展』」、すなわち松原（2019）でいうところの「個人の内発的發展」は、地域を形成する源になっていたことが読み取れる。蜂屋は、この時鶴見に「個人の内面からあふれ出てくるものを実現する場」（蜂屋 2017 : 24）としての地域という観点が生まれたとし、鶴見の内発的發展論が、「本来その地域の内発性、社会の内発性を元に、そこに住む人々がその地域の中で自分をいかに満足させて生きていくかという個人の内発性を根源とし、地域的發展の中に個体としての自己創出をいかに位置づけていくかという主体形成の理論に変化した」（蜂屋 2017 : 24）と述べている。すなわち、地域が先に存在するのではなく、潜在的な可能性をもつ地域住民一人ひとりがその可能性を発揮することで地域が形成される、という発想の転換が、鶴見に起こったと考えられる。鶴見自身、その晩年に「私の言っている内発的發展論というのは、自己を成長させる、自己を発展させる、そういう学問だ」（川勝・鶴見 2008 : 50）と発言しているように、晩年の鶴見の内発的發展論は「個人の発展と関

¹⁷ 鶴見は 15 歳で歌人の佐佐木信綱の門下生となり、21 歳で歌集を自費出版するなど、幼い頃より和歌に親しんでいた。しかしながら、社会学者として研究に打ち込むため、学者を志したのちは和歌から離れていた（佐佐木・鶴見 2002）。

連し、個人の生き方、選択肢を豊かにする考え方」（西川 2011：408）を示した自己成長の教育論とみなす傾向が強まった。その内容は、かつて鶴見が取り組んだ「生活をつづる会」を彷彿とさせるものである。

ここまで概観したように、晩年の鶴見は、自身が潜在的に持っていた可能性に気づくことを通して、内発的発展論を地域に暮らす一人ひとりのうちなる可能性を拓く理論として深化させた。それだけでなく、「倒れてから10年余りを全力で生ききり、人間のうずもれた能力を発掘し続けた」（URL4）とあるように、鶴見自身も自らの可能性を探求する実践者であったことがうかがわれる。以下、本研究では、こうした鶴見の思想を理論的枠組みに、地域づくりのあり方をさらに検討していきたいと考える。

生涯をかけて内発的発展論を展開した鶴見であるが、一方で、いかに地域で住民の潜在的可能性を見出し、その可能性が地域で発揮されることによる内発的発展を実現するかという具体的な方法については示しておらず、その実現方法は課題として残されたままになっていた。そこで次章では、鶴見の生活記録運動から着想を得て、「地域住民がその自己疎外を克服して主体形成を遂げようとする学習活動」（鈴木 1992：42）である自己教育に着目していきたい。そのうえで、自己教育を「個人の内発的発展」を促進する要素と位置づけ、「個人の内発的発展」を重視した地域づくりはいかにして実現しうるのかを検討していくこととする。

3. 「個人の内発的発展」を基礎とした地域づくりの模索

本章では、地域づくりにおいて「個人の内発的発展」を促進するための手がかりとして、自己教育の理論と実践に着目する。自己教育とは、社会教育学の分野において論じられる教育論のひとつである。「21世紀においては、自己教育を本質とする社会教育の理論を組み込んだ内発的発展論が求められている」（宮崎・鈴木 2006：11）という指摘もあるように、自己教育は内発的発展を実現するうえで有用なアプローチと考えられ、本研究が目指す「個人の内発的発展」を基礎とした地域づくりにも親和性の高い実践であると位置づけられよう。

そこで以下、本章では、自己教育の理論を整理したうえで、その実践を基礎とした地域づくりの先行事例としてミャンマーの^{かいほつ}開発僧による地域開発を取り上げる。そして、地域開発のプロセスとその詳細をフィールド調査から明らかにしていくこととする。最後に、理論と事例の両方を踏まえ、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を取り入れた地域づくりの枠組みを示すこととする。

3.1. 「個人の内発的発展」を促進する自己教育

自己教育は、文脈に応じて様々に解釈される用語である。広義には、諸個人が学習の目的・内容・方法を自らで決定し、自らが自らの教育の主体になっていくこと（鈴木 1992：28）の意味合いで用いられる概念であり、「人間が、制度的教育を終えた後にもなお一般に言われるところの自学・自習を通じてさらなる発達を遂げ、自己陶冶（Selbstbildung）が図られる」（岩本 1999：70）ことといった、自主自学を連想させる用語でもある。そのなかでも、本研究においては、社会教育学者の鈴木敏正の定義を援用し、自己教育を「地域住民がその自己疎外を克服して主体形成を遂げようとする学習活動」（鈴木 1992：42）という意味合いで用い、「個人の内発的発展」を促進する学習活動と位置づけて、その有用性を論じていきたい。

自己教育を取り上げるにあたり、まずは関連する学術領域である社会教育についてふれておく。社会教育とは、「学校の教育課程として行われる教育活動を除き、主として青少年及び成人に対して行われる組織的な教育活動（体育及びレクリエーションの活動を含む。）」（社会教育法第二条より）と定義される教育活動の呼称である。2018年に中央教育審議会が発表した「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた社会教育の振興方策について」と題する答申では、社会教育の役割として「一人ひとりの生涯にわたる学びを支援

し、住民相互のつながりの形成を促進することに加え、地域の持続的発展を支える取組に資することがより一層期待されている」（中央教育審議会 2018：3）と評され、地域づくりにおける社会教育の重要性が強調された。同書によると、社会教育の役割は「人づくり・つながりづくり・地域づくり」であり、今後は「学びを通じて個人の成長を期するとともに、他者と学び合い認め合うことで相互のつながりを形成していく」（中央教育審議会 2018：3）という社会教育の特徴を活かして、個人の成長と地域社会の発展の双方を、住民相互のつながり形成を要にして促進することが求められている（中央教育審議会 2018：5）。

こうした社会教育の必要性は、内発的発展論においても言及されている。社会教育学の立場から内発的発展論における主体形成論の必要性を指摘した若原（2007）は、内発的発展論の現実化に向けては「内発的発展を担う地域住民の学習・教育を明らかにすることを主要論点としなければならない」（若原 2007：39）として、内発的発展による地域づくりを構想するにあたっては、住民に対する社会教育を主眼においた議論が必要であることを指摘した。さらに、そうした社会教育の場においては「自己教育を基礎とした諸個人の個別的力量形成と実践、そして自己の課題・限界の自覚を基盤に、その限界を乗り越えるものとして他者との相互教育・学び合いの関係を構築すること」（若原 2007：46）が求められるとして、自己教育と相互教育の双方の必要性を強調している。

では、本研究の主題である、「個人の内発的発展」を重視した地域づくりを想定した場合には、どのような社会教育の場が求められるのか。次項では、住民の潜在的可能性を創発する教育活動のひとつとして自己教育に着目し、その必要性を論じていくこととする。

鈴木によると、自己教育の概念が着目されるようになった背景には、社会的な「自己疎外」の広がりがある影響している。自己疎外とは、「人間がみずからつくったものによって苦しめられる」（鈴木 2009：28）という現象である。戦争をはじめとする暴力や抑圧・排除や外発的開発といったマクロ的な規模のものから、日常的な生活や労働・社会制度のなかに潜むミクロレベルなものまで、人間のつくった制度やシステムあるいは文化が、人間の本来的能力を剥奪し、人間を抑圧したり災厄をもたらしたりしているという自己疎外現象は、20世紀に深刻化したと鈴木は指摘する（鈴木 2009：28）。一方で、21世紀は「人間の本来の本質に立ち返ってその可能性を最大限開花させることが課題となっている、人間の『自己解放』の時代である。」（鈴木 2009：41）とあるように、現代は人間の本来の可能性

が抑圧されてきた 20 世紀を乗り越え、一人ひとりの潜在的可能性を創発することが求められる時代であるとも言えよう。

そうした個人が潜在的な可能性を創発しようとする状況を、鈴木は「自己実現」とも表現する。自己実現とは、マズロー（1987）の定義を援用すると「人の自己充足への願望、すなわちその人が潜在的にもっているものを実現しようとする傾向」（鈴木 2009:289）、あるいは「才能や能力、潜在能力などを十分に用い、また開拓していること」（鈴木 2009:290）を指す概念である。鈴木によると、自己実現に向かうためには、「『疎外された自己』とほんらいの自己とを区別して、ほんらいの自己を取り戻し実現すること（アイデンティティ形成）」を意識的に実践することが求められる（鈴木 2009:134）。これは「他者によって定義づけられた『自己』、他者との比較において捉えられた『自己』ではなく、固有の自己を理解すること」（鈴木 2009:135）、あるいは「諸個人が自己疎外を自己疎外として理解し、現在の生き方を批判的に捉え直すこと」（鈴木 2009:34）とも言い換えることができ、自己疎外からの解放を促進し、自分自身の潜在的可能性に気づくきっかけを生み出すことにもつながると考えられる。

これに加えて、他者との交流を通した「相互承認」もまた、自己実現へ向かう過程には欠かせない条件と考えられる。自己実現を目的とする自己教育において、相互承認の活動をぬきに考えることはできないと鈴木が言及するように（鈴木 2009:139）、自己実現の過程には、他者と異なる自己を受容し、他者を通した自己を理解するプロセスが含まれる。すなわち、自分単独で学習を進めることは困難であり、そこには必ず他者との協同学習という前提が伴うのである（鈴木 2009:130-1）。

以上のように、住民の潜在的可能性の創発を目的とした自己教育では、アイデンティティ形成と集団学習がその実践要件に挙げられると確認された。これらの要素は、鶴見の内発的発展論のなかで示された可能性の顕現に作用する要素とも重なるものである。こうした自己教育の場は、本研究がめざす「個人の内発的発展」に基づいた地域づくりの中核的な構成要素に位置づけられるだろう。

一方で、これまでの自己教育の事例研究を概観すると、消費者学習、環境教育、健康学習、地域スポーツ活動、女性学習などを題材に、課題学習や地域活動の取り組みから自己教育的要素を見出すという形式の研究が大半を占めている（山田・鈴木 1992）。こうした取り組みは、地域づくり活動の一環として意義深いものであり、活動を通して参加住民の潜在的可能性を刺激するものであることは確かであろう。しかしながら、それらの活動は

住民の潜在的可能性の創発を直接的にめざすものではなく、アイデンティティ形成と集団学習の要素を取り入れた自己教育の具体的な実践方法については、さらなる検討が求められる。

一方で国外に目を向けると、東南アジアでは、住民の潜在能力の開花を促す「心の開発^{かいほつ}」を基礎とした地域づくりが実践されていることがわかった。その取り組みは、住民の潜在的可能性の創発を地域づくりの基礎と位置づけるものであり、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を基礎とした地域づくりの先行事例として見なすことができるだろう。そこで次節以降では、その実践内容を概観するとともに、フィールド調査を通して実践の具体的なプロセスや構成要素を明らかにし、自己教育を基礎とした地域づくりの枠組みを検討していくこととする。

3.2. 開発^{かいほつ}僧による自己教育に基づく地域開発

第二次世界大戦後、先進国の発展に追いつくため、アジア諸国では工業化と経済成長を目指した開発が進んだ。物的富の増大を追求する国家主導型・外発型近代化路線の「経済中心の開発」は、地域格差や環境問題、人々の心の荒廃、家族や共同体の崩壊等、様々な社会問題をもたらすこととなる。そのような社会情勢に対応する試みのひとつとして生まれたのが、1970年代後半以降の東南アジアで展開される、「開発（かいほつ）」と呼ばれる仏教的思想に基づいた内発的発展の地域づくりであった。この実践は、住民の潜在能力の開花を促す「心の開発^{かいほつ}」を基礎にしている点にその独自性があり、オルタナティブな開発実践として注目されることとなる。以下、本節では、地域の僧侶が先導する開発^{かいほつ}実践に着目し、その概要を述べていく。

3.2.1. 地域開発を担う開発^{かいほつ}僧

一般的に開発は、自然を切り開き資源を人間社会に役立てること、未開の土地や社会を切り開いて近代的なものにすること（西川・野田 2001：18）の意味合いで用いられる用語であり、「外発的・他律的な経済中心の開発」（西川・野田 2001：17）という特徴がある。一方で、開発^{かいほつ}は、「社会や個人が本来のあり方や生き方に目覚め、共生のために、自らの潜在能力¹⁸を開花させ、人間性を発現していく物心両面における内発的な実践」（西

¹⁸ 開発^{かいほつ}思想における「潜在能力」とは、本来のあり方に目覚め、慈しみをもって生きていく能力を指す（西川・野田 2001：18）

川・野田 2001:21) を意味する、仏教に由来した概念である。開発^{かいほつ}には「社会的な発展、物質的な開発を意味するのみならず、精神や文化をも含んだトータルな人間としての発展」(西川・野田 2001:26) の意味合いが込められており、従来の開発が外発的・他律的で経済中心という特徴を持つのに対し、開発^{かいほつ}は内発的・自律的で人間中心という特徴がある(西川・野田 2001:17)。

そうした仏教的^{かいほつ} 開発^{かいほつ} を先導するのは、「開発僧^{かいほつ} (spirit-development monk; phra na k phatthana)」¹⁹と呼ばれる、地域に暮らす上座部仏教徒の僧侶である。彼らは、究極的には涅槃を目指す存在であるため、一切の生産活動から離れ、戒律を守り、上座部と瞑想修行をとおして仏法の実践に専念する存在である。しかしながら、実際には、禁欲的な修行に勤しむ一部の林住派の僧侶を除き、ほとんどの僧侶たちは町や村の近隣に居住する「村住派」であり、村人たちの指導者・相談役として日常世界に深く関わって多くの社会的役割を果たしてきた(岡部 2014:20)²⁰。そんななか、1970年代頃から、近代的開発と経済成長により生み出された社会問題の深刻化と、それに伴う村人たちの経済的・精神的荒廃を目の当たりにした一部の僧侶は、これらの状況を改善するべく、社会問題に積極的に取り組むようになる。そうした一部の村住派の僧侶は、次第に地域の村人から「仏法に基づき地域の社会開発に物心両面から取り組む上座部仏教の出家者」を意味する^{かいほつ} 開発^{かいほつ} 僧^{かいほつ} と呼ばれるようになっていった(長谷 1998; 岡部 2014)。

3.2.2. 開発僧^{かいほつ}が手がける自己教育

開発僧^{かいほつ}による地域開発の特徴は、個人の潜在的な可能性を発掘する「心の^{かいほつ} 開発^{かいほつ}」が物的開発の基礎として位置づけられている点にある。「心の^{かいほつ} 開発^{かいほつ}」とは、「瞑想法などによって、人間や社会の問題や本来のあり方に目覚め、智慧を起こしていくこと」を指し、自分自身を知っていくことで、本来備えていた潜在能力を発現していくための実践である(西川・野田 2001:21-2)。^{かいほつ} 開発^{かいほつ} 思想においては、今日発生している社会問題の多くは、人々が十分に心の^{かいほつ} 開発^{かいほつ} ができていないことに起因するものと考えられる。食欲や権力欲、特定の物の見方に執着するような行動や、外部からの快楽を獲得することによって幸福を実現しよ

¹⁹ 開発僧^{かいほつ}の英語表記は [development monk] が一般であるが、「仏性を開き発(ほつ)せしめる」という仏教用語の主旨を反映し、本稿では [spirit-development monk] とした。女性の場合は「開発尼僧^{かいほつ}」と表記する。

²⁰ 岡部(2014)はタイの開発僧^{かいほつ}研究であるが、筆者の見聞上では、こうした傾向は東南アジア各地で見られるものである。

うとする行動、自分の不幸を他人に転嫁しようとする行動などは、すべてその人の潜在的可能性が発揮されていない、心の^{かいほつ}開発が遅れた状態とみなされる（西川 2001：41）。心の^{かいほつ}開発を基礎に地域開発に取り組んだ代表的な^{かいほつ}開発僧として挙げられるタイのナン和尚（Luang phoo Naan、法名ピピット・プラチャーナート）は、「自らを抛り所とせよ」というブッダの教えをもとに、村人たちが自分自身を知り、自分の生きる道や問題解決の方向を自分で見つけるため、彼らを教え導く役割を果たした^{かいほつ}開発僧として知られる（プラチャーナート 2001：214）。ナン和尚は、地域が抱える諸問題の根源には村人たちの心の荒廃が関係しているとして、心の^{かいほつ}開発を通じて村人たちの精神面を改善していくことが地域開発の基礎にあたりと位置づけた。こうした心の^{かいほつ}開発は、「自らが変わらないかぎり世界は変わらない」（西川 2001：49）という仏教的な自己変革の思想に基づいて実践されるものであり、人々が人間らしい物の考え方や生活を取り戻し、自然や社会と調和しながら、潜在的な可能性を創発して生きていくことが、ひいては社会的・経済的發展を促進するという前提のもとになされているのである。

では、心の^{かいほつ}開発は、具体的にどのように実践されるのか。その主たる手法として挙げられるのが瞑想である。上述のナン和尚は「まず静寂な場所で瞑想することによって、自分が幸せであるか、それとも不幸せであるかを自覚していく。この行為を続けることによって、心が次第に澄んでくる。そして、自分自身を批判できるようになり、過去、現在を反省し、将来の目的を考えるようになる」（野崎 2001：136）と述べている。このように、瞑想を通して「何が正しいか、何が悪か、自分の進むべき道は何か」（西川 2001：53）と自問自答し、自分の感情や思考を自覚していくなかで、人々は自身のアイデンティティを探求し、自身の本来持つ可能性に気づいていくのだと考えられる。

また、瞑想とともに心の^{かいほつ}開発を促進する要素として挙げられるのが説法である。カンボジアの^{かいほつ}開発僧であるヒン・リー師（Hing Ly）は、村人の心の^{かいほつ}開発の一環として、説法を通し、心をコントロールする智慧（仏法）を広めてきた（三木 2007：58）。説法の基本は人々に仏教の教えを説き聞かせることであるが、^{かいほつ}開発僧が行う説法として特徴的なのが「対機説法」と呼ばれる方法である。対機説法は、説法をする相手の「機根」、すなわち教えを理解する度量や器・その人の状況や性格に応じて行う説法と位置づけられるものである。仏教の開祖である釈迦が始めたものとされ、「人を見て法を説け」ということわざ

の由来になったとも言われている²¹。この対機説法は、僧侶と聴衆との対話を通して行われる。僧侶は聴衆のなかから、説法を必要とする人に対して個別に、直接的に語りかけ、人々の前で親しく教えを説いていくのである。説法を聞くなかで耳にする他者の悩みや問題は、決して他人事ではなく、どこか自分自身にも心当たりがある内容であることが多い。それゆえに、自分以外の他者に向けた説法であっても、我がごととして受け取ることができるのである。この形式を用いることで、説法を受ける当人はもちろん、その説法を聴く周囲の人々も、まるで自分に対して語りかけられているかのような気持ちで説法を聴くことができ、間接的に気づきが促進されていくと考えられる（舟橋 1970 : 4-7）。

3.2.3. 自己教育を基礎に置いた地域開発の実践

そうした心の^{かいほつ}開発の実践を基礎に、^{かいほつ}開発僧は物的な開発にも尽力した。彼らは「働くこと自体が仏法の実践である」（野崎 2001 : 123）という思想のもと、自らが率先して開発活動に関わり、村人と共に地域発展に貢献している。上述のナーン和尚は、村人からの布施を活用して道路整備等の村の社会開発活動に取り組んだほか、有機農業や米の共同管理の仕組みなどを整え、地域の貧困問題改善に大きく寄与した。その他にも、^{かいほつ}開発僧が手がける地域開発は、図1に示すように、村人の就労支援や職業訓練、子どもたちの教育支援、託児、保健センターの設置、米銀行や農民支援基金・協同組合販売店の創設、村人からの寄付を活用したハード面の整備、プロジェクトの提案、研修プログラムの実施、女性の自立支援など、青少年の育成から社会インフラの整備まで多岐にわたる（西川・野田編 2001）。

こうした開発活動に関わる村人は、心の^{かいほつ}開発を通して発見した自身の可能性を活動のなかで発揮していたと考えられる。また、心の^{かいほつ}開発を実践した村人同士が共に活動することで、相互扶助や思いやりの精神に基づいたプロジェクト運営が可能となり、活動の持続性を高めることにもつながっていることが指摘されている（野崎 2001 : 132 ; 西川 2001 : 53）。^{かいほつ}開発僧は、プロジェクトの発案と実施にいたるまでの精神的サポートに徹しつつ、その運営は村人の自主性にまかせ、プロジェクトの成否については結果に執着しない態度を取るのが特徴である（鈴木 2001 : 156-7）。さらに、これらの開発活動は、村人だけでなく、国際 NGO 等の外部団体の協力によって推進されたものも多く、^{かいほつ}開発僧は「人

²¹その人の性格や気質を考慮し、その人にふさわしい方法で適切な言い方をすることが必要であることを意味することわざ。釈迦がそれぞれの人に応じて説法を伝えていたことから生まれたとされる。

と人とのつながりや、在家者との信頼関係をソーシャル・キャピタルとして使い、地域コミュニティの『開発』や社会貢献に取り組んできた」（岡部 2014：155）存在ともいうことができるだろう。



図1 かいほつ 開発僧による地域開発の例（西川・野田編（2001）を参考に筆者作成）

ここまで、東南アジアの仏教国で実践される、心のかいほつ 開発を基礎にした地域開発の取り組みを概観してきた。その中核的な要素である心のかいほつ 開発は、人々の潜在的可能性を見出し、人間的成長を促すものである点で、「個人の内発的発展」を促進する自己教育の実践とも見なすことができるだろう。

そこで本研究では、かいほつ 開発僧が地域開発を行うプロセスとその詳細を明らかにするために、心のかいほつ 開発を基礎とした地域開発に取り組むかいほつ 開発僧を尋ね、インタビュー調査を行った。次節ではその調査結果を詳述する。

3.3. ミャンマーのかいほつ 開発僧による地域開発のフィールド調査

住民の潜在的可能性を発掘する自己教育を基礎とした地域づくりは、いかにして実現できるのか。その実践方法を検討するために、筆者はミャンマーを訪問し、かいほつ 開発僧が取り組む地域開発のフィールド調査を行った。

今回の調査でミャンマーをフィールドとして選定した理由には、次の2点がある。1点目は、筆者はかつてミャンマー農村部の人道支援活動に参加していた経験があり、支援に

関わる現地の^{かいほつ}開発僧やその関係者と10年以上の親交があることから、より踏み込んだ調査が実施可能になると考えたためである。2点目は、ミャンマーの^{かいほつ}開発僧研究に対する学術的貢献の観点からである。ミャンマーの上座部仏教僧に関する先行研究には、Myat Kalayar (2008)・蔵本 (2014a; 2014b; 2016a; 2016b; 2018) 等が挙げられるが、同国は1962年から2011年に至るまでの軍事政権下において研究活動が大きく制限されていた影響もあり、タイの^{かいほつ}開発僧に関する研究と比較しても文献の蓄積が極めて少ない。希少なミャンマーの^{かいほつ}開発僧に関する一次的情報を提示する意味でも、調査フィールドにミャンマーを選ぶ意義があると考えた。

以下、本節では、ミャンマーの社会的・文化的背景について概観したうえで、ミャンマーの^{かいほつ}開発僧を対象としたインタビュー調査の概要と結果について述べる。また、追加で実施した、心の^{かいほつ}開発を経験した村人対象の調査についても、同じく概要と結果を示す。最後に、それらの分析結果をもとに、住民の潜在的可能性を創発する自己教育を基礎とした地域づくりの枠組みや実施要件を検討していく。

3.3.1. 社会的背景

《基本情報》

ミャンマー連邦共和国 (Republic of the Union of Myanmar; 以下、ミャンマー) は、東南アジアに位置する独立国家である。2020年1月時点での人口は約5477万人 (URL5)、計135の民族によって構成される。人口の約7割をビルマ族、残り3割は少数民族で占められる (加藤 2016: 8)。国民の約9割が上座部仏教を信仰する。

《ミャンマー連邦共和国の成立と近代化に伴う課題》

11世紀半ば頃、ビルマ族によって築かれた最初の統一王朝であるパガン王朝 (1044年～1287年) が、現代のミャンマーの基礎とされている。コンバウン王朝時代には、イギリスより3度の侵攻を受け、1886年に英領インドに編入された。第二次世界大戦期の日本軍侵攻を経て、1948年1月4日にビルマ連邦として独立を果たした (URL6)。

元来ミャンマーは高級木材のチークや天然ガス、宝石鉱物などの天然資源に恵まれた国であり、森林伐採や鉱山開発・米の輸出等による経済成長が期待されていた。しかし、1962年、軍のクーデターによって社会主義のネ・ウィン政権が成立すると、政権は産業により得た資金の大部分を軍隊の拡大や戦闘機・武器の購入等に利用した (秋元 2005)。その結

果、国は貧困の一途をたどることとなり、1987年12月には国連により後発開発途上国（LDC）の認定を受けた。

翌88年には、民主化を要求するデモが活発化したものの、それらの運動は国軍によって鎮圧され、クーデターによる軍事政権が成立することとなった。同政権は、1989年、国名の呼称をビルマ連邦からミャンマーに変更するとともに、社会主義政策を放棄し、外国投資法の制定等、経済開放政策を推進した。しかし、硬直的な経済構造等が障害となり、思わしい経済効果が得られない結果に終わる。さらにその後、同政権が民主化運動のリーダーであるアウン・サン・スー・チー氏に対して自宅軟禁措置及び人権侵害を行ったことを理由に、欧米諸国はミャンマーへの経済制裁を実施した。これにより、ミャンマーの国内経済はさらに低迷し、国民生活は困窮を極めることとなる。

ようやく経済成長が始まったのは、2011年3月、民政移管によるテイン・セイン政権発足以降である。同政権は、外国投資法の改正、中古自動車の輸入自由化、為替レートの統一等の経済改革を推進し、外国投資の活発化に成功するなどの成果を出した。その後、ミャンマーは2012年以降に毎年7%前後の安定した経済成長を達成している。さらに、2016年3月に誕生したアウン・サン・スー・チー国家最高顧問率いる現政権は外国投資を歓迎し規制緩和を志向する姿勢を示しており、外国投資をより促進する仕組みを整備しつつある。以上のような急速な経済発展に伴い、同国は2021年には国連のLDC指定から脱却する見込みとなった（URL7）。

こうした急速な経済発展の一方で、近年は都市部と農村部間の経済格差の拡大、環境汚染、人権侵害、高齢化の進行や女性の未婚率の増加（林 2018）、開発問題（URL8）などの新たな社会問題への対応が課題とされている。

《仏教に根ざした思想的背景》

ミャンマーにおける思想・文化を理解するにあたり、鍵となるのが上座部仏教の存在である。国民の約9割が上座部仏教を信仰し、僧院数は2014年時点で約6万1千件、出家者数は約55万人（人口の約1%）にのぼる（藏本 2016a : 108）。これらの僧院数・僧侶数はともに上座部仏教圏最大の規模とされ、人々の信仰心の厚さがうかがえるとともに、仏教思想が人々に与える影響力を推し量ることができる。

上座部仏教の特徴は、ミヤッカラヤによると、仏陀の教えを忠実に守る伝統的な正統派である点、そして個人の救済を目指している点である。仏教徒の多いミャンマーでは輪廻

転生の思想が浸透しており、「来世より良いところに生まれ変わるために、今を大事に生きる」という考え方が一般通念にあるとされる (Myat Kalayar 2008 : 88-9)。そのためミャンマーの人々は、より良い来世を迎えるために、日頃から功德を積む行為を習慣的に行っている。

功德を積むための行為として、とりわけミャンマーで慣習的に見られるものが布施 (ダーナ) の文化である。布施とは一般的に「世俗的な報酬への期待、虚飾、見栄一切なしに、自発的かつ無私に与える行為」 (中村 2011 : 258) を指す。ミャンマーでは、供物を僧院に捧げる、僧侶に食事を寄進するなどの布施の習慣が根づいており、個人差はあるものの、一般的に所得の 1 割を目安に布施するのが当たり前とする説 (土佐 2012 : 15) もあるほど布施の文化が浸透していることがわかる²²。

ミャンマーが世界的にも寄付国家であることは、調査結果からも裏付けられている。Charities Aid Foundation (CAF) によると、125 カ国の人々を対象に、過去 1 ヶ月に「知らない人を助けたか」「お金を寄付したか」「ボランティアをしたか」の 3 点を調査した「世界寄付指数 (The World Giving Index)」において、2009 年から 2018 年の 10 年間、ミャンマーはアメリカに次ぎ 2 番目に高スコアを記録していることがわかった (URL9) (表 3)。なかでも寄付に関する項目において、ミャンマーでは 10 年間で回答者の平均 81%が質問時の 1 ヶ月以内に寄付を行っており、2 番目にスコアの高いイギリスやオランダ (平均 71%) を大きく上回る結果となっている。また、回答者の平均 43%が質問時の 1 ヶ月以内にボランティアとして時間を提供したという結果は、調査対象国のなかでも 3 番目に高いスコアである。この結果からも、いかにミャンマーで寄付の慣習が根付いているかを推し量ることができよう。

ミャンマーの布施文化について、フラーは MYANMAR TIMES の記事のなかで、布施を通して純粋で健全な意思を示すことが良きミャンマー仏教者としての個人のアイデンティティの中核であると考察し、他の上座部仏教国に比べてミャンマーは布施をする対象に特徴があると指摘する (Fuller 2015)。フラーによると、タイなどの他の上座部仏教国においては僧侶や僧院に対して布施を行う傾向が強いとされているのに対し、ミャンマーでは病人や病院、孤児院など、社会的弱者や困っている人にも積極的に布施をする傾向があ

²² フラー (2015) によると、布施をすることは敬虔な仏教徒の証である、という考え方が浸透している。また、「ケチをすると来世は貧困に生まれる」ともいわれており、積極的な布施を推進するひとつの要因になっているとも考えられる (URL10)。

るという。このように、偉大な地位にある仏教者やその教団に対してのみならず、低い地位に生まれ変わった人々に対しても贈与行為（act of giving）を通して思いやり（compassion）を示すのが、ミャンマーの特筆的な伝統であるとフラーは指摘する（URL10）。

そのフラーが「この慈善行為は自分のためであり、将来の自分のためであり、他者のためであり、国のためなのである」と述べるように、自分の功德のためのみならず、他者や国の発展のために布施を行う意識を持っていることは、ミャンマー国民の特質の一つに挙げることができよう。

表3 The World Giving Index 国別比較

（CFA「World Giving Index 10th Edition」を元に筆者作成）

	総合	知らない人を助ける	寄付をする	ボランティアをする
アメリカ	1位	3位 (72%)	11位 (61%)	5位 (42%)
ミャンマー	2位	49位 (49%)	1位 (81%)	3位 (43%)
スリランカ	9位	29位 (55%)	19位 (50%)	1位 (46%)
タイ	21位	89位 (41%)	4位 (71%)	79位 (15%)
日本	107位	125位 (24%)	64位 (23%)	46位 (22%)

《地域における僧侶の役割》

上座部仏教国であるミャンマーでは、地域に暮らす人々と僧侶との交流が日常的に行われている。ミャンマー都市部における出家者の生き方を研究する藏本（2016b）は、上座部仏教社会における僧院の役割を「村落生活の結節点として、村人に教育や医療といったサービスを提供」することと述べ、村人からの布施と引き換えに「①教義解説や瞑想指導といった仏教的なサービス、②各種の社会福祉的サービス、③経済的成功や病気の治癒を「売り物」にするような現世利益的サービスなど」を提供する行為が近年の都市部の僧院で見られることを報告している（藏本 2016b：17）。特に1990年代以降、急速な都市化に伴い、行政による福祉サービスが十分に整備されていない状況下において、「僧院学校」運営などの教育支援をはじめとする、社会福祉活動に従事する僧侶の存在が目立つようになった（藏本 2014a：97）。村人からの布施を運用し、本来国が担うべき教育やヘルスケア等の福祉事業にも取り組むなど、地域問題の解決に尽力する僧侶は、村人に受け入れられた存在として、村人から信頼を集めていると考えられる。

以上のように、ミャンマーの人々は、政治的混乱や貧困などの苦境を経験しながらも、僧侶や社会的弱者などの他者に対しては日常的に施しを行うという慣習を守ってきた。また僧侶は、その布施を資本にして地域の問題解決に向けた実践に取り組むなど、村人から預かった布施を活用して地域開発を行うことで、村人との間に信頼関係を築いている様子もうかがえる。こうした社会的背景を押さえたうえで、次項では、ミャンマーにて筆者が実施したフィールド調査の概要とその結果を示す。

3.3.2. 調査概要

開発僧^{かいほう}の地域開発のプロセスとその詳細を明らかにするため、2019年2月16日から18日、現地にてミャンマーの開発僧^{かいほう}を訪問し、インタビュー調査を実施した。

《研究協力者の選定とその詳細》

研究協力者の選定は、普段から現地のミャンマー人^{かいほう}開発僧と関わりが深い日本人尼僧（以下、開発尼僧^{かいほう}B）と本調査で通訳を依頼したミャンマー人青年A（追加調査における村人A。以下、村人A）の協力を得て行った。具体的な選定基準は、本研究における^{かいほう}開発僧の定義である「仏法に基づき地域の社会開発に物心両面から取り組む上座部仏教の出家者」に該当する^{かいほう}開発僧とし4名を選出した。調査期間や場所の移動など物理的な制約から調査対象者の人数は少数となったが、選出にあたっては活動の内容・フィールドの特徴・年齢・活動期間などの重複を極力避けることを意識した。

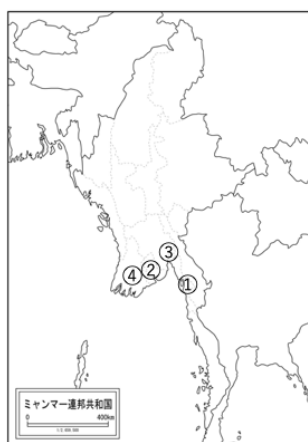


表 4 研究協力者の属性（取材時）

名前	年齢	出家年齢	活動拠点
開発僧A	61歳	6歳	モン州バウン地区(①)
開発尼僧B	52歳	32歳	ヤンゴン地方域ミンガラドン郡区(②) / 岡山県
開発僧C	73歳	31歳	モン州チャイトー地区(③)
開発僧D	34歳	5歳	エーヤワディー地方域(④)

図 2 研究協力者の活動拠点（表 4 に対応）

（白地図は白地図専門店（URL11）より取得）

以下、研究協力者である 開発尼 僧を含む 開発僧 4 名（A～D）の略歴や活動内容・活動地域の特徴について、インタビュー調査の結果をもとに記す。

【開発僧 A】

開発僧 A は、モン州パウン地区の寺院を拠点に活動する、少数民族モン族出身の僧侶である。6 歳の時に仏門に入り 20 歳で正式に得度した。開発僧 A が拠点を置く地域は、少数民族のひとつであるモン族が約 400 世帯（約 4800 人）暮らしている。この地域は 1940 年代から 90 年代後半にかけて政府と対立関係にあり、1995 年に政府と和平を結ぶまで寺院が中心となり地域の自治を行わざるを得なかった経緯がある。そのためこの地域では、寺が地域開発の拠点となっている。現在は、開発僧 A を含む 9 名の僧侶と 11 名のコーエン²³が寺院を運営している。

開発僧 A は村人からの布施を道路の整備や補修作業などのインフラ整備などに活用している。また、村人から差し出された水田での米作り、トラックのレンタル、パソコン教室の運営など多岐にわたって事業を展開している。これらの事業は、「米作りをしたい」、「トラックのレンタル事業をしたい」等と自ら志願した村人に継承される。さらに、奨学金等の教育費補助や米銀行の運営など、貧困層の村人支援を積極的に行っている。各家庭の家族構成や経済状況などの地域の世帯状況を 開発僧 A はすべて把握しており、物資支援を行う際、世帯の子どもの数や貧困世帯の数などを考慮したうえで分配を行う。

また、少数民族であるモン族の言語や歴史が失われないような文化継承にも力を注ぎながら、内戦からタイに逃れたミャンマー人難民が多数存在するため、難民支援活動も行っている。開発僧 A は、これまで 49 の寺院と瞑想センターを建設し、地域開発の基礎に心の開発^{かいほつ}をおいて村人の人格形成を何よりも大切にしている。

【開発尼 僧 B】

開発尼 僧 B は、ミャンマーで出家した日本人尼僧である。日本の岡山県とヤンゴン地方域ミンガラドン郡区を拠点に、モン州ゼンチャイ地域、モン州チャイトー地域、エヤワ

²³ 5～18 歳頃の小坊主あるいは修道僧の呼び名である。

ディ州マウピン地区の地域開発や人道支援活動を 20 年近く続けている²⁴。年に数ヶ月はミャンマーに滞在し、ミャンマーの^{かいほつ}開発僧たちと一緒に地域開発を手がけてきた。

日本国籍の^{かいほつ}開発僧 B だが、同じく日本国籍ながらミャンマーで得度した^{かいほつ}開発僧の助手を申し出たことをきっかけに出家することを決意している。^{かいほつ}開発僧 B が初めてミャンマーを訪問した 2000 年当時、ミャンマーは東南アジアの最貧国といわれており、軍党政権下のなかで人々が苦しい生活を強いられていた。そのような貧しく厳しい環境下においても、村人同士が相互扶助を行いながら心豊かに暮らしている様子に感銘を受けた^{かいほつ}開発僧 B は、日本において心の^{かいほつ}開発に取り組むための NPO を立ち上げた。現在は現地の^{かいほつ}開発僧と共に、子どもたちへの教育資金援助や教材援助、村人の就労支援や資金・技術援助、そして孤児たちへの寄付活動などを行っている。また、志願したミャンマーの村人を日本に招聘し、農業研修や技術研修・日本語研修などにも取り組んでおり、現在はミャンマー人青年 2 名を研修生として迎えミャンマーの特産品であるココナッツを使ったココナッツオイルの生産や、そのオイルを使ったパンを作り日本人に販売するなど、研修生の地域の経済的自立に向けた事業を展開している。なお、^{かいほつ}開発僧 B は日本人尼僧であるが、現地の^{かいほつ}開発僧とともにミャンマーの地域開発に取り組んでいることから、本研究の調査対象とした。

【^{かいほつ}開発僧 C】

^{かいほつ}開発僧 C は、モン州チャイトー地区を拠点に活動する僧侶である。^{かいほつ}開発僧 C は、軍党政権下で政府機関の役人として働いていた経験があり、成人式（元服式）²⁵を機に出家を果たす。当初は 3 ヶ月間修行した後に還俗する予定だったが、出家修行期間中に滞在していた寺院の僧侶が全員寺院を離れてしまい、寺を守る者が^{かいほつ}開発僧 C しかいなくなったことから、最終的に還俗せず僧侶を続けることとなった。出家後 3 年間で都心部の修道僧院で過ごしたのち、コーエン 3 名と共に現在の寺院がある場所へと移住し、1981 年より僧院学校²⁶を始動した。1993 年には貧困で学ぶ機会を持たない子どもたちが、一般的な知識

²⁴ ^{かいほつ}開発僧 B が活動拠点とする地域については、^{かいほつ}開発僧 A・C・D の紹介を参照。

²⁵ ^{かいほつ}開発僧 B によると、ミャンマーでは、男性は幼少時や成人を迎える際に一定期間寺に入る慣習がある。家族・親族に出家者がいることは誉であることが仏教社会の通念とされ、出家は親孝行の代名詞であり、何よりの功德のひとつと考えられている。

²⁶ ミャンマーには 1,500 以上の僧院学校があり、各僧院の筆頭僧侶であるサヤドー（長老）の監督を受けている。僧院学校全体のうち 63.5%は正規の初等教育を行っており、36.4%が正規の中等教育を行っている（URL12）。

を身につけるための孤児院兼寄宿制の私立教育機関²⁷を開設するなど、子どもたちの教育環境の整備に尽力を注いでいる。開発僧 C は子どもの教育の第一目標に人格形成を置き、心の開発^{かいほつ}を通して、自己のうちにある利己心を排除し、地域貢献ができる人材へと育つための教育を行っている。

また、この寺院が位置するチャイトー地区は、通称「ゴールデン・ロック」と呼ばれる仏塔チャイティヨ・パゴダがある町として近年観光地化が進み、国内外から旅行者が訪れるようになりつつある。道路舗装など地域開発が進む一方で、近代化や経済発展にともなう貧困格差などの問題が懸念される。開発僧 C は地域外からの来訪者に向けて寄付の呼びかけや村人との協働によるカフェ運営などを行い、自ら地域開発に必要な資金調達したうえで、道路の新設、橋の建設、貧困に苦しむ村人の自立支援にも積極的に取り組む。

【開発僧 D】

開発僧 D は、自身が生まれ育ったエーヤワディー州マウビン地区を拠点に寺院を持つ僧侶である。5歳でコーエンになり、12歳になるまで、現在自身が住職を務める寺院で仏教の体系的な基礎教育を受ける。その後、近隣地域の仏教学校に進学し、2013年にはスリランカの仏教大学に進み、2020年に仏教哲学の博士号を取得した。大学在学時の最終試験では成績優秀者に選出され、その後国境地域などミャンマー全土の僧院に派遣されることとなる。他地域の僧侶に教学等について指南したのち、現在の寺院に帰還した。

この地域はミャンマー南部のベンガル湾近郊に位置するデルタ地域である。2008年に発生した大型サイクロン「ナルギス（NARGIS）」で甚大な被害を受けるなど、ミャンマーの中でも特に過酷な水害の多い地域として知られている。甚大な自然災害の影響もあり、貧困に悩まされる地域である。しかし、「村人たちは至って淡々としており、悲壮感を感じることは全くない」と開発僧 B は語る。開発僧 D の寺院では、先代から子どもの心の開発^{かいほつ}に力を入れており、特に雨安居の時期は寺に子どもたちが泊まり込み、瞑想や説法通じて精神面の学びを深める。子どもの食事の支度は村人が行い、村の子どもを村全体で育てる風土が根付いている。また、地域の青年たちに農法を伝え、自然栽培の米づくりも行っている。この地域出身の青年が、開発僧 B の研修生として日本に渡り、地域の特産物であるココナッツを活かした事業を地域の村人と共に進めている。

²⁷ のちに国が認可する小学校、中学校、高校へと発展した。

《調査方法》

本研究では、調査と分析の方法として質的研究を採用し、半構造化面接法によるインタビューという手法を用いて調査を行った。インタビューでは「研究協力者が取り組む地域開発の具体的な内容」、「地域との関わり方」、および「実践する中で大切にしていること」の3点を軸に質問を行い、併せて自由に語れる時間も設けた。インタビューは約1時間半～2時間程度であり、各研究協力者の活動拠点とする僧院で実施した。

なお、研究協力者には、研究の目的、方法、個人情報取り扱いなどの説明文書を読み上げ、研究の趣旨を説明したうえで同意書を交わすようにした。同意書を交わす際には、ICレコーダーに録音することも了承を得ている。

開発僧^{かいほう} A、C、D へのインタビューはミャンマー語で実施し、日本語能力試験1級の資格を保有する村人 A が通訳として同行した。また、全てのインタビューには研究協力者と親交が深い 開発僧^{かいほう} B に同席してもらい、インタビュー中に仏教やミャンマーに関する前提知識が必要な話題が出た場合には、補足説明をしてもらうようにした。

3.4. 調査結果の分析

3.4.1. 分析方法

まず、分析の準備段階では、録音したインタビューを文字データに起こした。内容を捉えきれない場合は、日本人 開発僧^{かいほう} B に質問し解釈しながら文字データを完成させた。

データ分析の方法は、木下（2003）の修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、M-GTA）を採用し、インタビュー対象者の発言からカテゴリーの生成を行った。M-GTA は、質的データ分析法の代表的な手法のひとつであり、多様なメカニズムを把握し理論構築を行う方法論とされ、社会的相互作用に関係し人間行動の説明と予測に優れた理論と言われている（木下 2003 : 89）。半構造化面接法に基づくインタビュー結果の分析法として定番のものであることや、「多様なメカニズムを把握し理論構築」する点において本研究の分析方法に適していると判断した。分析テーマを「ミャンマーの開発僧^{かいほう}による地域開発のプロセスと構成要素」、分析焦点者を「ミャンマーの開発僧^{かいほう}」と設定し、以下の手順で分析を行った。

- ① まず、1人目の分析焦点者のテキストデータを読み込み、分析テーマと関連する箇所に注目しながら概念を生成して分析ワークシートを作成した。分析ワークシ

トには、概念名、定義、具体例、理論的メモを記入し、新たな概念が生まれるごとに新たなワークシートを立ち上げた（表 5）。分析は、既存の概念や用語を極力使わないよう概念を生成することを心がけ、研究協力者の語りをできるだけ歪めない概念名を採用するようにした。

- ② 2 人目以降の分析焦点者のテキストデータについても②と同様の手順で分析を行った。先に生成された概念に該当するものあった場合には、分析ワークシートの具体例の欄に新たにテキストを追加した。また、必要があれば、複数の概念間の関係を解釈的にまとめた上で、新たな概念生成を行った。
- ③ 以上の分析から生成された概念のうち、類似するものをまとめて「カテゴリー」とし、さらにそのカテゴリーをまとめて「領域」として整理した。また、解釈が恣意的な見解に偏ることを防ぐために、対極例と類似例の 2 方向から検討し、継続的な比較分析を行った。
- ④ データから新たに重要な概念が生成されなくなり、すべて問題点がなくなった時をもって理論的飽和化を判断したうえで分析を終了した。

表 5 分析ワークシートの例

概念名	村人と一緒につくる
定義	開発僧と村人が共に働くこと
具体例	(A-30) ビジネスのようなことになるけれど、田んぼ含めて、村人といろんなことをやってきた。 (B-8) その一歩として農作物や植物原料の加工品を村の人たちと一緒につくることにしたのです。 (B-9) 材料、製法、機材、運搬方法など、細部にわたって育てているミャンマー人と研究していきました。 (D-10) 大人を呼んで村について話し合いをしたりします。
理論的メモ	共に働く

なお、通常 M-GTA は調査対象者が 10～20 名程度の調査分析に用いられることが多いが、本研究では調査期間や場所等の物理的な制約から調査対象者は 4 名にとどまっている。

3.4.2. 分析結果と考察

分析の結果、4つの領域、22のカテゴリー、52の概念が生成された(表6)²⁸。分析焦点者である^{かいほつ}開発僧の視点から地域開発のプロセスを把握し、領域やカテゴリー間の関係を検討した結果を図3に示す。

以下ではまず、概念図のストーリーラインを説明したうえで、各カテゴリーを構成する概念について説明を行う。なお、領域、カテゴリー、概念は、それぞれ【】、『』、〈〉、で表記した。また、調査対象者の語りを引用する場合には「」で表記した。

表6 M-GTA 概念一覧

領域	カテゴリー	概念	定義
村人の心の開発	観法	人とどう生きるのか	自分自身の人生についてや、後の世代にも貢献することの大切さを観法の中で伝えること
		自分がしたことは何らかの形で自分に返ってくる	観法を通して因果応報の考え方を伝えること
		挫折を経験するからこそ人の痛みが分かる	自分の弱さを和らぐことで、人の痛みを自分のことのように受け入れられることを観法の中で伝えること
		子どもの時期は、大人の導きが必要	観法を通して、子どもの時期にどう生きるかという姿勢を教えること
	瞑想	親を敬う気持ち	観法を通して、親を敬う気持ちを育むこと
		呼吸を基本にして意識を流す	呼吸法に注意を向ける瞑想のやり方
	集団で学ぶ	心に意識を戻す	瞑想を通して自分に意識を向け直すこと
		思がある人の顔を思い浮かべる	具体的に思がある人の顔を思い浮かべて、感謝を唱える事による瞑想
	アイデンティティの探求	子どもたちを集めて合宿	子どもたちの心を育成する場を設けること
		お寺に村のみんなが来る	村人たちが共同で心を育む機会を設けること
	自分の課題と向き合う	答えを自分の中にある	外にばかり答えを求めず、自分の中から本質的に答えを探ること。答えは自分の中にあるということ
		本来の自分に触れる	瞑想を通して本来の自分に触れること
		生活には苦しみがある	忙しさに追われてイライラして過ごしている状態のこと
		欲にまみれる	食べ欲、お金に対する欲などに苦しむこと
		皆諦めている	怒ったりイライラしたりしてしまい、落ちつかなくなる
		人間関係に悩む	人と関わるなかで悩むこと
		同種や感情でがんじがらめになっている	自分自身を見失っている状態のこと
		情けない自分	自分自身を見失っている状態のこと
		今自分が経験する自分だけが自分でない事を知る	瞑想や観法を通してありのままの自分を知り、自己認識を深めること
		自分について経験できれば、人も同じであることがわかる	自分を知ることで他者のことが理解できること
	心の安定	自分の中にある感情を味わう	葛藤も含め、自分の中にあるものを全てを感じ、許すこと
		心を正す	自分の心と向き合い、苦しみの原因を正すこと
物事を客観的に客観的に考えることができる		集中力が向上することで、客観的に行動できるようになること	
穏やかに生きられる		瞑想を通して落ち着いて穏やかに過ごす生き方をすること	
可能性に目覚める	心に意識を向ける習慣が身につく	日常的に心に意識を戻しを感じる習慣を持つこと	
	自分の中に眠っていたものを目覚めさせる	その人の中に眠っていた可能性が目覚めること	
村人の自立支援	共に働く	村について話し合う	村人と地域について話し合うこと
		村人と一緒に働く	開発僧と村人が共に働くこと
	経済的に自立できる人材を育てる	経済的自立のための職業訓練	村人が経済的自立のための技術を指導・教育すること
		次のリーダーを育成する	リーダーを育成するために様々な経験をさせる
	経済的に自立するための仕事をつくる	まねできるモデルを提供する	村が発展できる、村人がまねできるビジネスモデルを教えること
		村が経済的に自立できるようにする	村人が自立するための仕事をつくること
教育支援	地域を発展させつつビジネスも作る	村人や地域の発展を目的としたビジネス	
	学ぶ機会を提供する	学校に通えない子のための訪問支援や寺子屋・学校の創設を行うこと	
	奨学金のようなもの	教育のための資金援助や教材援助を行うこと	
村人が自立する	孤児院兼養育院の私立教育期間	子どもたちが共同生活を営みながら学ぶ場	
	子どもたちが自分で決断できるようにする	子どもたちが自立できるように、親のような気持ちで育てていること	
	自分たちが勉強させてもらったことを分けあえる	自分が学んだ技術や知識を教え合うこと	
	機械の貸し出し	トラクターや重機などの機械を村人に貸し出すこと	
地域が発展	田んぼの貸し出し	田んぼを村人に貸し出すこと	
	寄付は村人を助けるために使う	寄付や布施を村人の支援や村の整備などに積極的に使うこと	
	寄付は村の発展のために使う	見返りを求めず、執着をなくしてお金を差し出す布施の行為のこと	
	関係性はとも深い	地域・村人の関係が非常に深いこと	
支え合い、助け合う関係性	卒業生のネットワーク	卒業した子どもたちが主体的にネットワークをつくっていること	
	国や地域を越えて助け合う	他の地域にも思いやりの輪が広がること	
	自主的に積極的に関わって事業を継続	支援していた村人が自立し起業すること	
	自分たちが自然栽培の来づくり	村人が来づくりを通して経済的自立をすること	
	慈悲の心を持って主体的に動く次世代	地域で育った若者が自立し、村の発展のために主体的に行動できる人になること	
	育てた人を介して村人を支援する	事業を継続できるようになった人を通して支援が広がっていること	
物心両面からみんなが幸せになる社会	物心ともに豊かになる	人間としての豊かさと物の豊かさを両立すること	
	要するに「みんなが幸せになる」	互いに助け合い・支え合うことで地域が発展し、みんなが幸せになること	

²⁸ 本分析は、松原(2020)に加筆修正を加えたものである。

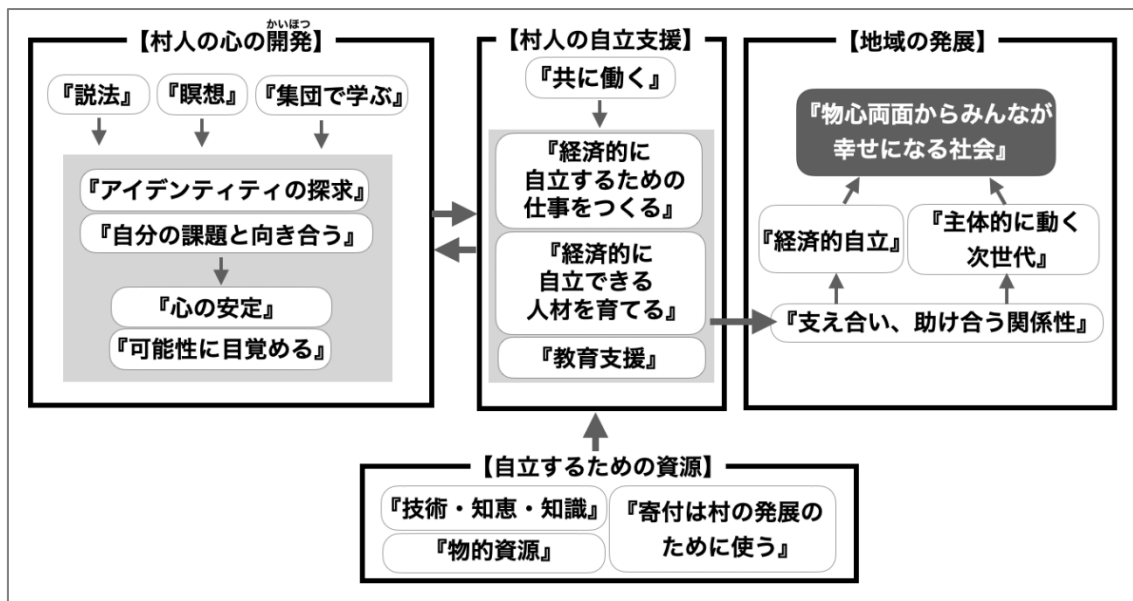


図3 ミャンマーの^{かいほつ}開発僧による地域開発概念図（筆者作成）

《ストーリーライン》

概念図から生成したストーリーラインは次の通りである。

^{かいほつ}開発僧はまず【村人の心の開発】^{かいほつ}から地域開発に着手していた。そのなかで『説法』と『瞑想』を行い、それらを『集団で学ぶ』場を村人に提供していた。村人は、説法や瞑想を通して『アイデンティティの探求』や『自分の課題と向き合う』ことを実践し、その結果、『心の安定』が見られるようになるとともに、『可能性に目覚める』ようになる。

さらに^{かいほつ}開発僧たちは、心の開発^{かいほつ}と並行して、【村人の自立支援】にも積極的に取り組んでいた。村人が自立するまでは彼らと『共に働く』ことを基本姿勢に、『経済的に自立するための仕事をつくる』ことに加え、『経済的に自立できる人材を育てる』ことや子どもや若者の『教育支援』も行っていた。また必要に応じて、^{かいほつ}開発僧が持つ『技術・知恵・知識』や所有している田畑・機材などの『物的資源』などを村人に分け与え、『寄付は村の発展のために使う』という姿勢で金銭面でのサポートも惜しみなく行い、【自立するための資源】を提供していた。

このように心の開発^{かいほつ}と自立支援を同時並行的に行うなかで、^{かいほつ}開発僧と村人、あるいは村人同士の『支え合い、助け合う関係性』、相互扶助の関係性が醸成され、その結果、村人の『経済的自立』や『主体的に動く次世代』の育成が実現するなど、^{かいほつ}開発僧の取り組み

によって『物心両面からみんなが幸せになる社会の実現』が果たされつつあることがわかった。以上のことから、^{かいほつ}開発僧による地域開発が【地域の発展】に寄与していることが確認された。

《領域ごとの考察》

続いて、図3における領域ごとの分析結果を記す。

【村人の心の^{かいほつ}開発】

この領域は、『説法』、『瞑想』、『集団で学ぶ』、『アイデンティティの探求』、『自分の課題と向き合う』、『心の安定』、『可能性に目覚める』の7つのカテゴリで構成される。これらのカテゴリから、いかに^{かいほつ}開発僧が村人の心を耕し、彼らの潜在する可能性を発掘していくかのプロセスが示された。そのうち『説法』、『瞑想』、『集団で学ぶ』の3点は、【村人の心の^{かいほつ}開発】を促す要素として抽出された。

『説法』では、^{かいほつ}開発僧が村人に伝える教えの内容が示されている。具体的には、自分自身の生き方やあり方、後の世代に貢献することの大切さなど〈人としてどう生きるのか〉を問うもの、〈自分がしたことは何らかの形で自分に返ってくる〉という因果応報の教えに基づくもの、〈挫折を経験するからこそ人の痛みが分かる〉こと、すなわち自分の弱さを知ること、人の痛みを自分のことのように受け入れられることを説くものなどがあり、その種類は多岐にわたる。そのなかには〈子どもの時期は、大人の導きが必要〉や〈親を敬う気持ち〉など、幼少期を過ごすうえでの姿勢やあり方について説いたものもあることから、子どもを対象にした説法を行う様子もうかがえる。こうした仏教的思想に基づく人間らしい生き方・あり方を人々に語り伝えることを表したのが『説法』のカテゴリである。

『瞑想』は、^{かいほつ}開発僧が指導する瞑想法に関する概念をまとめたものである。^{かいほつ}開発僧によると、瞑想法には「空気を吸って吐いて」（^{かいほつ}開発僧 A）と呼吸に注意を向け〈呼吸を基本にして意識を流す〉方法や、感謝を唱えながら〈恩がある人の顔を思い浮かべる〉感謝の瞑想などがある。それらの方法を通して、自分に意識を向け直し〈心に意識を戻す〉ことを実践するのが瞑想の目的と考えられる。こうした瞑想を行う理由について、^{かいほつ}開発僧 Aは「欲からの解放」と語る。「村にも大勢の人がいるが、ほとんどが食べることに意識がいつている。生きるために食べなければいけない。「食べなければいけない」というのも欲

ですよね。そこから解放されるための瞑想である」という 開発僧 A の語りからは、欲を含めた自身を苦しめているものの正体に気づき、それにとらわれない心の持ち方を学ぶことが瞑想をする意義のひとつにあることが示唆される。また、開発僧 は瞑想の指導を行うだけでなく、日頃から修行の一環として自ら瞑想に励んでいる点を確認しておきたい。

開発僧 C は「子どもたちを食べさせ勉強させるための苦労が続いていたので、瞑想で自分の気持ちを整えながら頑張るしかなかった。（中略）夜になって子どもが寝てから、部屋や木の下で瞑想や修行をしていた。飲まず食わずの時もあったが、7、8年の間は修行をしながら子どもを育てた」と、最も貧しかった時代を瞑想によって乗り越えた体験を語る。

開発僧 C の「修行をしないと本当の力もつかない、自分を超えられない」という言葉が表すように、開発僧 自身もまた瞑想の実践者であり、瞑想によって自らを乗り越え、自身の可能性を開花させてきた存在であると言えよう。

さらに、M-GTA の結果から、開発僧 は村人たちが共同で説法や瞑想を体験できる場を提供していることがわかった。たとえば、開発僧 A は、寺が所有する山に瞑想センター²⁹を設け、村人が集まって瞑想できる場を提供しているという。彼は、特に「雨安居（うあんご）」と呼ばれる雨期の期間には村人が集まって瞑想をし、仏教の教えを学ぶ機会を作っているとのことだった。また、開発僧 D は、雨期の間に子どもたちを集めて瞑想会を行ったり、毎年3月には6歳から大学生までの青少年を対象にした基礎から瞑想を教える合宿を3日間開催したりしているとのことだった。これらのことから、彼が子どもたちの心の育成を目的とした集団学習の機会を積極的に提供していることがうかがえる。村人たちもまた、このような場に参加者として訪れるだけでなく、食事提供などのサポートも行っているのだという。以上のように、開発僧 は〈子どもたちを集めて合宿〉する機会や、村人が共同で心を育むような〈お寺に村のみんなが来る〉機会などの『集団で学ぶ』場を提供していることがわかった。

以上の『説法』『瞑想』『集団で学ぶ』ことを通して、村人は『アイデンティティの探求』と『自分の課題と向き合う』ことに取り組んでいることがわかった。『アイデンティティの探求』は、外に答えを探しに行くのではなく〈答えを自分の中に求める〉こと、そして内面の探求を通して〈本来の自分に触れる〉ことを指す。『自分の課題と向き合う』は、村人が自身の抱える課題について理解しようと努めることであり、食べる欲や金銭欲

²⁹ 瞑想会ができる集会所のような施設。

などの〈欲にまみれる〉状態、怒りや苛立ちによって落ち着かない〈皆燃えている〉状態、日常生活のなかで〈人間関係に悩む〉、自分自身を見失った〈問題や感情でがんじがらめになっている情けない自分〉などの誰もが日常のなかで抱えうる個人の内面的な葛藤や課題と向き合い、〈自分の中にある感情を味わう〉こと、そしてありのままの自分を知ること、〈今自分が認識する自分だけが自分でない事を知る〉こと、苦しみの原因を突き止め〈心を正す〉ことを指す。その結果〈自分について認識できれば、人も同じであることがわかる〉と考えられる。

こうした心の^{かいほう}開発の結果、行き着くと考えられるのが『心の安定』と『可能性に目覚める』ことである。『心の安定』とは、具体的には集中力が向上し〈物事を落ち着いて考えることができる〉ようになること、落ち着いて〈穏やかに生きられる〉ようになること、そして日常的に〈心に意識を向ける習慣がつく〉ことの3点が挙げられる。また、『可能性に目覚める』段階においては、〈自分の中に眠っていたものを目覚めさせる〉よう働きかけることで、本来その人が持っていた〈優しさや思いやり・可能性が現れてくる〉のをサポートし、その結果、村人が〈変化の一步を踏み出す〉ことができる、という過程をたどる様子が見られた。

ここまで、^{かいほう}開発僧は説法や瞑想の指導・村人同士が集団で学ぶ場を提供することを通して、村人の『アイデンティティの探求』と『自分の課題と向き合う』ことを促進し、その結果、村人が『心の安定』を得て『可能性に目覚める』様子が確認された。

【村人の自立支援】

この領域は、『共に働く』、『経済的に自立できる人材を育てる』、『経済的に自立するための仕事をつくる』、および『教育支援』の4つのカテゴリで構成される。これらのカテゴリから、^{かいほう}開発僧がいかに村人たちの自立を支援しているのか、その詳細がわかる。

^{かいほう}開発僧はまず〈村について話し合う〉、〈村人と一緒につくる〉など村人たちと『共に働く』ことを基本に支援を行っていた。たとえば^{かいほう}開発僧Bは、地域の農作物や植物原料を用いた加工品を村人と共に商品開発し、日本で販売を行うなど、村人と共同して数々のプロジェクトを行っている。

さらに、M-GTAの結果からは、村人の状況に応じて個別に必要な支援を行う開発者の姿を読み取ることができる。彼らは自ら事業を運営し、経済的自立を希望する村人に向けて、技術やマネジメントに関する学習の機会や指導・援助を行う〈経済的自立のための職

業訓練〉を実施していた。たとえば、^{かいほつ}開発僧 B は、農業を学びたいと志願した現地の若者に日本で農業従事者から指導を受ける体験学習の機会を提供している。

このような機会提供に加え、個人事業としてビジネスができるよう〈真似できるモデルを提供する〉ことも行われていた。たとえば、^{かいほつ}開発僧 A は、米作りを始めたいという村人に農地を貸し出し、収穫の半分を寺に納めてもらう仕組みをつくっている。一見すると単なるレンタル事業であるが、彼はこれを村人の「教育のひとつ」と捉えているという。「村が発展できるやり方を教えています。田んぼの貸し出しも教育のひとつで、システム自体も真似できるモデルを提供しています。レンタルのシステムも、同じようにまねできる」（^{かいほつ}開発僧 A）という考えのもと、村人が自立し、地域も発展できるビジネスモデルを伝えているとのことであった。また、村人たちとココナッツオイルの製造事業に取り組む^{かいほつ}開発僧 B は「支援先の村で何が必要なのか、また何ができるのかと考えた時、日本からの一方的な寄付だけではなく、逆に日本人が喜んで買ってくれるものを生産し販売することで、村が自立できる支援のあり方ができないかと考えました」と語る。ゆくゆくは事業に関わった村人たちが自ら事業を興せるよう、共に事業経営しながら商いの仕組みなどを伝えているという。

このように経済的に自立するための手段を提供するなかで、^{かいほつ}開発僧 は地域社会の発展を牽引する〈次のリーダーを育成する〉ことに取り組んでいた。たとえば、^{かいほつ}開発僧 B は、将来故郷で活躍できるリーダーの育成を目的に現在 2 名のミャンマー人青年に日本での研修の機会を提供しており、「彼らが次のチャンスを母国の子ども達に与え、ミャンマーの美しさを育て豊かさを導いてもらえるよう、真剣に次のリーダーを目指して歩もうとする子たちに日本の留学や会社を通じた様々な経験を提供したいと考えています」と次世代育成への意欲を語っている。

以上のような人材の育成と同時に行われていたのが、^{かいほつ}開発僧 自らが事業を興し、村人が『経済的に自立するための仕事をつくる』ことであった。彼らは〈村が経済的に自立できるようにする〉ことを目標に、村人に対する大工・ドライバーの仕事の提供やトラックのレンタル事業、地域の特産品を使った商品開発、シーズン限定の喫茶店やパソコン教室などの事業運営を行うなどして村人の仕事を生み出していることがわかった。^{かいほつ}開発僧 B が「地元の村の人たちも安心してココナッツオイルの製造に携われるようになっていきます。」と語るように、これらの事業は村の新たな雇用創出の場になっていることがわかる。また、これらの事業に取り組むにあたっては、単に利益を出すためではなく、村人の自立や地域

の発展を前提としたビジネスを行っており、〈地域を発展させつつビジネスもやる〉という姿勢が見られた。

また、子どもたちに向けて、将来を見据えた『教育支援』が行われていることもわかる。学校に通えない子どもたちのための訪問支援や寺子屋・学校の創設・運営など〈学ぶ機会を提供する〉取り組みは、今回インタビューを行ったすべての^{かいほつ}開発僧が実施していた。具体的には、国が認可する小学校、中学校、高校や見習い僧の少年（コーエン）が進学できる大学の建設、英語や日本語・モン語・タイ語の教育、日本での農業体験学習などである。これらにかかる教育費の補助として〈奨学金のようなもの〉を提供する場合もあった。こうした支援を行う背景には、〈子どもたちが自分で歩けるようにする〉という^{かいほつ}開発僧の思いがある。^{かいほつ}開発僧 C が「要は自立させるということ。子どもらが自立したとき、自分の家族をどう守っていくのが大事。そして、自分の子どもをどのように教育していくかが大事だと考えている」と語るように、^{かいほつ}開発僧は子どもたちの自立を見据えた教育支援を行っていることが確認された。

【自立するための資源】

この領域は、『技術・知恵・知識』、『物的支援』、および『寄付は村の発展のために使う』の3つのカテゴリで構成されている。これらのカテゴリから、【村人の自立支援】を援助するために提供される資源にはどのようなものがあるのかを知ることができる。

『技術・知恵・知識』には、自ら学んだ技術や知識を提供することを表す概念〈自分たちが勉強させてもらってきたことを分け与える〉がある。これには、^{かいほつ}開発僧 D の「自分たちが勉強させてもらってきたことを村人に分け与えるために説法を広めています。」という語りで見られるように、^{かいほつ}開発僧自身がこれまで学んだ知識等を村人たちに広める行為と、「今では彼（^{かいほつ}開発僧の教育支援を受けて学んだ村人）が地域の青年たちにその農法を伝えて、自分たちで自然栽培の米づくりをするようになっていきます。」（^{かいほつ}開発僧 B）といった言葉に代表されるとおり、^{かいほつ}開発僧から支援を受けた村人がそこで得た技術や知識を他の村人に広める行為の2種類が見られた。

『物的支援』には、〈機械の貸し出し〉、〈田んぼの貸し出し〉に表される経済活動を始めるために必要な機材や土地の貸し出しの例があった。

また、『寄付は村の発展のために使う』では、村人が〈「どうぞお使いください」の気持ち〉で差し出した寄付が、^{かいほつ}開発僧により〈寄付は村人を助けるために使う〉ものとして

村の発展に還元されていることがわかる。ここでいう寄付とは、見返りを求めず、執着をなくして金銭を差し出す布施の行為のことである。この時、布施をする際の姿勢について、^{かいほつ}開発僧は「どのような心でやっているのかが大切」（^{かいほつ}開発僧 D）と語る。「布施をする時には、金額ではなくその気持ちが大事。（中略）執着をなくして「どうぞお使いください」の気持ちでお渡しします」（^{かいほつ}開発僧 A）というように、見返りを求めず、差し出す喜びを感じられる心が大切なのだという。

このようにして村人から受け取った寄付について、^{かいほつ}開発僧 A が「私たちは、普段からたくさんのお布施をもらう。お寺にも半分お金を残すが、残りは道路をつくるなど、必要なことに使うようにしている。」と語るように、^{かいほつ}開発僧らはその金銭を村人の支援や村の整備などに積極的に使っていることがわかった。

【地域の発展】

この領域は、『支え合い、助け合う関係性』、『経済的自立』、『主体的に動く次世代』、および『物心両面からみんなが幸せになる社会の実現』の4つのカテゴリで構成された。これらのカテゴリからは、^{かいほつ}開発僧の取り組みによって最終的に地域にどのような変化が生まれたのかを読み取ることができる。

まず、分析過程において、^{かいほつ}開発僧と村人の〈関係性はとても深い〉ことや、^{かいほつ}開発僧が運営する学校を卒業した〈卒業生のネットワーク〉の形成、他の地域にもお互い様の精神で思いやりの輪が広がる〈国や地域を超えて助け合う〉様子を示した概念が抽出され、『支え合い、助け合う関係性』というカテゴリが生成された。

本カテゴリからは、パットナム（Robert D. Putnam）によって提唱された「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範」（Putnam 2000 [訳 2006 : 14]）を示す概念である社会関係資本（＝ソーシャル・キャピタル）が地域に醸成されている様子を読み取れる。社会関係資本は、それが豊かであるほど、市民活動への参加が促進される可能性が高く、完全失業率や犯罪率が低くなるなどの関連が内閣府国民生活局によって報告されており（URL13）、地域の維持や活性化に欠かせない概念としてしばしば用いられるものである（e.g. 國光 2017）。すなわち、^{かいほつ}開発僧による地域開発は、この社会関係資本を基礎に発展する地域づくりとも見なすことができるだろう。合わせて、〈国や地域を超えて助け合う〉様子も見られることから、「長期的

な『定住人口』でも短期的な『交流人口』でもない、地域や地域の人々と多様に関わる者」(総務省 2019: 1)である関係人口も増加していることがうかがえる。

その上で、^{かいほつ}開発僧が支援してきた村人が〈自主的に積極的に関わって自分で事業継続〉したり、〈自分たちで自然栽培の米づくり〉を始めたりするなど、村人の『経済的自立』が始まっていることがすべての^{かいほつ}開発僧の語りから確認できた。そのなかでは、^{かいほつ}開発僧 A に農地を借りたことで経済的に安定した村人が、次に米作りを希望する村人に農地を譲るという事例があった。これは、自らがかつて貧困に苦しんだからこそ、同じように苦しむ村人の痛みを自分ごととして捉え、自分が自立したら困っている人に機会を譲るという慈悲に基づいた行動の事例と言えるだろう。

また、地域で育った若者が自立し〈主体的に村の将来を考えられる〉人材へと成長している様子が確認され、^{かいほつ}開発僧も彼らのような〈育てた人を介して村人を支援する〉ようになるという変遷が見られるなど、『主体的に動く次世代』が活躍する様子が見られた。本カテゴリーからは、地域を担う人材が創出され、「社会活動に参画する人口」(長野県 2013: 69)である活動人口が増加している様子が読み取れる。

これらの変化によって、〈物心ともに豊かになる〉地域、互いに支え合い・助け合うことで地域が発展する〈要するに「みんなが幸せになる」〉地域が生まれつつあり、『物心両面からみんなが幸せになる社会の実現』に向かっていることが分析の結果から示唆された。

3.4.3. ^{かいほつ}開発僧による地域づくりが村人に与えた影響

前節で明らかにした^{かいほつ}開発僧が手がける地域開発のプロセスとその詳細は、あくまで^{かいほつ}開発僧の視点に立ったものであり、その妥当性を検討するためには、実際に彼らの支援を受けた村人がその取り組みからどのような影響を受けたのか、現在地域とどのように関わっているのかについて明らかにする必要があると考える。そこで、これらの問いに取り組むために、^{かいほつ}開発僧 A～Dいずれかに関わりのある人 3 名を対象にした追加インタビュー調査を実施した。

《追加調査の概要》

筆者は 2019 年 8 月 18・19 日の期間、村人 A～C の 3 名に協力を得て、岡山県にある^{かいほつ}開発僧 B の拠点で各 1 時間程度の半構造化面接法によるインタビューを実施した。追

加調査対象者の選定には 開発僧 B に助言を求め、開発僧 A～D いずれかの 開発僧 のもとで支援を受けた経験のある村人 3 名に協力を依頼することとなった（表 7）。

表 7 追加調査対象者の属性（調査時）

名前	年齢	出身地	関わりのある開発僧
村人A	27歳	エーヤワディー州マウビン地区	B、C、D
村人B	29歳	カレン州パアン郡区	B、C
村人C	42歳	モン州パウン地区	A、B、C

村人Aは、開発僧 D が拠点を構える村出身のビルマ族の男性である。2008 年に発生したサイクロン・ナルギスの影響で近隣の学校に通えなくなったことを機に、開発僧 C が運営する孤児院兼寄宿制の私立教育機関に入学した。8 ヶ月ほど滞在した頃、開発僧 C のもとに物資支援にやってきた 開発僧 B らと出会い、日本で技術研修を行うこととなる。日本の通信制大学にて学位を取得し、日本語能力試験 N1、すなわち「幅広い場面で日本語を理解することができること」を表す日本語能力を有する（URL14）。

村人Bは、少数民族のカレン族出身の男性である。村人Aと同様に、開発僧 C が運営する私立教育機関で学んでいた村人Bは、開発僧 C のもとに物資支援にやってきた 開発僧 B らと出会い、現在は村人Aとともに日本で研修を受けている。日本語能力試験 N2（「日常的な場面で使われる日本語の理解に加え、より幅広い場面で使われる日本語をある程度理解することができる」レベル）の日本語能力を有する（URL14）。

村人Cは、開発僧 A が拠点を構える村出身のモン族の男性である。開発僧 A、B、C の支援活動のサポートに積極的に携わっている。自身は統計学の博士号を持ち、2011年に私塾を開塾。現在 12～15 歳の生徒を常時 50～60 人受け入れている他、日本語習得を希望する現地の青年 4 名を研修生として受け入れを行っている。

インタビューは、「心の開発が自身に与えた影響」「現在どのような活動を行っているか」の 2 点を軸とした質問に加え、自身の言葉で語る時間を設けた。村人 A・B はそれぞれ日本語能力試験 N1 と N2 の日本語能力があることから、主に日本語でインタビューを行い、村人 C のみ村人 A の通訳を介した。また、村人 C とのインタビューはインターネットを通じたビデオ通話を活用し、現地との遠隔による調査を行った。調査対象者には、研究の目的、方法、個人情報の取り扱いなどを記載した研究趣旨の説明文書を読み上げ、研究協力への同意を得た。この際、IC レコーダーに録音することも了承を得ている。

《追加調査の結果》

以下、村人3名に行ったインタビューの結果を記す。

【心の開発の影響】

心の開発の村人自身に対する影響を明らかにすべく、まず、普段から瞑想を行う習慣はあるかを尋ねたところ、頻度の差はあるものの、すべての村人に瞑想をする習慣が根付いているという趣旨の発言が見られた。具体的には「自分が辛かったり、イラついたり、頭が悩み出した時」（村人A）や「自分の気持ちを静かにしたい時」（村人B）、「不安や心配で眠れなくなった時」（村人C）などに瞑想をしており、その結果「落ち着く、（不安や悩みを）自分で解決できる」（村人A）、「日常の中でも自分の気持ちにすぐ気づけるようになっていく」（村人B）といった発言が見られた。3名が語った内容は、図3における『瞑想の効果』のカテゴリーの内容に当てはまると考えられる。

また、瞑想とともに村人の思想に大きく影響を与えたと考えられるのが、説法の要素である。たとえば村人Aは、幼い頃から村の子どもたちと共に説法を聞き、心の持ち方や両親への感謝の気持ちを持つことなどを教わってきたという。その際、ただ一方的に開発僧の話聞くだけでなく、自分だったらどう考えるかを頻りに開発僧から問いかけられたといい、その問いに自身が答えたり他者の考えを聞いたりするなかで、自己認識を深めたり、自分がいかに生きるべきかを自問自答するようになったと語っている。さらに、村人Aが「お坊さまは、相手によって違う言葉を投げかけられます。人に対する言葉は決して人ごとではなく、誰の心にも響く」と語るように、他者に対する投げかけもまた自身の学びになっていたことがうかがえる。以上の語りは、表6の『アイデンティティの探求』『自分の課題と向き合う』『心の安定』の各カテゴリーの内容に一致していると言えよう。

こうした心の開発は、現在の村人たちにどのような影響を与えているのだろうか。日本で起業を果たした村人Aは、日本での挑戦も心の開発がなければ実現していなかったかもしれないと述べる。「心の育成がなかったら、実践する方にいけない。心が折れちゃう。（でも今は）自分の中に立ち戻れる場所がある。だから、（折れずに）戻ってこられる。」という語りや、「今は日本で暮らしていますが、いつも自分のことを見失わないでいられるのは、心の育成があったからだと思います。」という語りからは、どこにいても自分を見失わず、アイデンティティ形成が進んでいる様子がうかがえる。また、心の開発によってアイデンティティを探究した体験は、精神面の安定や可能性の発露のみならず、

可能性を発揮できる基盤になっていることが示唆される。これに関連して村人 B もまた、心の^{かいほつ}開発がなかったら今の自分はいないと語る。「その教育があったから、今の私があると思います。もしそれがなかったら、私はろくでもない人間になっていたと思う。」と彼が述べているのは、少数民族のカレン族として生まれた村人 B が、1948 年頃から続くミャンマー国軍と少数民族間の内戦を幼い頃より経験していることに由来する。簡単に武器が手に入る環境のなかで育ちながらも、地元の^{かいほつ}開発僧から「人間として守るべきものを教えてもらった。」ことで、人としての道を逸れることなく生きてこられたと語った。このように、^{かいほつ}開発僧による心の^{かいほつ}開発は村人たちの人生や人格形成に大きな影響を与えており、その教えは彼らの価値観や行動規範として根付いていることや、心の^{かいほつ}開発が自立に向けての基礎になっていることが理解できる。

さらに、心の^{かいほつ}開発の影響として村人に共通して見られたのは、他者の役に立つことが自分の喜びになるという自利利他の精神である。自利利他とは「自分の幸せだけではなく、他人の幸せにも目を向ける」（田中 2018: 3）ことを表した、仏教に由来する用語である。村人 B の「困っている人がいたら、すぐに助けに行きます。それが必要だからです。（中略）村の人や、自分のまわりの人のために私ができることを頑張りたいと常に思っています。」という発言に代表されるように、インタビューではすべての村人からは他者の役に立ちたいという意欲や、他者が抱える困難を自分ごととして解決しようとする姿勢が見られ、自利利他の精神を持ち合わせている様子が見られた。近似する概念に「まず他人の幸福や利益をはかること」（見坊他 2008: 1635）を表す利他があるが、利他は自己犠牲感を伴う場合があるのに対し、自利利他は自分自身の喜びとして他者の役に立とうとするため、行為が持続しやすいつと考えられる。そうした精神が芽生えるきっかけになったと推測されるのは、心の^{かいほつ}開発の実践を通して^{かいほつ}開発僧に接したことで推測される。村人 B の「お坊さんは、すべての人々のために考えています。人々を苦しみから救うために何ができるか、自分の体や頭をどれだけ人のために捧げられるのかを教えてくださいました。自分もできるだけそういう道を歩んでいきたいと思っています。」という語りや、村人 C の「自分の心がけ一つで、人の痛みがわかり、思いやりが芽生えてくる。そういうところが（^{かいほつ}開発僧から）一番学んだところ」という語り、また村人 A の「これ（心の^{かいほつ}開発）がなかったら、みんな人を批判ばかりして、人を思いやることができないと思います。」という語りから、^{かいほつ}開発僧による心の^{かいほつ}開発が村人の自利利他の精神を呼び起こす契機となっている様子がうかがえる。加えて「家を建てるのも、自然に手伝う。稲刈りもみんなです。（中略）お

互い様。あげたりもらったり、それは普通で、自然にやっている。」（村人B）という発言から、村人たちは日常的に近隣住民と協力しあい、当然のように他者を助ける環境があったと考えられる。これに関連して村人Aは、物心ついた時には30～40人の子どもたちと一緒に説法や瞑想を経験していたと語り、その時の経験が他者に対する優しさや思いやりを育むきっかけになるなど、心の開発^{かいほつ}を含む村での暮らしそのものが「思いやりを実践するパッケージになっている」と分析していた。

これらの村人の発言はM-GTAから生成されたカテゴリ『支え合い、助け合う関係性』を裏付けるものであると同時に、村人たちの自利利他の精神が発現した要因を示すものとも考えられるだろう。すなわち、村人の自利利他の精神は、心の開発^{かいほつ}の実践を通して開発僧^{かいほつ}に接するなかで生まれており、日常的な村人同士の相互扶助や幼い頃からの集団における心の開発^{かいほつ}の経験を通して、その精神がさらに醸成されていったことが推測される。

【村人たちの発展】

最後に、開発僧^{かいほつ}による支援を受けた3名の村人たちの現在の活動及び今後の方向性について尋ねた。村人Aは、開発僧^{かいほつ}Bの指導のもと、日本で起業を果たし、現在は故郷の特産品であるココナッツオイルやその加工品の製造販売などを行っている。今後は日本で就業するミャンマー人の若者を対象にした人材育成事業などの展開を予定しており、「事業を大きく回して、より多くの人を幸せにしたい」とのことだった。この村人Aの発言は、M-GTAのカテゴリ『物心両面からみんなが幸せになる社会の実現』に通じるものと言える。

続いて、村人Bは、開発僧^{かいほつ}Bの支援を受けて日本の語学学校に通ったのち、日本語能力試験N2を取得した。現在はその語学力を活かし、開発僧^{かいほつ}Bや村人Aが運営する事業をサポートしながら自立を果たしている。今後も引き続き、村人Aが興した事業の運営に従業員として関わることとなっている。

そして、村人Cは、日本での農業研修を経たのち、出身地であるモン州にて地元の大学生と共に自然農法による米作りを行い、収穫した米を開発僧^{かいほつ}A、Cのもとに届けている。また、12～15歳の地域の子どもたちを対象にした塾を運営し、子どもたちが自立するための教育を提供している。塾では単に勉強を教えるだけではなく、心の育成に多くの時間を割いているとのことだった。今後は「知識をさらに増やして、自分が持っている知識を後世に伝えていきたい。」と語っている。以上の村人Cの語りは、図3の『まずは村人の

心の開発から』、『経済的に自立できる人材を育てる』、『教育支援』、および『技術・知恵・知識』の内容に一致しており、開発僧の教えが受け継がれていることがわかる。

以上の結果から、村人 3 名が『経済的自立』を実現しており、『主体的に動く次世代』として地域の発展に貢献していることが確認された。

3.4.4. 小括

ここまで、M-GTA を用いてミャンマーの開発僧が手がける地域開発のプロセスとその詳細を分析した。その結果、社会問題の解決に積極的に取り組む開発僧は、村人一人ひとりの課題を解決しなければ、国や地域が真に発展することはないという考えのもと、村人の心の開発から地域開発に取り組んでいることが明らかとなった。また、村人の心の開発と自立支援の双方を並行して実践することで、開発僧や村人、村人同士に相互扶助の関係性が生まれ、村人の経済的自立や地域を担う次世代が育っている様子が見え、結果として地域の社会関係資本の醸成や、活動人口・関係人口の増加につながっていることがわかった。個人の課題解決に向けた取り組みは、結果的に地域の課題にもアプローチする構図となっており、開発僧の一連の取り組みが、地域の発展に寄与していることが確認された(図 3)。

また、村人に行ったインタビュー調査の結果、村人の発言と M-GTA の概念図が示す内容は一致しており、分析結果が概ね妥当であることが確認された。加えて、村人は心の開発により普段から自分の気持ちを自覚する習慣ができており、自分がいかに生きるべきかを習慣的に自問自答している様子が見えた。それらの習慣によって不安や悩みなどを自分で解決できるようになり、どんな状況にあっても自分を見失わずにいられる様子が見ええる。以上の結果から、心の開発によって村人に自己課題を解決する力が生まれ、アイデンティティ形成が促進されていることがわかる。さらに、村人は、心の開発や共同作業を通して開発僧の慈悲にふれることでの自利利他の精神を発現しており、村人同士が支え合い助け合う地域風土によってその精神がさらに醸成されている様子が見ええた。

以上のように、ミャンマー開発僧による地域開発では、心の開発によって村人のアイデンティティ形成と自利利他の精神の発現が促進され、開発僧と村人や村人同士の相互扶助によって地域が発展していたことが明らかになった。アイデンティティ形成を通して、自分が何者で、どのように生きていきたいのかを自覚することは、潜在的可能性の発掘に寄与することはもちろん、可能性を発揮するための実践を行う原動力にもなっていると推測

される。また、自利利他の精神が併せて発現していることで、可能性を発揮する際にも人や地域の役に立つことが行動の前提となっており、自利利他の精神は村人の可能性の発揮が地域の発展につながる鍵になっていたと考えられる。さらに、^{かいほつ}開発僧と住民や住民同士が共に働くことで、相互扶助の関係性が築かれ、地域を発展に導くより大きな動力となっていることが見てとれた。

筆者は、本研究のフィールド調査のためミャンマーへ渡航した際、約 10 年ぶりにある^{かいほつ}開発僧の活動拠点を訪問した。最後に訪問した 2008 年、その地域は、^{かいほつ}開発僧 A が地域開発に取り組む地域に 2008 年に訪れたことがある。当時、その地域の村人たちは、仕事もなく貧困に喘いでいた。しかし、今回の調査では、^{かいほつ}開発僧 A は「この村では貧しい人がほとんどいなくなった」と語った。前回の訪問以降、^{かいほつ}開発僧 A は貧しさに苦しむ村人を把握し、心の^{かいほつ}開発から村人を育成することで、村人同士が互いに助け合い、経済的に自立できる仕組みをつくっていたのである。筆者の目から見ても、明らかに街並みや民家が整備され、暮らしぶりが豊かになっている様子が確認できた。インタビューの中で、なぜこのような地域開発を行うのかを尋ねたところ「要するにみんなが幸せになる」ためであると述べた^{かいほつ}開発僧 A の穏やかな眼差しが印象に残っている。このように^{かいほつ}開発僧は、村人を物心両面から豊かにしていくことに力を入れていた。その行いが結果的として、地域を育むことにつながり、「みんなが幸せになる」地域への発展に寄与していることがうかがえた。

以上のようなミャンマーの^{かいほつ}開発僧による地域開発は、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりの先行事例であり、10 年以上にわたり継続する地域づくりの成功事例とも位置づけることができるだろう。ミャンマーの村と日本の地方では、国家的な経済状況や、宗教的な文脈、社会状況なども異なるが、以下ではそれらの違いを超えて適応可能な、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりの枠組みを提示したい。

そうした枠組みは、本研究の M-GTA と追加調査の双方の結果を手がかりにすることで、地域づくりモデルを構築することが可能であると考えられる。一方で、この地域開発の特徴である瞑想法や^{かいほつ}開発僧といった仏教的要素については、人口の約 9 割を仏教徒が占めるミャンマーの文化的背景に根ざしたものであり、日本の地域づくりに応用する際には、宗教的枠組みを超え、より普遍性を持った要素に代替することが求められる。そこで、次

節では、研究結果を手がかりに日本で実践可能な地域づくりモデルの枠組みを検討していくこととする。

3.5. プロトタイプの提示

本節では、ここまでの調査結果を手がかりに、日本で実践可能な「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりのモデルである「内発的イノベーション地域づくりモデル」のプロトタイプを図4に示す。

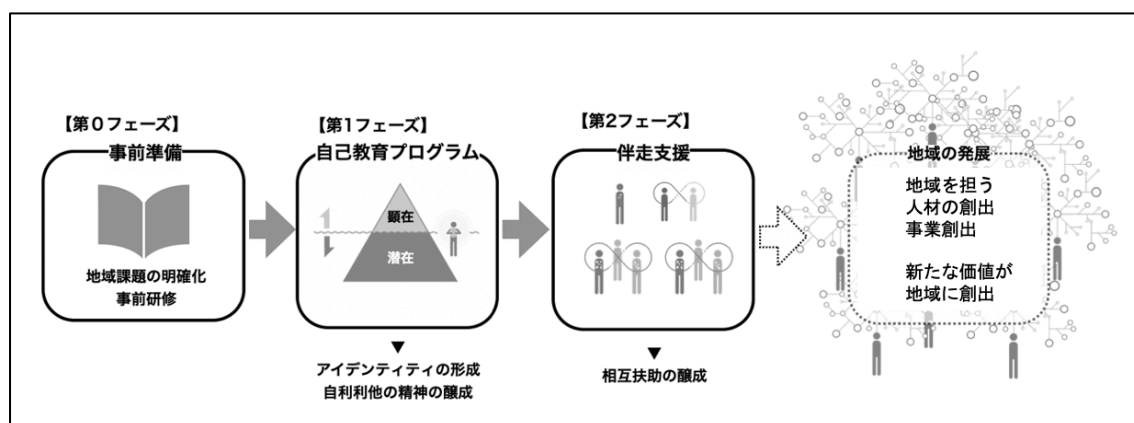


図4 「内発的イノベーション地域づくりモデル」のプロトタイプ（筆者作成）

ミャンマーでのフィールド調査の結果、^{かいほつ}開発僧は村人の^{かいほつ}心の開発から地域開発に着手していることがわかった。また、^{かいほつ}心の開発と並行して、村人の経済的な自立を支援するために、^{かいほつ}開発僧自らが村人と共に働きながら、雇用創出や人材育成、教育支援などを行っている様子が見られた。さらに、村人の必要に応じて、技術・知恵・知識や物的資源、寄付の活用など自立促進に必要な資源を提供していることが明らかになった。加えて、地域開発に着手する以前に、修行を通して自らを地域開発に取り組める状態に整えている様子も見られた。以上を踏まえて、日本での実践を想定した地域づくりの枠組みを検討すると、まずは地域づくりを始める事前準備を行うことが想定される。この段階を【第0フェーズ】と設定する。続いて想定されるのは、住民の^{かいほつ}潜在的な可能性を発掘する社会教育の場の提供である。この段階を【第1フェーズ】とする。最後に、見出された可能性が発揮できるための支援を想定する。この段階を【第2フェーズ】と設定する。以上の流れを踏襲することで、地域を担う人材の創出や、新たな事業創出など、「個人の内発的発展」を通じた新たな価値の創出が地域に起こり、最終的に「誰もが幸せになる地域」へと発展していくことが予想される。

以下では、各フェーズの内容をさらに詳述していくこととする。なお、この地域づくりは、地方自治体や地元住民組織、NPO 団体等が協働して分担しながら実施することを想定しているものである。

【第0フェーズ】事前準備

はじめに、地域づくりを行うにあたっての事前準備の段階を設けた。このフェーズで想定されるのは、潜在的可能性を発掘する対象となる住民を決めるなど、地域づくりを実践可能にするための準備である。加えて、^{かいほつ}開発僧が日頃から瞑想等の修行を実践していたという前提を踏まえ、本地域づくりを担う者もまた事前研修等で実際に提供するプログラムを自ら体験するなど、地域づくりへの理解を深めることが望ましい。

【第1フェーズ】自己教育プログラム

ミャンマーの事例から、「個人の内的発展」に基づく地域の発展を実現するためには、まず、住民の潜在的可能性を発掘する自己教育の場が必要であることが示された。そこで第1フェーズには、こうした自己教育プログラムを行う場を設定した。本フェーズは、^{かいほつ}開発僧の実践における「村人の心の^{かいほつ}開発」に相当するものである。ミャンマーの事例において、^{かいほつ}開発僧は地域に暮らす住民一人ひとりの心のあり方を重要視し、地域の課題を解決するには、まず人間の行動や思考の源となる心の問題を解決しなければならないとして、「個人の課題」に取り組むことを重要視していた。^{かいほつ}開発僧の事例を参考にする^{かいほつ}と、個人が抱える内的な課題に取り組むことは、潜在的な可能性を発掘するプロセスのひとつであると考えられる。

そうした場を設定する要件には、参加する住民のアイデンティティ形成を促進することがあげられる。自分が何者でどのように生きていきたいのかを自覚するという行為が、潜在的可能性の発掘に関連していることは、自己教育の理論やミャンマーの事例からも裏付けることができる。このように、住民が潜在していた自身の可能性を自覚することは、「個人の内的発展」が促進される第一歩と言えるだろう。

一方で、「個人の内的発展」が地域発展へと結びついていくためには、単に可能性を発掘し、アイデンティティを形成するだけでは不十分と考えられる。ミャンマーの事例から、アイデンティティを形成する自己教育を他の住民との関わりを通して実践していくことで、住民に「人の役に立つことが自分の喜びである」という自利利他の精神が発現して

いくことが示唆された。自利利他の精神が発現することで、自身の可能性を発揮する際にも、人や地域の役に立つことを前提とした行動が生まれるようになると考えられる。このように、自利利他の精神は、「個人の内発的発展」と地域の発展を橋渡しする重要な要素と考えられる。

第2章第2節第1項で示した鶴見の生活記録運動においても、集団学習を通じたアイデンティティ形成を通して自利利他の精神が発現していたように、心の開発^{かいほつ}に替わる自己教育プログラムを導入することで、参加した住民に自己課題を解決する力が生まれ、アイデンティティ形成や自利利他の精神の発現が促進されると予想される。

【第2フェーズ】住民の可能性が発揮できるための支援

第2フェーズでは、第1フェーズで住民たちが見出した可能性が、地域で発揮できるための支援を行うこととした。このフェーズは、開発僧^{かいほつ}の地域開発における「村人の自立支援」に相当するものである。ミャンマーの地域開発においては、開発僧^{かいほつ}は村人の経済的自立を目的に、雇用の創出や教育を施すなどの各種支援を行い、必要に応じてアイデアやリソースの提供も行っていた。支援の目的が経済的自立に限定されているのは、地域課題である村の貧困に対応することが急務であったからと考えられる。

図4にもあるように、このフェーズで提供される支援メニューは、現在日本の各自治体が提供する行政サービスや社会教育活動の内容にも匹敵するものである。一方で、日本での地域づくりを想定した場合には、住民一人ひとりの多様な可能性を開花させることが目的となるため、既存の支援枠に住民を当てはめるのではなく、一人ひとりに応じた個別具体的な助言や、助成金・場・人的リソース等の提供など、第1フェーズで発掘された住民の多様な可能性に応じた柔軟な支援を行うことが求められる。こうした多様な可能性に対応するためには、自治体や地元住民組織、NPO 団体、地域内外の有識者など多様な人材と協働し、複層的な支援を行うことが望ましい。

さらに、ミャンマーの事例から、「個人の内発的発展」が地域のなかで促進され、住民が地域で可能性を発揮していくプロセスには、可能性を発掘した住民同士、あるいはこの地域づくりに関わる者同士が関わり合い、相互扶助の関係性を築いていることが影響していると示唆された。他者と関わり合うことで、互いの可能性が刺激され、個人単位よりもさらに大きなインパクトとして可能性が地域に活かされていくと考えられる。そこで本フ

フェーズでは、発掘された可能性が地域で発揮されるために、住民をはじめとする地域内外の主体の協働が生まれることが望ましい。

以上の第 0～2 フェーズを経ることで、ミャンマーの事例のように、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりが実現可能になると考えられる。

そうした地域づくりの運営者の姿勢として求められるのは、見出された可能性がどのように開花し地域の中で発揮されていくかを住民に強制しないということである。可能性の開花に向けた支援は、あくまでも当人の意思・意向を尊重し、地域や支援者の側の都合で行われてはならない。支援者が留意すべきは、住民自身が支援を必要としたタイミングで、必要な支援をすることができるよう環境を整備しておくことである。この点は、「自ら一歩前を出た人」を支援し、アイデアやリソースの提供はするが、それによってもたらされる結果の成否は問わない、という ^{かいほつ} 開発僧 の姿勢に学ぶところが大きい。さらに、^{かいほつ} 開発僧 が村人と「共に働く」ことを行っていたように、この地域づくりにおいても、住民と地域づくりの担い手が協働していくことを目指している。そのために、互いの立場を超えて協力し合える場を計画的に創出していくことが重要となるだろう。

以上、本章では、「個人の内発的発展」に基づく地域づくりの方法を検討するにあたって、住民の潜在的可能性の創発を目指す自己教育に着目した。そして、その地域づくりの先進事例として、^{かいほつ} 開発僧 による ^{かいほつ} 心の開発 を基礎としたミャンマーの地域づくりに着目し、地域づくりの実践枠組みを提示した。プロトタイプ第 1 フェーズにあたる、他者との関わりを通してアイデンティティ形成を促進する自己教育の場は、本研究が目指す地域づくりにおいて中核的な要素になると考えられる。

続く第 4 章では、住民の「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムの詳細について検討していく。序章に述べたとおり、筆者はこれまで出会った ^{かいほつ} 開発僧 の地域づくりに影響を受け、アイデンティティの探求を通して潜在的可能性を発掘する研修プログラム「わたし研究室」を開発した。そこで次章では、「わたし研究室」が「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムに位置づけられることを確認し、地域づくりへの導入可能性を検討していく。

4. 「個人の内発的発展」を促進する「わたし研究室」

本章では、個人の潜在的可能性を引き出す研修プログラムとして一般社団法人こころ館が実施する「わたし研究室」³⁰に着目する。はじめに、一般社団法人こころ館の概要を示す。次に、アイデンティティの探求を促進する技法として「わたし研究室」で用いられる「Self-Anchoring Method（以下、SAM）」と「Being ファシリテーション」について詳述し、そのうえで「わたし研究室」の構成を示す。最後に、本プログラムが第3章第5節に示したプロトタイプ第1フェーズ（自己教育プログラム）の実践方法となりうる可能性を確認していくこととする。

なお、ここでいうアイデンティティの探求とは、アイデンティティを構築する過程であるとともに、既に自覚している自身のアイデンティティを見つめ直し、再形成する作業を含むものである。

4.1. 一般社団法人こころ館とは

一般社団法人こころ館（以下、こころ館）は、2013年に筆者が立ち上げた、京都を拠点に人材育成・開発事業を行う非営利団体である。「本来持っている可能性を誰もが十全に発揮しながら、人と人とが真につながり合える、思いやりあるしあわせな社会の実現」を団体のビジョンに掲げ、そのビジョンを達成するため「一人ひとりの実現したい未来を掘り出し、自分らしく人や社会と関わりながら活躍できる人材を社会に輩出する」ことをミッションとして活動を行ってきた。同団体では、これまで企業・自治体・学校などのセクターと連携しながら、国内外 20,000 名以上を対象に講演やワークショップを提供している（2020年11月時点）。なお、筆者はこころ館の創設者であり、団体の代表理事を務める立場にある。

筆者がこころ館を創設するに至った経緯には、2005年から教育現場を中心に対人援助業務を行うなかで、「自分の気持ちがよくわからない」とか「何をしたらよいかわからない」という声を、世代を超えて頻繁に耳にするようになったことにある。この傾向は「自己喪失」と呼ばれる概念で説明されるものである。窪寺（2006）によると、現代人は興味関心が長続きせず、新しいものに触発されすぐ次に関心が移ってしまうという特徴を持っており、その結果、自分の本当の興味が何であるのかさえ掴めなくなるという自己喪失の

³⁰ 「わたし研究」「わたし研究室」に関しては、こころ館独自の固有名詞のため「」をつけて表記する。

傾向があるという。鈴木（2009）もまた、現代的人格においては、自己喪失、あるいは自己感覚の喪失といった現象が一般化するようになることを指摘するように、自己喪失の傾向はまさに筆者が対人援助の現場において実感してきたことである。特に、子どもたちとその傾向が広がっているのではないかと考え、筆者は 2006 年から「自分の気持ちを感じる授業」と題した出前授業を小中学校を中心に実施するようになった。また、同年より、その活動を国外にも広げ、ミャンマーやカンボジアの貧困地域に暮らす子どもたちの支援活動の一環として同授業を届けるようにもなっている³¹。さらに、2013 年には、一般社団法人こころ館を設立し、大学生のインターンシップを受け入れながら、日本の小中学生やカンボジアの中高大学生に向けて出前授業を提供してきた。近年は、企業の社員研修などのニーズが高まり、人材開発や育成事業が団体の中核事業となっている。

なかでも、2017 年以降に始動した研修プログラム「わたし研究室」は、筆者が 2005 年から 2016 年にかけてミャンマーで支援活動を行っていた際、現地で出会った^{かいほつ}開発僧の影響を受けて開発したものである。個人の潜在的可能性の創発を目的としたプログラムである。そこで次節では、「わたし研究室」で用いる技法やプログラムの構成を概観し、「わたし研究室」が「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムとして位置づけられることを確認していきたい。

4.2. 「わたし研究室」の概要

「わたし研究室」の基本プログラムは研修と研究テーマ発表会で構成される。

《研修》

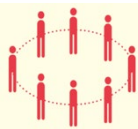
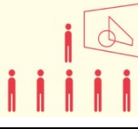
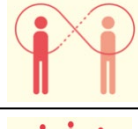
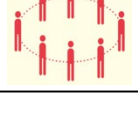
研修は、後述する「個人の内発的発展」を促進する技法の SAM と Being ファシリテーションを用いた、対話型のワークショップ形式で実施する。参加者は、SAM の実践を通して自己探求を行い、潜在していた可能性を発掘し新たなアイデンティティを形成していく。研修は、密度の高い双方向のコミュニケーションが取れるよう少人数制で行い、月に 1 度か 2 度、5 回～10 回で実施している。近年、従業員の働くうえでのアイデンティティを形成する自己教育への関心が高まっており、社員研修の一環として導入されることが多い。業務とは関係なく自分のことを語りあうため、普段知り得ない同僚・上司・部下の一面を

³¹ この期間は、^{かいほつ}開発僧が活動する地域にも出前授業を届けていた。

知る機会となり、社員同士の関係性が向上することからチームビルディングとしても導入されるケースも増えている。なお、この研修プログラムのなかで実施する自己探求プログラムは、こころ館がデザインを行う。

毎回の研修は表 9 に示す手順で実施する。

表 9 研修の手順

	内容	写真
チェックイン	「チェックイン」では、お互いの顔が見えるよう、サークル型で着席する。輪になって座ることで、序列がなくなり対等な関係が維持できる。また、ファシリテーターが設定した問に対して、一人ずつ答えていく。この時、ファシリテーターは自分の体験に基づくフィードバックを行う。	
レクチャー	実施するワークの内容は、毎回、違ったテーマを設定している。ベースは、アイデンティティを探求することであるため、自分がどんな人間なのかを自覚することを重視したワークを提供している。レクチャーの時間は、その回で実施するワークの内容についての説明と、ワークシートの記入方法、研修中のルールなどを説明する。	
ダイアログ	研修では必ず、参加者同士の対話の時間を設けている。対話では「思いやりの傾聴で全肯定で相手の話を聴く」「正直な気持ちを話す」「言いたくないことは無理して言わなくてもいい」などのルールを設けることで、安心安全な場を形成している。	
チェックアウト	チェックアウトでは、研修を振り返り気づいたこと、新たに発見したことなどを一人ずつ共有していく。直接話さなかった人の考えや気づきを全体に共有し研修を終了していく。	

《研究テーマ発表会》

参加者は、「わたし研究室」の締めくくりに行われる「研究テーマ発表会」にて、発見した「研究テーマ」を発表する。この発表会は、「わたし研究」をした受講生が、それまで当人も気づいていなかった自分らしい生き方・働き方など、自己実現したい内容を具体的に発表する場である。発表では、受講生が「わたし研究」の実践をふり振り返り、これからのわたしらしい生き方や実現したいことを、一人ずつ語っていく。また、この発表会には、ワークショップに参加していなかった関係者が来場者として招かれる。企業研修の場合、他部署の同僚や、上長・管理職などである。来場者は発表を聴いて感じたことや、研究テーマに関するアイデアなどを発表者にフィードバックする流れを経る。

このような発表の機会を設ける狙いのひとつには、「わたし研究」をした個人の叶えたい未来の実現に向けて、周囲の応援や協力を呼び起こすという点が挙げられる。ガンツ（Marchall Ganz）が提唱した社会変革の方法論である「コミュニティ・オーガナイズング（以下、CO）」では、「普通の人々が力を合わせ社会変化を生み出す」ための 5 つのリー

ダーシップの要素の最初の1つ目に「ストーリーテリング (パブリック・ナラティブ)」を掲げた。COでは、人は「心 (感情) と頭 (戦略)」が揃ってはじめて主体的に行動するという考えのもと、まず自身の物語 (ストーリー・オブ・セルフ) を語ることで聴き手の共感と呼び、心に働きかけることがストーリーテリングの役割とされる (URL15)。「研究テーマ発表会」においても、このように「わたし研究」を通じた自身の等身大の物語を語ることで、聴き手からの共感や応援を得られることが可能になると言える。

また、「他者に自己を『ストーリー』として語る経験は、人を動かすとともに、自己を動かす」(田坂 2018 : 226)と言われるように、人前で改めて自分自身の物語を語ることは、聴き手のみならず語り手自身のエンパワメントにもつながると考えられる。人前で研究テーマを語る行為は、自分に対する決意表明にもなり、その後の行動に結びつきやすいと考えられる。

その他、「研究テーマ発表会」による副次的な効果として、発表を聞くことにより、来場者が参加者について理解を深められる点や、第三者からのフィードバックにより、参加者が「わたし研究」のプロセスや結果に対する肯定感を得られる点があげられる。さらに、ワークショップに参加していなかった関係者を招くことで、閉鎖的な空間で行われていた研修内容を共有することができるほか、参加者が発見した「研究テーマ」の実現を応援する機運の醸成、参加者や来場者同士の新たなネットワーキングの可能性などが期待される。

4.3. 「個人の内発的発展」を促進する技法

本節では、「わたし研究室」で「個人の内発的発展」を促進する技法として用いる SAM と Being ファシリテーションについて詳述する³²。

4.3.1. Self-Anchoring Method

本項で取り上げる SAM は、可能性の発露を阻害している要因を把握・理解することで、自己解放を促進する技法として活用される。可能性の発露の阻害要因とは、無自覚の感性や思念³³、とらわれや思い込みを指す。阻害要因である無自覚の感性や思念を解放していく過程においては、自己感覚を取り戻し、本来の自分を理解していく必要がある。すなわ

³² 本節は、筆者の修士論文である松原 (2017) の第2章を見直し、その後の研究動向を取り入れて加筆・修正を行ったものである。SAM は松原 (2017) における「自我錨着法」と同義である。

³³ 「感性や思念」という表現は、鈴木 (2009) を参考にした。ここでいう感性には、感覚に伴う感情・衝動や欲望という意味合いが含まれる。

ち、「他者によって定義づけられた『自己』、他者との比較において捉えられた『自己』」ではなく、「他者のものではない自己の感性」ないし「固有の自己」（鈴木 2009 : 135）をありのままに観察し、理解していくことが求められるのである。他者から定義づけられた自己と、自分自身が思い考える自己との間には、しばしばズレや矛盾が生じるものであるが（鈴木 2009 : 135）、SAM ではそのズレや矛盾もありのままに受け入れ「他者の規定にしばられている状況から解放されること」（鈴木 2009 : 136）を目指している。そのような過程を通して、自我錨着（self-anchoring）と呼ばれる自己受容に至ることが、SAM が目指す到達点である。自我錨着とは、無自覚に自分の感情に意識が流されてしまわぬよう、心の奥深くに錨を鎮めるイメージを込めて名付けられた造語であり³⁴、よい面もわるい面も含めたありのままの自分を受け入れた状態を指している。これらの過程を経ることで、本来の自分を取り戻し、新たなアイデンティティを形成していくのである。

こうした、自分自身が自覚していない阻害要因に気づくことは、個人単位での実践では難しく、他者との交流を通して自分を見つめることが重要になる。そのため SAM は集団で実践することを想定しており、ワークショップ³⁵等の集団学習の場面に適した技法と言える。その際、参加者同士が互いに本心が語り合えるよう、相互承認による安心安全な場を形成することが不可欠となる。

以下、本項では、SAMの鍵概念となる「行為の中のマインドフルネス」、「リフレクション」、「自己開示」および「自己受容」についてそれぞれ解説していく。

《行為の中のマインドフルネス》

SAM の構成要素の 1 点目は、行為の中のマインドフルネスである。マインドフルネス（mindfulness）は瞑想のエッセンスのひとつである「今ここでの経験に、評価や判断を加えることなく、能動的に注意を向ける」³⁶（Kabat-Zinn 1994 : 4）ことに焦点を当てた概念である。ベトナム人 開発僧^{かいほう} のティク・ナット・ハン（Thich Nhat Hanh）³⁷によって世界中に伝播し、学術的分野においてはジョン・カバット・ジン（Jon Kabat-Zinn）らによ

³⁴ 命名は筆者の指導教員であった同志社大学大学院教授の今里滋の示唆による。

³⁵ ワークショップとは「講義など一方的な知識伝達のスタイルではなく、参加者が自ら参加・体験したりする学びと創造のスタイル」（中野 2003 : 179）を指す。

³⁶ 原文は“Paying attention in a particular way : on purpose, in the present moment, and nonjudgmentally”である。

³⁷ 1926 年ベトナム中部生まれ。禅僧、詩人、人権活動家、学者。仏教の積極的な社会参加を訴える「社会行動派仏教（Engaged Buddhism）」の提唱者でもある。

り臨床的研究が進められた (Kabat-Zinn 2003)。マインドフルネスを用いた訓練プログラムは、国や宗派を超えて医療・教育・科学的研究・公共政策といった多くの分野で実施されている (藤田 2014 : 14)。現代日本においてもマインドフルネスは広がりを見せ、「意図的に、今現在の瞬間の現実 (自己と世界の総体) にオープンな気づきを向け、その現実の体験を、判断をさしはさまず、ありのままに受け入れ、思考や感情にとらわれのない状態で、ただ観ているという存在のあり方、そしてそれを実現するための訓練やそれによって身につけたスキルの総体」 (藤田 2014 : 13)、あるいは「訓練によって身につけ実践的に活かしていくことのできる『よりよく生きていくための基本的スキル』」 (藤田 2014 : 16) として一般的になりつつある。マインドフルネスは、瞑想に由来しながらも仏教という宗教的文脈・枠組を超えた自己開発の手法と見なすことができ、そのトレーニングを行うことで自分の心に意識を向け、自分についての自覚を深めることができると考えられる。

マインドフルネスの実践方法は、呼吸に意識を向ける (吉田 2014) など、様々な方法が普及している。一方、SAM におけるマインドフルネスとは、ワークショップの場面において、その中でのあらゆる行為の最中に意図的にマインドフルな状態となる実践である。SAM ではこの実践を「行為の中のマインドフルネス」と呼ぶ。ここでいう行為とは、ワークショップ中に行われる様々なワークの実践を念頭に置いている。たとえば、ワークシートを記入するなどの個人作業を行う場面はもちろん、人の話を聴いている時などの他者と関わる場面においても、参加者は「今ここ」の自分の感情の動きに自覚的であることが求められる。

こうした行為の中のマインドフルネスに近似する概念には、歩く瞑想、食べる瞑想などを日常生活のなかで実践する「活動中のマインドフルネス」や、評価や判断なしに他者に注意を向ける「他人に向けたマインドフルネス」、相手に注意を向けつつ、同時に自分の感情を自覚しながら会話を行う「マインドフルな会話」などがある (Tan 2012 [訳 2016 : 92-111])。これらはいずれも、動的な行為の中で実践されるマインドフルネスという点において、行為の中のマインドフルネスと重なる部分がある。一方で、SAM における行為の中のマインドフルネスは、注意を向ける対象を限定している点にその特徴がある。

上述のように、SAM では自分の可能性の発露を阻害してきた無意識の感性や思念を自覚していくことを目指す技法である。しかしながら、これらは無意識のものであるからこそ、自覚に至るのは簡単なことではない。そこで手がかりとなるのが、違和感や悶々とし

た感覚、あるいは「～でなければいけない」という規範意識などの自分自身が持つこだわりである。行為の中のマインドフルネスを行う目的は、これらの反応を捉えることにあるとも言い換えることができる。このように行為の中のマインドフルネスは、自分の可能性の発露を阻害してきた無意識の感性や思念を、歪めずありのまま観察していく行為である。行為の中のマインドフルネスをワークショップのなかで実践することで、日常生活のあらゆる場面においても自然にマインドフルな状態が再現できるようにしていく。その状態が習慣化することで、普段から自分の感情や衝動を捉えやすくなることが期待される。

《リフレクション》

SAMの構成要素の2点目はリフレクション (reflection) である。一般的にリフレクションとは「自分の体験や経験を振り返り、そこに自分なりの意味づけを行い、新たな行動指針や考え方を形作っていく実践」(加藤 2017: 279)、「自身がどのように考え、どのようなことを願いとしてその行為を行ったのか、それは本当に望むものだったのかということを確認するというプロセス」(坂田 2019: 8)などの意味で用いられる用語である。なかでもSAMにおけるリフレクションでは、自分の可能性の発露を阻害している要因となっている無意識の感性や思念に着目していく。

リフレクションにおける吟味の対象は、行為の中のマインドフルネスのなかで発見した、内面に潜んでいるネガティブの感情や強固な固定観念、違和感である。リフレクションを行う際には、内面の些細な違和感を手がかりに吟味していく。吟味する過程においては往々にして、誤った意味づけや、自分に都合のよい解釈をすることがある。それを避けるために、成人学習の研究者であるJ.メジロー (Jack Mezirow) はリフレクションにおいて前提や想定を疑うことを重視した (Mezirow 1991=2012)。ここでいう前提とは、「判断の根拠を示すもの」(Mezirow 1991 [訳 2012: 16]) である。具体的には、これまでの経験や、成長過程のなかで家庭や学校・社会などの環境から学んだ規範、書物等から得た知識などが挙げられる。そのような前提を吟味し、それが本当に自分にとって適切かを検討していくことも、本来の自己感覚を取り戻すことにつながると考えられる。

ただし、小森谷 (2012) が示すように、これまで自明のものとして受け取ってきた前提や想定を疑い、歪みを発見することは一人の力では限界がある。個人の世界のリフレクションでは、個人の経験の狭さによる偏った解釈、信念や先入観、固定観念ゆえの歪んだ見方、思考の行き詰まりや堂々巡りなどにとらわれてしまう可能性があるからである (小森

谷 2012 : 51) 。そこで SAM では、ワークショップのなかで、他者に向けてリフレクションした内容を語る機会を意図的に設けている。そうすることで、自分自身の無自覚な感性や思念に対する気づきが促進されると考えている。

ここまで、SAM におけるリフレクションについて概念整理を行った。前項で述べた行為の中のマインドフルネスとリフレクションを交互に実践することで、自分の可能性を阻害してきた要因が徐々に解明され、本当に望む自分自身のあり方であるアイデンティティを探っていくことを目指すのが、SAM におけるリフレクションである。

《自己開示 (self-disclosure) 》

次に行うのが、吟味した内容を他者に語る自己開示 (self-disclosure) である。SAM における自己開示は、臨床心理学者ジュラード (Sidney M. Jourard) を援用した榎本の定義を参考にした。ここでいう自己開示とは、自分を他者に開くことであり、自分がどんな人物なのか、何を考え、何を感じ、何を悩んでいるかなどを相手に伝える行為 (榎本 1997 : i) のことを指す。自己開示は、自分について直接言及する言表、あるいは自分がにじみ出るような発言がそれに相当し、単に外的な事象についての話や第三者的な言表は自己開示に含まれない (榎本 1997 : iii) 。

また、先行研究からは、自己開示には感情の浄化や自分の感情などの明確化といった個人的機能と、対人関係の発展や自分の印象をコントロールし他者の関係を調節するといった対人的機能があることも指摘されている (安藤 1986) 。この安藤らの指摘を根拠づける自己開示の意義として榎本は、次の 4 点を挙げた。

- ①自己への洞察を深める：自己開示し合う関係の中で、自分の内面にあらためて意識を集中することにより、また、こちらの自己開示に対する相手の反応を通して、自分自身をより深く知ることができる。
- ②胸の中に溜まった情動を発散する：胸の奥深く押し込めていたものを、開示することにより気持ちがすっきりする。
- ③親密な人間関係を促進する：関係が親密な方向に進むと、互いをよりいっそう知りたい、相手にも自分をもっと知ってもらいたいと思うようになる。自己開示により親密な関係性が促進する。

④不安を低減する：心配事や悩み事があるとき、他の人も同じような経験をしていることを知ることで、不安が低減する。（榎本 1997：61-2）

上記に示したように、自己開示を行うことが自己理解の促進、情動の発散・不安の低減などに効果があることがわかる。さらに自己開示を行う意義は、それを耳にする他者との親密な関係性を促進する効果もある。このことから、ワークショップのなかで自己開示を行うことは、その場に居合わせた他の参加者との親密な関係性をつくることにつながると考えられる。

SAMにおける自己開示は、行為の中のマインドフルネスとリフレクションをくり返し、自分の可能性を阻害してきた要因を自覚し他者に向けて開示していく。その結果、これまで気づいていなかった本心が表出し、自己理解と認識の精度が高まっていく。榎本は、十分に自己開示をするためには、アイデンティティの探求に正面から取り組み、柔軟で防衛のない真に安定した自我状態にあることが必要であることを示唆している（榎本 1997：140）。その点において、SAMでは自己開示に至るまでの行為の中のマインドフルネスとリフレクションをくり返す過程を通して、アイデンティティの探求に正面から取り組み、相互承認による安心安全な場を形成していることで防衛が外れ、自己開示が進みやすいと考えられる。

しかしながら、実際には阻害要因と向き合えず開示が進まない者もいる。このような開示を避けてしまう原因のひとつを筆者は「回避の壁」と呼んでいる。これまで培ってきた規範意識や価値観のズレを認めることや思い込みを外すことは、ある意味で弱みを吐き出すこととも連動している場合があり、それには勇気が伴う。恥の感情の研究を行うブラウン（B.Brown）は、自分が傷つくリスクを負いながら生身をさらけ出すことを「ヴァルネラビリティ（vulnerability）」（Brown 2012 [訳 2013：13]）と表現している。つまり、ヴァルネラビリティとは「弱さを隠さず、傷つくことをいとわない姿勢」のことであるが、正直な自分であろうとする勇気を意味する（Seppälä 2017 [訳 2019：58]）。自分自身の繊細な側面である弱い自分をさらけ出す行為は、傷つくことを怖れる防衛心を乗り越える行為でもあり、それは榎本が述べるような柔軟で防衛のない安定した自分自身をつくることにつながると考えることができる。

ただし、SAM の実践における自己開示とは、他者にすべてを開示するよう強要するものではない。他者に向かって自己開示することが難しい場合は、自分の可能性を阻害していた要因をまず自分で自覚することができれば、アイデンティティの探求を促進すると考える。そのため、ワークショップのなかでは、なるべく正直に感情を開示するという前提を置きながらも、本人が回避しない姿勢で自分自身と向き合っているのであれば、無理に他者に開示しなくてもいいというルールを設け、その姿勢を尊重していくことが求められる。

《自己受容 (anchoring) 》

先述の(1)~(3)を経て可能性を阻害していた要因を解放し、ありのままの自分を受容した状態を SAM ではアンカーリングと呼ぶ。自己受容とは「ありのままの自己を歪めることなく認識し、自分自身として受け入れ好きになること」(伊藤 1991 : 70)、「自分自身を、好ましい面も好ましくない面も含めて受け容れること」(飯長 2012 : 323)などと定義される。また、春日は自己受容を「自己のそれぞれの側面がどのようなものであるにしても、それらをまとめた自己を全体として、善悪の判断ではなく、好き嫌いなどでもなく、ただ素直に『今の自分はこうなのだ』と温かく受け止めようとする姿勢」(春日 2015 : 20)と定義し、他者受容や人間関係、他者からの受容が密接に関係し合うもの(春日 2015 : 23)としている。また、ロジャーズが「十分に受容され、こうした受容の中で何ら評価されることなく、ただ思いやりと共感だけが向けられる時、個人は自分自身に取り組むようになり、自分の防衛を捨て去り、真の自己に直面する勇気を発展させていくようになる」(Rogers 2005 : 270)というように、自己受容は他者から評価なしで思いやりと共感を向けられることにより促進されることがわかる。さらに、諸富はロジャーズの言葉を引用し、人が自分自身を受け入れている時にその人に変化が起こり、より良く生きることができるようになるとし、現実のあるがままの自分を心のそこから認め受け入れたとき、はじめてその人に変化が生じると言及した(諸富 1997 : 144)。吉川・栗村(2013)もまた、自分の本音を出せて、ありのままの自分が認められ、本気になってくれる人がいる居場所や、同じ目標を持ち一緒に成長できる人がいる居場所が重要であり、それがアイデンティティを確立することにつながることを示している(吉川・栗村 2013 : 37)。

ここまで、SAM の構成要素を詳述した。SAM の実践においては、可能性を阻害していた要因に気づき解放するとき、それまで言えなかった抑圧していた本音を口にする参加者

も少なくない。これは参加者同士の相互承認による安心安全な場が形成されている表れと捉えることができるだろう。SAM は心に意識を向け自分自身への自覚を促す役割を果たしている点や、アイデンティティ形成の過程で、自己課題と向き合い、自分の可能性を阻害してきた要因を吟味していく点から、心の開発^{かいほつ}における瞑想に近似するものと考えられる。

4.3.2. Being ファシリテーション

アイデンティティの探求を促進する 2 つ目の技法は「Being ファシリテーション」である。ファシリテーションは英語の「facilitate」に由来する言葉であり、促進する、物事を効率よく進めるといった意味合いで用いられる用語である。嘉村は、ワークショップの概念を日本に普及させたひとりである中野民夫の言葉を用いて、ファシリテーションを「人が集い、何かを学んだり、対話したり創造しようとする時、その過程を参加者主体で、円滑かつ効果的に促していく技法」（嘉村 2019 : 6）と定義している。また、日本ファシリテーション協会フェローの堀は、対話をはじめとする人と人が関わる場を促進することすべてがファシリテーションであるとし、互いの主体性と相互作用を高め、個人、グループ、組織、社会の発展を促進するとした（中野・堀 2009 : 35）。

以上をまとめると、ファシリテーションは、「人と人との相互作用や個々人の持つ主体性・創造性などの可能性を高めることで、個人と全体の双方の発展を促すこと」と考えることができる。

Being ファシリテーションは、対話を通して自分のあり方を自覚し、新たなアイデンティティを形成する援助を行うことを目的に筆者が開発したファシリテーションの技法である。この技法は、臨床現場における筆者の対人援助経験と、開発僧^{かいほつ}が行う対機説法に立ち会った経験に影響を受けて生み出されたものであり、ワークショップでの実施を想定して開発した。Being ファシリテーションでは対話にかかる時間を要するため、そのなかでも 10～15 名程度の小規模集団を対象としたワークショップに用いることが望ましい。森（2018）は、ワークショップによって「共同体の成員同士が共同体のアイデンティティを形成していくことにつながると考えられる」と述べており、ワークショップには「アイデンティティの形成をともなう能動的な学びの場」という機能があるとした（森 2018 :

175-6）。このことから、Being ファシリテーションをワークショップの場で用いることは、アイデンティティ形成をより促進すると考えることができる。

《Being ファシリテーターの役割》

この Being ファシリテーションを主導する存在が「Being ファシリテーター（以下、ファシリテーター）」である。ファシリテーターには主に次の 3 つの役割がある。

1 つ目の役割は、参加者のアイデンティティ形成を促進することである。そのためにファシリテーターは「何をするのか？」(Doing)ではなく、「どうありたいのか？」(Being)という、その人自身のあり方に焦点をあてた問いかけを行う。ここでいうあり方とは、「物事のあるべき姿」³⁸、つまりその人の本来のあるべき姿³⁹のことを指す。ファシリテーターは、参加者が自分自身のあり方や内的な体験を見つめ直す機会となる問いかけやフィードバックを行い、一人ひとりが「これが自分である」と無意識に決めつけてしまっている自分像を再検証していくよう促す。それにより、参加者は現時点でその人が主観的に感じているアイデンティティを確認することとなる。

2 つ目の役割は、安心安全な場をつくることである。参加者が本音で語りあえる安心安全な環境を整えることも、ファシリテーターの重要な役割のひとつである。そのため、Being ファシリテーションでは、参加者全員に「この場で見聴きしたことを他言しない」こと、「共感的な態度で他者の話を傾聴すること」などのルールを設けることで、より参加者が安心して自身の気持ちを開示できるようにする。

そして 3 つ目の役割は、ワークショップデザインである。Being ファシリテーションでは、参加者同士の対話を通してそれぞれがあり方を問い直す機会を持つ。そのためファシリテーターは、参加者同士であり方を問いあえるよう問いを準備するなどのワークショップのデザインを行うことが求められる。あらかじめ問いを準備しておくことで、ファシリテーターが直接関与せずとも、参加者同士の対話により気づきを促進することができる。

³⁸ 『広辞苑』（新村編 2018:102）参照。

³⁹ Being とは存在すること 本来のあるべき姿とは、「本来」が前提となるため「もともと、はじめから、もともとのあり方」などの意味合いが含まれている。

《Being ファシリテーターの基本姿勢》

上記のような Being ファシリテーターの役割を果たすために必要と考えられるのが、次に述べる 8 つの基本姿勢である（表 8）。これらの姿勢は、主に筆者の対人援助の経験や、^{かいほつ}開発僧 と接した経験と対機説法を参考にして設定したものである。実践現場では、Being ファシリテーションの「対話を通じて自分のあり方を自覚し、新たなアイデンティティを形成する援助を行う」という目的を果たすために、これらの基本姿勢を遵守することが望まれる。

表 8 ファシリテーターの 8 つの基本姿勢（筆者作成）

①	話す時は声のトーンやスピードに十分配慮し、機械的に話すのではなく情感を込めて穏やかに話す。また、相づちや頷きを入れ、参加者が本心を素直に語れるようにする。
②	参加者を評価せず、全肯定・受容的・共感的な姿勢で参加者の気持ちに寄り添いながらありのままを受け入れる。
③	参加者の気づきが促進されるために、自分のファシリテーターの体験談やそこから得た教訓・学びなどを開示する。
④	参加者が本来持つ可能性を信じる存在である。
⑤	マインドフルな姿勢を保ち、自分の感情の動きに気づいておく。
⑥	全体への配慮を忘れない。
⑦	一人ひとりに対して親しみを持って直接的に語りかける。参加者の名前やニックネームを呼びかけて対話を始めるなど、参加者に親しみを持って接する。
⑧	対話を行う相手をよく観察し、その人の状況や言動に応じて、その人に最適と思われる問いかけやフィードバックを意識的に行う。

ファシリテーターの 8 つの基本姿勢のうち、①②⑥は対人援助の経験から、③⑦⑧は対機説法から、そして④⑤は ^{かいほつ}開発僧 の姿勢から得たものであり、いずれも実践のなかで有効と考えられたものである。

ここまで、Being ファシリテーションについて整理した。先述した通り、Being ファシリテーションは ^{かいほつ}開発僧 の対機説法に影響を受けて考案した技法であり、その人のあり方を問い直し、いかに生きるかを考えるきっかけを与えるものである。

以上、本章では、こころ館が提供する研修プログラム「わたし研究室」について詳述した。ここまで見てきたように、「わたし研究室」は他者との相互学習を通して自己課題と向き合いながら、アイデンティティを探求するプログラムであり、「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムと見なすことができる。すなわち、「わたし研究室」は、第 3 章第 5 節で示したプロトタイプの第 1 フェーズにあたる自己教育プログラムに相当するものと見なすことができるだろう。

そこで次章では、実際に「わたし研究室」を地域の自己教育プログラムとして導入している、大阪府豊能町の人材育成事業「とよのわたし研究室」に着目する。以下では、本事業を社会実験と位置づけ、上記のプロトタイプを検証していくこととする。

5. 社会実験 -大阪府豊能町「とよのわたし研究室」による地域づくり-

大阪府豊能町の女性活躍人材育成事業「とよのわたし研究室」は、地域に暮らす女性の潜在的可能性を発掘することを目的とした、ワークショップ形式の自己教育プログラムである。受講生は、講座を通して潜在的可能性を創発し、その可能性を具体化・具現化していく伴走支援を経て、他者と協働しながら地域のなかで自身の可能性を発揮していくことが期待される。

本研究では、この「とよのわたし研究室」を通じた地域づくりの実践を社会実験と位置づけ、その結果に基づいてプロトタイプを検証を行う。それに先立ち、本章では、社会実験のフィールドである大阪府豊能町の現状を概観したうえで、プロトタイプに則り【第0フェーズ】から【第2フェーズ】にあたる取り組みの具体的な内容を詳述していくこととする。

5.1. 豊能町の現状と課題

5.1.1. 概況

今回社会実験を実施した大阪府豊能郡豊能町（以下、豊能町）は、大阪府の北部に位置し、標高 600m を超える北摂連山に囲まれた山間地域である。北は大阪府豊能郡能勢町、京都府亀岡市、東は大阪府茨木市、南は大阪府箕面市、西は兵庫県川西市と大阪、京都、兵庫の三生活圏が交差する場所に位置する。町内は緑豊かな里山が広がる東地区と、ニュータウンの西地区に大別される。人口 19,694 人（2018 年 12 月 31 日時点）、面積は 34.34 km²である。

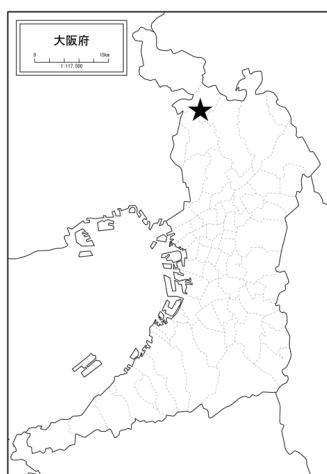


図5 豊能町の地理的位置（★が該当箇所）

5.1.2. 豊能町の地域課題

豊能町は大阪市内都心部まで車で約40分、電車で約50分の距離にあることから、サラリーマン世帯向けのベッドタウンとして発展し、人口は豊能町が発足した1977年前後から急激に増加した。しかし、1995年をピークに減少に転じて以降、急速な人口減少、高齢化が進展している。この状況を受け、豊能町が町における人口動向やその影響を分析・検証し、今後の方向性・将来展望を示すために2016年に策定したのが「豊能町人口ビジョン」・「豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略」である（URL16・17）。これらの資料によれば、豊能町では1996年に転出者が転入者を上回る転出超過（社会減）に転じて以降は同様の状況が継続していることに加え、1997年以降は死亡数が出生数を上回る自然減となり、その差が拡大し続けている。出生数は1990年の179人をピークに減少に転じ、2008年～2012年の豊能町における合計特殊出生率は同時期の全国平均1.39を大きく下回る0.82、全国ワースト3位となった。この合計特殊出生率の低さも人口減に拍車をかけている。国立社会保障・人口問題研究所の人口推計によれば、2040年には12,275人、2060年には6,753人まで減少するとされ、1980年の人口を100.0とした場合の人口の推移を比較すると、豊能町の人口は、国や大阪府を上回るスピードで急激に減少しており、今後その傾向が続くことが予測されている。

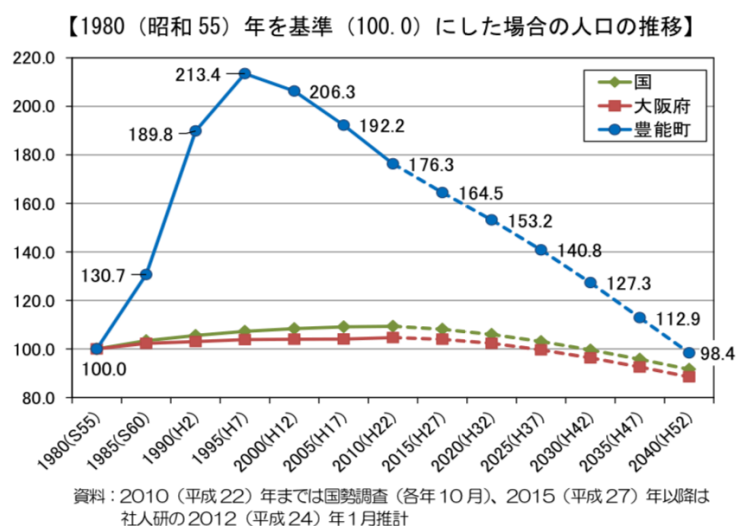


図6 1980年を基準にした場合の人口の推移（URL16）

人口減少に加え高齢化の進展も深刻であり、2018年12月31日時点での高齢化率は43.8%と、全国平均の28.4%（2019年度）をはるかに上回っている。高齢者人口の割合（高

齢化率) は年々増加し、2040年には53.8%と総人口の半数以上が高齢者になることが見込まれている一方で、生産年齢人口と年少人口の割合は減少を続け、2040年にはそれぞれ全体の41.5%、4.7%になると見込まれている。高齢者1人を支える現役世代は2040年時点で0.77人となり、現役世代1人で1人以上の高齢者を支えなければならない状況になることが予測されている。常住人口に対する昼間人口の割合を示す昼夜間人口比率についても1995年まで減少傾向を示した後、横ばいで推移し、2010年には65.8と全国でもワースト2位となっており、昼間時に町外に出ている人の割合が極めて高い状態にある。

こういった状況下で豊能町総合計画アンケートでは地域行事・活動が活発に行われていると思う人の割合は、「思う」ないし「まあ思う」の計が61.2%となっており、特に18～19歳と60歳代においてその割合が高いとの結果が示されている。地域の活動への参加意向については、年齢の高まりとともに増加し、50歳代をピークに減少している。

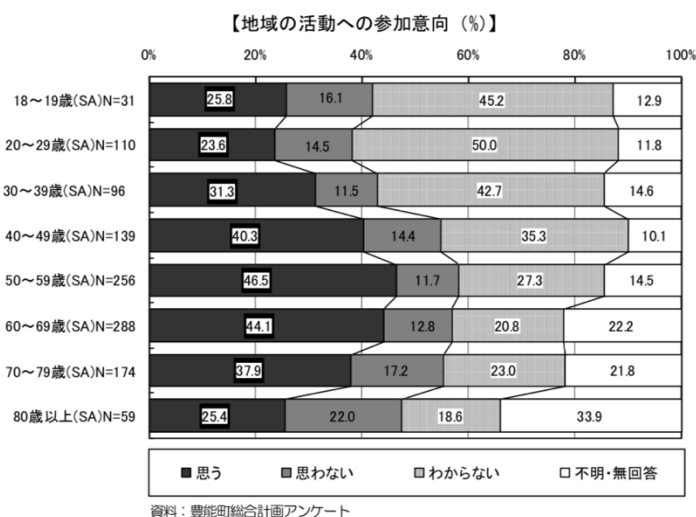


図7 地域活動への参加以降 (URL16)

今後は人口の減少だけでなく、人口構成のうち多くを占める50～60歳代が減少し、75歳以上の割合が増加すると見込まれており、地域の活動への参加意向のある住民が減少することで、地域コミュニティの弱体化、各世代の孤立化や地域の治安力、福祉力、教育力の低下などが懸念されている。

5.1.3. 豊能町における地域づくりの取り組み

「人口減少・超高齢社会の到来」への対策として、同町が「転出超過（社会減）の抑制」と併せて打ち出したのが、「交流人口の拡大」による地域経済の活性化と住民生活や行政運営の分野における「持続可能なまちの基盤整備」への取り組みである⁴⁰。総合戦略のうち、緊急かつ重点化する必要がある事業をパッケージ化し、「地域ぐるみの定住促進」・「農×観光の戦略推進」・「つなぐ・つながる「場」をつくる」・「地域による戦略の推進」の4つのアクションプランに取りまとめる形で2016年に策定されたのが「豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略アクションプラン」（URL18）である。

この計画に基づき「地域ぐるみの定住促進」として、町ではシティプロモーションや住まいや暮らしの多様化に向けた取り組みを地域住民と共に推進している。たとえば、豊能町のシティプロモーションの一環として、町民向けワークショップなどを通してまちの魅力を表すブランドメッセージ「曲がりくねって、ただいま。」が決定された。他にも、「トヨノレポーター養成講座」を修了した51名が、町内外に向けた豊能町の魅力発信を担う「トヨノレポーター」として活動を開始し、レポーターたちが情報発信を行うポータルサイト「トヨノ PORTAL」が始動し、着実に事業が展開されている。

もう一方で、着目すべきは2017年当時の町長のマニフェストの一つでもあった、女性活躍の推進である。2017年4月、人材の育成と多様化を目的として生活福祉部住民人権課内に女性活躍推進室が設置され、女性活躍の推進、特に仕事と家庭の両立に向けた取り組みと、就労および創業・起業に向けた支援を図ることなどの取り組みが積極的に進められることとなった。こうした状況のなかで、女性活躍室には担当職員が室長1名のみということと、前年度からスタートした豊能町の地方創生の取り組みである「豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略アクションプラン」（2015）の基本目標である「地域ぐるみの定住促進」や「つなぐ・つながる『場』をつくる」などが女性活躍の目標と重なる部分が多い⁴¹ことから、全庁的な推進体制として部署横断型の女性活躍推進プロジェクトチーム（以下、「女性活躍PT」）が設立された。女性活躍PTは、委員長である副町長と関係部長4名で構成され、その下に作業部会として有志職員による3つのワーキンググループ（以下、WG）が設置された。

⁴⁰ 本節の内容は、豊能町住民人権課からの提供資料に基づいて作成している。

⁴¹ 具体的には、住民の事業提案型の「トヨノドリーム」などのシティプロモーションや、女性が様々な形で活躍の場の創出などの事業が該当する。

そのうちのひとつである「女性がたのしむまちづくり WG」では、1年間の協議を経て、2つの事業を柱とした計画が立案された。1つ目は企画部局が主催する事業「トヨノドリーム」を通じて、女性が様々な形で活躍する場を得る機会の創出を目指すマルシェ支援事業である。「トヨノドリーム」は住民自身がやりたいと願う事業を提案し、採択された事業に対してアドバイスや人材コーディネート、実施費用等を支援するものである。2つ目は女性活躍室が所管する、地域に暮らす女性の潜在する可能性の発掘を支援する人材育成事業「とよのわたし研究室」である。

5.2. 「とよのわたし研究室」を通じた地域づくりの概要

女性活躍推進室が所管する人材育成事業「とよのわたし研究室」は、「わたしが変われば、地域が変わる。」をスローガンとし、地域に潜在している女性の可能性を発掘することで、女性活躍と地域活性化の双方を推進することを目的とした自己教育プログラムである。本事業の企画・運営は筆者が代表を務める一般社団法人こころ館が受託し、第3章第5節に示したプロトタイプ（図4）に準ずる枠組みで実施した。以下、本節ではプロトタイプに示したフェーズに応じて実践内容を詳述していくこととする。

事業の大まかな流れは次の通りである。【第0フェーズ】にあたる事前準備を行う段階では、事業運営に関わる自治体職員や協力者と事業の目指す方向性を共有し、地域づくりの基礎となる自己教育プログラムの計画や準備を行った。さらに事前準備の一環として、WGのメンバーを対象にした事前研修と、住民を対象としたイベントを実施した。続いて【第1フェーズ】にあたる住民の潜在的可能性の発掘を行う段階では、「わたし研究室」を応用した社会教育プログラム「とよのわたし研究室」を実施した。そして【第2フェーズ】にあたる、住民の可能性が発揮できるための支援を行う段階では、社会的事業やプロジェクト開発の実践経験をもつ社会起業家と協働し、前フェーズで発見した住民の「研究テーマ」の実現に向けて伴走ワークショップや個別相談会、「ファシリテーター養成講座」の実施、情報提供などの伴走支援を行った。

以上のように、人材育成事業「とよのわたし研究室」は、住民の潜在的可能性の発掘を目的としたものであるが、本プログラムは住民向け講座の側面だけでなく、自治体職員の研修というもう一つの側面がある。この地域づくりにおいては、事業に取り組む職員自身がまず学びの実践者となることを重視している。そのため「とよのわたし研究室」においても、受講生として地域住民と肩を並べ参加することが推奨された。これまで豊能

町が主催する住民向け講座において、当該自治体職員が受講生として参加することは極めて稀であったといい、本事業の特徴と言える。自治体職員が住民とともに学ぶ機会を得ることで、地域の現状・課題を職員が直接的に把握することができ、それが普段の業務においてより住民の実情に即した行政サービスを提供することにつながるようになると思う。



写真1 住民と行政職員が共に学ぶ様子

上記の枠組みに則って、実際に「とよのわたし研究室」が開始されたのは2018年度のことである。第1期となった2018年度は子育て経験のある20～50歳代の豊能町在住の女性、第2期（2019年度）は18歳～概ね60歳までの豊能町在住・在勤の女性を対象とし、これまで地域活動に積極的には関わっていないが、今後活躍が期待される住民に参加してほしいという自治体側の願いを汲み、「『何か新しいことを始めたいけれど、何をしたらよいかわからない』といった迷いを抱える人」（2018年度）や「人生の分岐点に立つ人」（2019年度）を講座の対象者として参加を呼びかけた。これまで住民19名、町職員7名が受講し、計25名が修了した（表10）⁴²。

⁴² 受講者数と修了者数に差が生じているのは、第1期の50代の受講者1名が家庭の事情で受講継続が困難となったためである。

表 10 「とよのわたし研究室」受講者内訳

		第1期（2018年度）	第2期（2019年度）
30代	住民	3	3
	職員	—	—
40代	住民	1	2
	職員	1	1
50代	住民	7 ※	2
	職員	3	2
60歳～	住民		1
小計	住民	11	8
	職員	4	3
受講者計		15	11
修了者計		14	11
累計		14	25

なお、すべての受講生には、講座初回時に本研究の目的、方法、個人情報の取り扱いなどの研究趣旨の説明を行った。説明は書面と口頭で行い、アンケート、インタビュー、講座中の会話、自由記述文、写真等のデータについて、個人が特定できないかたちで使用する許可を得ている。以下に使用する写真資料に関しては、本人が特定されないよう加工修正したものか、本人より掲載許可の得られたもの、あるいは広報物として発行されたものを使用している。

次項では、図4に示したそれぞれのフェーズにおける具体的な取り組みについて、第1期（2018年度）の実践内容を中心に以下にまとめる。なお、第2期（2019年度）においてもほぼ同様のプログラムを実施している⁴³。

⁴³ ただし第2期においては、第2フェーズ（伴走支援）の段階で新型コロナウイルス感染症が流行した影響を受け（2020年8月現在）、第1期に比べて十分な伴走支援が実施できていない現状である。

5.2.1. 【第0フェーズ】事前準備

「とよのわたし研究室」の開催に先立って、主催者である豊能町職員と実施団体であるこころ館とで協議の場をもち、改めて方向性等の共有・確認を行った上で、受講生の募集を行った。募集にあたっては、豊能町ホームページに記事を掲載したほか、チラシ（図8）を豊能町発行の広報誌にはさんで町内全世帯に配布した。



図8 「第1期とよのわたし研究室」受講生募集チラシ（左：表面 右：裏面）

また、講座のイメージを具体的にもってもらい、積極的な参加を促すことを目的にプレイベントを企画し、ホームページやチラシを用いて告知した。

表 11 プレイベントの実施概要

実施日時	2018年7月18日 9:30-12:30
会場	豊能町保健福祉センター
参加者	15名

プログラム	内容
1 チェックイン	イラストの描かれたカードを各自1枚選んだあと、輪になって座り、一人ずつ ①なぜそのカードに惹かれたのか ②講座中に呼んでほしいニックネーム ③イベントに参加した理由 について発表
2 レクチャー	「とよのわたし研究室」の概要・「わたし研究」の説明
3 研究員体験談	こころ館が実施した「わたし研究室」に参加した受講生（研究員）による体験談
4 共有	(3)までのイベントの感想を参加者同士で共有
5 ワークショップ	こころ館ママファシリテーターによるワークショップ テーマ：「やりすぎない子育て」ってなに？
6 ミニわたし研究	「わたしらしさについて考えよう」をテーマに、直近1週間の「わたしらしかった時」、「わたしらしくなかった時」について語るインタビューワークを体験
7 告知	「とよのわたし研究室」の告知

9月の開講に先立ち2018年7月18日にプレイベントを実施した結果、地域住民15名、自治体職員（WGメンバー）7名、オブザーバー（大阪府職員）の計23名が参加し、住民15名の参加者のうち8名は9月に開講する連続講座に参加することとなった。プレイベントの具体的な内容は表11のとおりである。

このプレイベントは、WGメンバー自身が「わたし研究室」の具体的なイメージをもつとともに、住民と「ともに学ぶ」体験をすることを目指したため、WGメンバーには運営スタッフとしてだけでなく、受講生としても参加を促し7名が実際に受講した。



写真2 チェックイン



写真3 レクチャー



写真4 ワークショップ

加えて、同年8月6日にはWGがまずは自ら「わたし研究」を体験すること、今回の事業に主体的に向き合うことを目的としてWGメンバーを対象とした研修(2時間半)を実施し、8名が参加した。研修では、①WGの一員として自分ができること、②WGが協力するために大切にしたいこと・必要なこと、③わたし研究室を通してどんな価値を提供できるのか、の3点について、2グループに分かれてディスカッションを行った。その結果、「とよのわたし研究室」の運営方針として「多様な世代・多様な考え方を受け止める、豊能町らしい拠り所の場をつくる」という意見がまとめられた。参加した職員からは「どんな研修になるのかイメージができ、不安が少し解消された」、「メンバーの新たな一面を知って新鮮だった」、「一人でも多くの住民さんに、この研修のことを知ってもらいたいと改めて思った」などの感想が挙げられ、事前研修によって運営する職員の不安が解消されただけでなく、職員同士の相互理解が深まり、事業に対して積極的に関わろうとする姿勢などがみられた。



写真5 アイスブレイク



写真6 ダイアログ



写真7 ディスカッション

5.2.2. 【第1フェーズ】「わたし研究室」

【第0フェーズ】を経て、【第1フェーズ】では、「とよのわたし研究室」を実施した。本講座は、地域で暮らす女性が潜在的に持っていた可能性を見出すための人材育成事業であり、地域づくりの基礎に位置づけられる。第1期は2018年10月～2019年1月の期間に全5回、第2期は2019年年6月～10月の期間に全6回の連続講座形式で行った。第1

期は14名、第2期は11名が受講している（表10）。各自の参加動機は、1期生を参考に表12に示す。

表12 第1期とよのわたし研究室 年代別受講動機

	年代	参加動機
A	30代	今は子育て真っ最中で、仕方がないと諦めていることがあるけれど、ちょっと頑張れば、今でもできるかもしれない！と、わたし研究室の募集を見て思い応募しました。
B	30代	第二子が入園する来年度以降に個人で開業を予定しています。わたし自身がわたし研究を行い、わたしをよく見つめなおす経験をする事で、今後お客様へのアドバイスをする上でも役に立つのではないかと感じています。また、イベントに伺った際に、講師の方のお人柄の良さにきっと楽しい時間を過ごすことが出来る！と思い、応募しました。
C	40代	イベントに参加させてもらって、もっと詳しく知りたいと思ったから。自分のことを表現する力をつけたい。
D	40代	40歳を過ぎ、わたしはこれからどうしていったらいいのか？本当は何をしたいのか、何をしなくてはいけないのか…と悩んでいた時に、広報誌にはさまれてあった、このポスターを見つけました。一度自分自身を掘り下げて、見つめ直してみるのもいいのかな…と。そんな事、今までしたことがなかったので…。そして、イベントに参加させていただき…とても楽しかったです。色々な方の話を聞き、心が解放される感じがしました。今後の自分の変化が楽しみです。
E	40代	(未回答)
F	50代	「わたし」がいつも後回しになる生活の中で自分の内面に目を向ける大切さに気づきました。プレ講座を受け、ワークに参加する中で自分が研究してきた「エンカウンター」にも通じるモノを感じ、応募しようと思いました。これからの自分の生き方を考える良い機会にしたいと思います。
G	50代	どんな私を見つけられるのか、興味がありません。
H(※)	50代	これまで何事も娘中心で私自身自分のことを考える余裕もなく日々のことに追われて過ごしてきました。娘が少し離れて自分のことを考える時間もでき、この機会にもう一度自分を見つめ直し、自分らしく輝ければと思います。
I	50代	本当の自分ってどんな人間なのかを知りたかった。
J	50代	7月18日イベントに参加させて頂きました。その内で自分らしく生きる→幸せになる→まわりの人も幸せになるという事を学びました。自分らしく、その人らしくという事をもっと深めたいと思いました。様々な立場の方との交流の場がもてることも得るものが多いのではないか、と期待し応募することにしました。
K	50代	50歳を過ぎこれからの人生自分はどのように生きていくのだろうかと考えていた時でした。親、子供、孫と色々な世代の生活にかかわっているのに余計に考えてしまっているのかもしれない。自分らしさとは何なのか知っていきたくて思っております
L	50代	平成29年度3月のふれあいフォーラム「とよのわたし研究会」に参加し、更に7月のイベントにて、もっと深く学んでみたい！と思いました。これだけ生きてきても、自分のことがまだまだわかっていません。「あるがままの自分」と「ワガママ、自己中心的」の違い、人の評価や周りの目を気にせず我が道を行く方法、自己受容と他者受容のバランス等々、学んでみたいこと、向き合ってみてほしいことがこの研究会にはいっぱい詰まっているような気がしました。「私って、欠けている所だらけだ…。」と感じている自分にとって、この研究会で学ぶことはとても大きなチャンスだと思いました。
M	50代	ずっと子ども中心の生活を送っており、そのことに不満はありませんが、そろそろ子どもから離れ、自分のための生活を送ることが必要だと考えています。そのために、私自身を見つめ直す良いきっかけになると思うので、応募することにしました。
N	50代	子育てが終わり、自分を見つめ直したとき、自分が活きている生き方をしていないと思いました。そして、自分の性質、得意なこと、過去の経験で学んだ大切なもの、自分の良さなど、それらを活かして、何かお役に立てる生き方ができればと思っていたところに、わたし研究室というのを知りました。自分のやりたいことが明確になったり、自分の気づいていない良さが発見できたり、自分の考えや想いを誰かに伝えたりすることで、私に大きな原動力が生まれればと応募しました。ともに頑張れる仲間とご縁が繋がれば、なお嬉しいです。
O	50代	子育てに日々悩んでいるため、母親が、どのようにあるべきか知りたくてこの講座に大変期待を持ちました。

各回では、「沈黙もコミュニケーションのひとつとして受け入れる」、「ワーク中に聞いた内容は他言しない」、「全肯定で人の話を聴く」および「アドバイスをしない」の4点を原則としてルールに設け、受講中はマインドフルな状態を心がけるよう、ファシリテーターから適宜声かけを行うようにした。

さらに、受講生には白衣を配布し、「とよのわたし研究室」の制服として講座中の着用を促した。白衣を着用することで、自分を研究する態勢へと切り替えることを意図している。

また、各回では、体調不良や家庭の事情等でやむをえず欠席する受講生が1～2名いる場合もあった。その際には、講座の内容等を個別に伝え、個人で課題に取り組めるよう配慮した。なお、第1期、第2期の受講生の出席状況とスタッフの出欠状況は表13のとおりである。

また、講座に参加するメンバー以外のWGメンバーは、受講生様子を観察する記録係として参加してもらった。講座終了後は、振り返りを目的としたランチミーティングを実施し、WGメンバーとこころ館スタッフ本音で意見交換できる機会を設け、事業に対する共通理解を深めるよう心がけた。

表13 「とよのわたし研究室」実施および参加状況

第1期 (2018年度)				第2期 (2019年度)			
日時 会場	出席者数	スタッフ		日時 会場	出席者数	スタッフ	
		計	内訳			計	内訳
2018.10.2 9:30-12:30 吉川自治会館	15 (4)	豊能町 13	5 7 1	2019.6.11 9:30-12:45 ふれあい文化センター	9 (3)	豊能町 9 1期生	2 4 3
2018.10.30 9:30-12:30 吉川自治会館	13 (4)	豊能町 11	5 6	2019.7.16 9:30-12:45 吉川自治会館	11 (3)	豊能町 9 1期生	2 3 4
2018.11.20 9:30-12:30 吉川自治会館	13 (4)	豊能町 10	4 6	2019.8.6 9:30-12:45 吉川自治会館	9 (1)	豊能町 9 1期生	2 3 4
2018.12.11 9:30-12:30 吉川自治会館	13 (4)	豊能町 10	4 6	2019.9.10 9:30-12:45 吉川自治会館	10 (2)	豊能町 9 1期生	2 4 3
2018.1.11 9:30-12:30 保健福祉センター	12 (4)	豊能町 9	4 5	2019.10.8 9:30-12:45 吉川自治会館	10 (3)	豊能町 9 1期生	3 3 3
				2019.10.29 9:30-12:45 吉川自治会館	11 (3)	豊能町 11 1期生	2 4 5

以下、豊能町に提出した「業務完了報告書」を参考に、各回の全体の概要と代表的な受講生の語りを示す。なお、事例については第1期「とよのわたし研究室」の内容を中心に記載していく⁴⁴。

第1回「自分らしさ診断」

第1回目は、まずはオリエンテーションを兼ねて「わたし研究室」の全体概要について説明したのち、こころ館が独自開発した「自分らしさ診断」⁴⁵というツールを使ったワークを実施した（表14-1）。

表14-1 第1期「とよのわたし研究室」内容

第 1 回	(1)	チェックイン	「あなたがエッジ（限界）を超えた経験について」
	(2)	レクチャー	「わたし研究室」について
	(3)	個人ワーク	自分らしさ診断
	(4)	インタビューワーク	(3)の結果について・ギフトメッセージの交換
	(5)	チェックアウト	講座の振り返り
	(6)	宿題	講座を受講して得られた気づき 自分らしさを取り戻すためのチャレンジ

以下、表に沿って内容を示す。(1) チェックインでは受講生でサークル型になって着席し、「限界を超えて頑張った経験」について一人ずつ話していった。(2) レクチャーでは、ファシリテーターである筆者から「わたしを研究」する意義や、「とよのわたし研究室」のプログラム内容について説明を行った。(3) 個人ワークでは「自分らしさ診断」に用いて、診断結果に即して自分をしるワークを実施した。(3) (4) のあと、インタビューワークを3人一組に分かれて行い、一人ずつ診断結果からの気づきを話し、グループ内でギフトメッセージの交換をした。(5) チェックアウトでは、受講生は、(1) チェックインと同様の円座の形式に座り、一人ずつ講座の振り返りを行った。

チェックアウトでは、受講生から「わたし研究するなかで心が解き放たれたというか、自分の正常の位置に戻してもらえたなあという気がしました。毎日人に振り回されて生活していることが改めてわかりました。」という意見や、「診断結果を分析してみて、過去

⁴⁴ 以下では、個人が特定できるおそれがあると判断した場合を除き、必要に応じて受講生の言葉をそのまま転載することとする。

⁴⁵ 「自分らしさ診断」は、こころ館が大学生200名へのアンケート調査をもとに開発した診断ツールである。全30問の質問項目から「自分らしさ度」を5段階で測定し、自分らしくなれない時の傾向を6つのタイプ別に診断する。

の経験から人が怖くて、人から否定されることをすごく恐れていることに気づきました。そのせいで自分の感情を出さなくて抑圧していることも多いです。でもそのままだと生きていても楽しくないので、人と関わることで喜びや楽しみを得られるようになりたいです。」などの発言もあった。また、(4) の対話のなかで、人から受け取ったギフトメッセージの感想として「普段の生活で褒められるっていうことがないんで（略）これは大事に持って帰ろうと思います。」、「頑張ってたよって言われて（略）私は人に認められたかったんかなと気づいた」などがあった。



写真 8 自分らしさ診断

写真 9 インタビューワーク

写真 10 チェックアウト

第 2 回 マインドフルネスワーク

第 2 回は、「マインドフルネス」についてのレクチャーを行った後、マインドフルネス絵本『母なる木』に基づくワークを行った（表 14-2）。

表 14-2 第 1 期「とよのわたし研究室」内容

第 2 回	(0)	振り返り映像視聴	
	(1)	チェックイン	「これまでの人生のなかで幸せを感じた出来事」
	(2)	レクチャー	マインドフルネスについて
	(3)	個人ワーク	『母なる木』の映像版を視聴
	(4)	インタビューワーク	(4)のワークで感じたことを共有
(5)	チェックアウト	「本当になりたい自分の姿」 その実現のために次回の講座まで実践すること	

第 2 回目以降は、前回の講座の様子をまとめた (0) 「振り返り映像」を受講生に視聴し、自分がどんなことを語っていたのかを振り返ってもらうようにした。なお、(0) については、3 回目以降も同様に「振り返り映像」の視聴から講座を開始している。

(1) チェックインでは、「これまでの人生を振り返り幸せだと感じた出来事」について一人ずつ語るるところからスタートした。(2) レクチャーでは受講中の基本姿勢「マインドフルネス」についての説明を行ったうえで、(3) では『母なる木』を視聴してもらい、(4) 物語に沿って自己の課題を探求するワークを実施した。(5) のインタビューワークでは(4)で気づいたことを、受講生はグループに分かれて共有し、(6) のチェックアウトでは「本当になりたい自分」を実現するために、次回の講座までチャレンジすることを共有して講座を終えた。

チェックアウトでは、13人中8名が子どものことについて、5名が夫についてのエピソードを語っていた。「家族に対して、自分の思いを伝えずに勝手にやってしまうことが結構あるなって思いました。でも、いつまでも仲のいい関係が続ける為には、自分の思っていることは口に出さないといけないなと今日すごく思いました。次の1ヶ月は、自分の気持ちを怖がらず伝えてみようと思います。」という意見や、「本当に思っていることを言ったら怒られるからとって向こう（子ども）は黙っていると思うので、言っても大丈夫だよという雰囲気を出したい。」という発言があった。

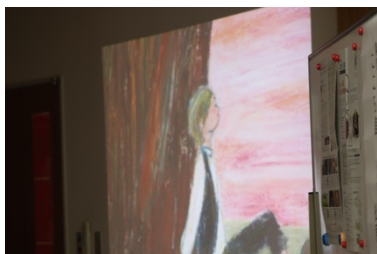


写真 11 『母なる木』映像



写真 12 ワークシート記入



写真 13 インタビューワーク

第3回 親との関係性からわたしを研究する

第3回は各自がワークシートに沿って「親との関係性からわたしを研究する」というテーマに取り組んだ後、ペアワークに取り組んだ（表 14-3）。

表 14-3 第1期「とよのわたし研究室」内容

第 3 回	(0)	振り返り映像視聴	
	(1)	チェックイン	「講座が始まってから今日までの自分を振り返って」
	(2)	個人ワーク	親との関係性からわたしを研究する
	(3)	ペアワーク（3セット）	(2)のワークで気づいたこと・ギフトメッセージ
	(4)	チェックアウト	ペアワークから生まれた気づき
(5)	宿題	次回の講座までの1ヶ月間実行すること 3回目講座を受講しての振り返り 日常で気づいたこと	

(1) チェックインでは、「『とよのわたし研究室』が始まってから今日までの自分を振り返って」をテーマに、講座を通してどのような気づきや変化があったのかを共有した。

(2) の個人ワークでは、父親・母親から無意識に受けてきた影響を紐解くワークを行った。次にペアに分かれて (3) のペアワークを実施し、(2) のワークから気づいたことを共有してもらった。最後の (4) チェックアウトでは、(3) からの気づきを一人ずつ発表していった。「チェックアウトでは、「父親の悪いところがたくさん目について、私には共感できないと思ってきたけれど、実はそれが自分の生きていく中での反面教師になっていて、本当に大切なものを選べる自分を作ったのは、見栄っ張りな父親だったのだということに気づけて良かったです。」と、それまで気づいていなかった親への思いや、親から受け継いでいる自分の良い面がわかり、それにより自分がどんな人間であるか自覚が進んでいる様子がうかがえた。また、「2人から、お母さんは私のことをすごい愛してはったんちゃうって言われたのがすごいハッとした。」という言葉があった。



写真 14 開講時

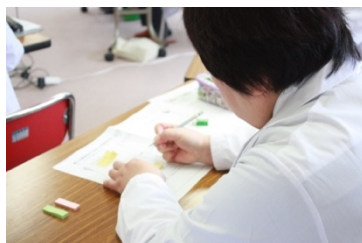


写真 15 個人ワーク



写真 16 ペアワーク

第4回 わたしの人生の物語

第4回は「ライフラインチャート」の作成と「わたしの人生の物語」ワークを通してこれまでの人生全体のふり返しを行った（表14-4）。

表14-4 第1期「とよのわたし研究室」内容

第 4 回	(0)	振り返り映像視聴	
	(1)	チェックイン	「前回から今回までの心の動き」
	(2)	個人ワーク	「ライフラインチャート」で人生をふり返る
	(3)	個人ワーク	「わたしの人生の物語」第5章まで
	(4)	ペアワーク	これまでの人生の物語 それを踏まえての今の自分について
	(5)	個人ワーク	「わたしの人生の物語」第6章以降
	(6)	チェックアウト	ワークから生まれた気づき これから実現したい未来 そのために今解決すべき課題
(7)	宿題	今回のワークで発見した「解決すべき課題」を テーマに3週間内省を続ける「21日間プログラム」	

(1)のチェックインでは、前回の講座以降の「前回から今回までの心の動き」について一人ずつ語ってもらった。(2)・(3)のワークでは、生まれてから今日までの幸福度の変遷を「ライフラインチャート」を用いてふり返ったのち、自分を物語の主人公と見立て、幼少期から現在までの半生を物語にまとめる「わたしの人生の物語」個人ワークを実施した。個人ワーク終了後、ペアになって対話を行い、最後にはギフトメッセージとしてフィードバックを互いに行った。(6)チェックアウトでは、ワークからの気づきと、これから実現したい未来、その未来を実現するために解決すべき自分自身の課題を一人ずつ発表した。チェックアウトでは、「自分に自信を持ってもいいはずなんですけど(略)家庭を持って、子どももいるということで、変な守りに入ってる自分もいるなど。本来の私でもっとアグレッシブに挑戦していきたい自分だったんじゃないかなって色々今日やってみて気づきました。」、「自分の生きてる価値は何なのかなって思ってた、それがまだ何なのかわからないけど、生み出されるものから逃げずに前に進める自分になっていきたいなと思います。(略)今中にある自分の輝けるもので輝いていければいいなと思ってます。」などの発言があった。



写真17 ワークシート記入



写真18 ペアワーク



写真19 チェックアウト

第5回 わたしの研究テーマをつくろう

最終回となる第5回は「研究テーマ発表会」に向けて各自が「これからの自分らしい生き方」を表す「研究テーマ」を考えた（表14-5）。

表14-5 第1期「とよのわたし研究室」内容

第5回	(0)	振り返り映像視聴	
	(1)	チェックイン	「21日間プログラムの感想」
	(2)	個人ワーク	わたし研究のテーマをつくろう
	(3)	全体	研究テーマを分かち合う
	(4)	チェックアウト	これまでの講座の感想
(5)	■宿題	研究テーマ発表会	

(1)のチェックインでは、4回目の宿題である、自分がチャレンジする課題と21日間向き合う「21日間プログラム」の感想を共有することから始めた。(2)の個人ワークでは、受講生は、これまで使用したワークシート等をもとに「わたし研究」のなかでの自分の発言や考えをふり返りながら、これから実現したい自分らしい生き方を「研究テーマ」と発見してもらう。(3)では、発見した「研究テーマ」を、受講生が一人ずつ発表していた。発表を聞いていた他の受講生から感想やメッセージを発表者に手渡してもらうようにした。

(4)チェックアウトでは、1回目からの講座全体をふり返り、感想を共有していった。「自分の個性を抑えこんでたり、縛りつけていたものを、ほとんど降ろすことができたような気がします。」、「人の話を聞くのはためになるなって思いました。どんどん、こもりきりになる生活から出てみて、来てよかったな、だから今後も、世間に関わるようにいきたいと思いました。」、「最後の最後で、やっと自分のことを気づけて良かったです。

(略)ここから新しいことができたらっていう風に思ってます。」などの発言が見られた。



写真20 チェックイン

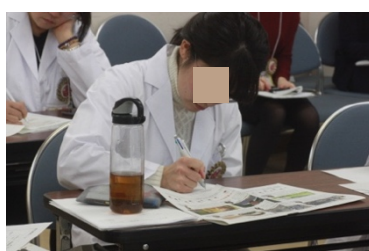


写真21 ワークシート記入



写真22 発表

研究テーマ発表会

以下では、2019年2月2日に豊能町役場大会議で開催した、対象1期生の「研究発表会」について明記する。研究発表会当日の構成については、表15の通りである。

表15 「研究テーマ発表会」構成

プログラム	内容	担当
1 オープニング	オープニング映像視聴	
2 主催者挨拶・ゲスト紹介	主催者挨拶・ゲスト紹介	豊能町職員
3 概要説明	「とよのわたし研究室」紹介	こころ館
研究テーマ発表（前半）	研究テーマ発表と発表についてのコメント	
4 ゲストメッセンジャー・来場者コメント	*2名の発表ごとにゲストメッセンジャー2名と来場者1~2名がコメント	研究生6名
5 休憩	*来場者にギフトメッセージの貼付呼びかけ	
6 研究テーマ発表（後半）	研究テーマ発表と発表についてのコメント *2名の発表ごとにゲストメッセンジャー2名と来場者1~2名がコメント	研究生4名
7 豊能町役場WGの発表	WGメンバー6名（研究生4名と運営スタッフ2名）の感想発表	WGメンバー 研究生4名・ 運営スタッフ2名
8 地域づくりモデルの解説	「とよのわたし研究室」の構成について、学術的見地から解説を行なった。	こころ館
9 総評	全体総評	ゲストメッセンジャー2名
10 閉会挨拶	閉会挨拶	副町長
11 修了証書授与	修了証書授与・記念品（ピンバッジ）贈呈	

「研究テーマ発表会」では、すべての講座を終えた受講生が、講座中に発見したこれから実現したい生き方について「研究テーマ」として発表した。発表は、受講生が講座を通じて、どのような心情の変化があり自己実現したい内容である研究テーマを発見したのが、来場者に理解できるよう、「わたし研究を受ける前」「わたし研究をするなかで」「わたし研究の結果」「わたしの研究テーマ」の順番で、ひとり5分程度で発表してもらった。発表会は、受講生の研究テーマがより具体化するよう応援者を集うこと、またゲストメッセンジャーからコメントをもらうことで、受講生の士気をあげるということを主な目的とし開催を行った。当日のゲストメッセンジャーには、大学関係者、地域内外の事業者などを招待し、そのほか、受講生の家族や友人、地域住民や地域外の関係者や、役場職員らも来場者として参加してもらうこととなった。発表会当日は、町内外から56名が参加した。会場の壁面には、受講者ごとに模造紙を配置し、それぞれの発表に対して来場者から応援コメント記入してもらうようにした。



写真 23 発表会場の様子



写真 24 研究テーマ発表



写真 25 応援コメント

ゲストメッセージからは、受講生に対する共感や応援のコメントが寄せられ、なかには「皆さんの発表を聞いて、自分自身が自分を振り返るきっかけになった」とする声もあった。また、作品づくりを研究テーマに掲げた受講生に対して「個展などする際には、ぜひうちのお店を使ってください」と協力を申し出る場面もあった。

発表会の最後には、ゲストメッセージで株式会社フェリシモの三浦卓也氏より「自らを愛していくプロセスを探求していくことが、身近な人や地域を幸せにしたり、組織を幸せにしたりする源泉になるんだと学んだ。組織の変え方、社会の変え方、幸せな世の中の作り方をを見せてもらった」というコメントがあった。また、同じくゲストメッセージを務めた同志社大学の今里滋教授は、「人が幸せになれることによって、自分が幸せになるという、幸せの循環がこの地域づくりの特徴」とし、「とよのわたし研究室」を通じた地域づくりを、人が成熟することで地域が活性化していく「発酵型のまちづくり」であると総括した。

発表会の最後には、豊能町の副町長から「とよのわたし研究室」の受講生に修了書が手渡された。1期生・2期生の研究テーマは表 16 に示す。

表 16 研究テーマ一覧

研究テーマ	内容
家族がしあわせになれる、居心地のいいうちづくり	大切な家族の為に、家を最高に居心地のいい場所にしたい。そして家族に幸せになってもらいたい。
願いを叶える、観音さまづくり	ベットのロスで悲しむ友人が多いので、ベットが亡くなった時用の観音さまを創る。自分にしか作れない仏像を創造したい。
頑張る人に寄り添う傾聴者	人の心に寄り添って話を聴くことで、気持ちが楽になり、優しい気持ちになれるお手伝いがしたい。
書を通して、笑顔の人を増やす	長年続けている書道を通して笑顔を増やし、自分がすでに持っているもので世の中の役に立ちたい。
「やってみたい」を応援する場づくり	「とよのわたし研究室」の受講生や地域の人たちがやってみたいことに共感し、応援する場をつくりたい。
毎日頑張るママ達のモノと心の片付け術	毎日頑張るお母さんたちが自分自身を認められて、自分らしい毎日を送れていると感じられるように、モノと心の片付けを伝えていきたい。
とよで暮らす人たちのしあわせサポーター	自分らしく、自分を大切にできる人を増やして、豊能町で暮らす人々が幸せに暮らしていける手助けをしたい。手助けを求める人がいれば、その人の心に寄り添って少しでも支えたい。
謙虚に生きる その人らしく生きるをつくる	謙虚であることを大切にしながら、職場で出会う人々のそれぞれの立場を思いやり、その人らしさの実現のために力になる。
家から外へ～録音図書で心の扉をひらく伴走者～	趣味の読書を通じて、視覚障がいや読書障がいなどの発達障害を抱える方が本を楽しめるお手伝いをしたい。自分自身も家にこもるのではなく、外に出ていけるような人になりたい。
心をつなぐもの作りと、心の居場所づくり	特技の人形づくりを通して、生きる力や安らぎが生まれる心の居場所をつくりたい。
「わたしに生まれてきてよかった」と言えるために人を助ける自分になる	過去に人に助けてもらい救われたように、今度は自分が困っている人の手助けができるようになりたい。
「食」を通じて、家族や地域とほどよくつながる	自分の興味がある食の分野で、家族や地域とつながっていききたい。
しあわせをつくる家族ごはん	子どもたちのお弁当作りを通して愛情を伝え、家族の幸せをつくりたい。
「話を聴く」ことで安心の場をつくる	「とよのわたし研究室」で学んだ人に話を聞いてもらえることのうれしさと聞くことの大切さを提供できる人になりたい。
人生楽しく生きる！	無理に人に合わせず、自分が楽しい方を選ぶ。まずは最近始めたウォーキングで、道ゆく人にほんわかご挨拶していきたい。
みんなのやりたいを叶える拠点をつくる	数年前に両親が亡くなり空き家になってしまった実家を自分で手直ししながら、地域の人々のやりたいが叶う場所として活用したい。
わたしらしく生きる、子どもがきらきら輝く	自分自身が好きなことに触れながら、自分らしく楽しんで過ごしている姿を大切な子どもたちに見せたい。
人に優しく 心に寄り添い 心のあかりを灯す人になる	軽く自由になった心で、優しく、心に寄り添い、相手の背景や叶えたいこと知る努力をしていきたい。そうすることで、周りの人がその人らしく、自由に幸せに生きるお手伝いがしたい。
“わたしが変われば、地域が変わる。”を広めるお手伝い	自分らしく生きて心から健康で豊能町のくらしを楽しめる人が増えるように、豊能町で自分らしく生きる人を増やすお手伝いをやっていきたい。
わたしらしいエコな暮らしを見つける	豊能町の自然に寄り添った、家族や環境に優しいエコな暮らしがしたい。ゆくゆくはその暮らしを発信していきたい。
役に立つ喜びを感じて生きる	「わたし研究」で発見した人が嫌がることや面倒がることも喜んでできる自分を活かして、小さなことでもコツコツと人の役に立つことを重ねたい。
人として～豊能町の人として、日本人として、地球人として、人とのつながりを育んでいきたい～	地域で見守ってくださったご近所の皆さんに恩返しができるよう、「庭先カフェ」を開催して健康を確認しあえる場づくりがしたい。
図書館でみんなのしあわせのタネをまく しあわせの花を咲かせる	職場である図書館で、町の人々に豊能の自然の恵みを感じる心地よさを知ってもらう、また豊能で暮らしていくことの楽しみに気づいてもらえるような場づくりや情報発信に取り組んでみたい。
豊能町で困っている方々の 人生の一部のお手伝い	生きづらさを抱えた人々に対しての総合的な相談員となり、地域医療の理念である「この町で、安心して、暮らし続けることが出来る」を実現したい。
家族に気持ちを伝えながら 支えている自分になる	自分らしく生きていくために、今できる自分の精一杯で家族を守り、支えていきたい。

5.2.3. 【第2フェーズ】伴走支援

【第2フェーズ】は、【第1フェーズ】を終了した受講生を対象に、希望者を募り、それぞれの「研究テーマ」を発展させるための伴走支援を実施した。伴走支援の具体的な内容は、伴走支援ワークショップ・個別相談会・ファシリテーター養成講座である。

まず、はじめに実施したのは、伴走支援ワークショップ（全2回）である。内容については表17に示した。伴走支援ワークショップは、1期生・2期生に実施したが、下記では、1期生の伴走支援ワークショップを参考に実施内容を以下に示す。

表17 伴走ワークショップ 日付・時間・会場・参加人数

		日付	時間	会場	参加人数
第1期	第1回	2019年2月19日	午前9時30分 から正午	西公民館	11名
	第2回	2019年3月19日			8名
第2期	第1回	2019年12月17日		吉川自治会館	11名
	第2回	2020年1月15日		軽運動室	8名

伴走支援ワークショップ

伴走支援ワークショップの1回目は、過去にこころ館主催の講座を受講した修了生を招いて、どのように研究テーマを実現していったのかについてプロセスを語ってもらった。後半は受講生同士が協力しあうことで、これから地域でどのようなことができるのかについてアイデアを出し合うワークショップを行った（表18-1）。

表18-1 第1期「とよのわたし研究室」伴走ワークショップ内容

第1回	(1)	チェックイン	今の気持ち
	(2)	先輩研究員の体験談	研修を修了してからの近況
	(3)	レクチャー	伴走支援の内容について
	(4)	グループワーク	「このメンバーでこれからどんなことができるのか」を検討
	(5)	チェックアウト	今の気持ち

続く第2回では、「とよのわたし研究室」を終了した受講生の研究テーマが実現するための伴走支援として、担当者である社会起業家から具体的な支援内容についての説明が行われた。次に、受講生同士が研究テーマに関する進捗状況を共有しあい、今後どのように展開していけるかを全体に向けて発表し、意見交換を行った（表 18-2）。

表 18-2 第1期「とよのわたし研究室」伴走ワークショップ内容

第 2 回	(1)	チェックイン	最近の出来事でシェアしたいこと
	(2)	レクチャー	「プロジェクトをはじめよう」
	(3)	共有	各受講生の研究テーマの現状
	(4)	チェックアウト	感想

伴走支援ワークショップは、当初の事業計画には組み込まれてなかったが、発見した「研究テーマ」を、どのように実現したら良いのかわからないという受講生もいたために、豊能町職員とこころ館、伴走支援を担当する社会起業家を交えて協議を行い、伴走支援ワークショップを開催する運びとなった。併せて、受講生の研究テーマが実現するための支援に、社会起業家による個別面談の機会を設けることとなる⁴⁶。

ファシリテーター養成講座

【第2フェーズ】では、受講生に対する伴走支援として、上述した内容に加えて、ファシリテーター養成講座（表 19）を提供した。この講座は、受講生がファシリテータースキルを習得してもらうことを目的に置いた。豊能町のブランドメッセージには、「自分らしさを見つけたり、取り戻したりする人がいる」という一節があり、自分らしく活躍できる人材の育成に豊能町は取り組んでいる。そういった背景もあり、こころ館が独自開発した「自分らしさ診断」の診断ができるスキルとファシリテーションの基礎的技法を学ぶ機会を受講生に提供することとした。受講生は、ファシリテーター養成講座を受講したことで、自分らしさ診断士として診断ができるようになり、さらにファシリテーションのスキルを習得したことで、ワークショップも開催できるようになった。

⁴⁶ 第1期のみ実施。

なお、養成講座を終了した受講生には、「自分らしさ診断士」として認定証を、こころ館から発行した。

表 19 ファシリテーター養成講座 日付・時間・会場・参加人数

		日付	時間	会場	参加人数
第1期	第1回	2019年5月9日	午前9時30分 から午後12時 30分	吉川自治会館 軽運動室	12名
	第2回	2019年5月16日			11名
第2期	第1回	2020年6月25日	午前9時30分 から午後12時 45分		5名

ファシリテーター養成講座の、各回の内容は以下の通りである。第1回では、対面での「自分らしさ診断」の進め方に関するレクチャーを行い、2人一組となって診断の練習を行った。後半は、「自分らしさ診断」の具体的な活用方法を考えるために、グループワークを実施した。また、次回までに自分らしさ診断を身近な人3名に実施してくることを宿題とした（表 20-1）。

表 20-1 第1期「とよのわたし研究室」ファシリテーター養成講座内

第1回	(1)	チェックイン	イラストカードから連想したこと
	(2)	レクチャー	「わたし研究をした意味」 「自分らしさ診断士とは」
	(3)	ペアワーク	診断練習
	(4)	グループワーク	自分らしさ診断の 活用シーンを検討
	(5)	チェックアウト	感想

第2回では、自分らしさ診断を用いたワークショップを実施することを想定した講座を行った。ファシリテーションの実施方法について解説を行ったのち、ファシリテーターが用いる技法のひとつである傾聴の練習を2人一組に分かれて行った。また、後半は自分らしさ診断を用いたワークショップをデザインするワークを行った（表 20-2）。

表 20-2 第 1 期「とよのわたし研究室」ファシリテーター養成講座内

第 2 回	(1)	チェックイン	宿題の感想
	(2)	レクチャー	ファシリテーションの実施方法
	(3)	ペアワーク	傾聴練習
	(4)	個人ワーク	自分らしさ診断を使った プログラムデザイン

以上、本節では、「とよのわたし研究室」で実施した各プログラムの詳細について、プロトタイプのフェーズごとに記述した。上記のプログラムの詳細は、第 1 期を中心に述べたものであるが、続く第 2 期においてもおおよそ同様の内容で実施した。

ここまでの社会実験の結果を踏まえ、次節では第 3 章第 5 節で示したプロトタイプの検証を行っていくこととする。

6. 検証と分析

本章では、前章に詳述した社会実験の結果分析を通してプロトタイプの検証を行っている。最後に、社会実験全体をふり返り、本地域づくりを实践するうえで要となった点や、「個人の内発的発展」に基づく地域づくりの新たな可能性を導出していくこととする。

本研究の仮説は、次の通りである。まず、プロトタイプの第1フェーズにあたる、「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムを経ることで、受講生のアイデンティティ形成と自利利他の精神の発現が促進される。次に、第2フェーズにあたる伴走支援を経ることで、受講生同士に相互扶助の関係性が生まれる。最後に、以上のすべてのフェーズを経ることで、内発的イノベーションが創発し、地域を担う人材や地域活性化につながる事業などの新たな価値が地域に創出されると考えられる。

以下では、上記の仮説の検証を行い、プロトタイプの有効性を確認していくこととする。同時に、その結果が導かれた要因についても分析や考察を行う。

なお、分析に使用するデータについては、講座初回時に本研究で使用する旨を説明したうえで、すべての1期生・2期生から使用の許可を得ている。

6.1. 検証1（受講生のアイデンティティ形成に関する検証）

本節では、プロトタイプの第1フェーズを経ることで受講生のアイデンティティ形成が促進されていたかを確認する。そのうえで、その結果に作用した要素についての検討を行う。

6.1.1. 検証の方法

3章で示したミャンマーでのフィールド調査の結果から、アイデンティティを形成する過程には、自己課題の探求を含むことが示唆された。高村は「個人が直面する様々な課題を探求する際に、彼らは自分自身を見つめ、自分自身に対する問いかけを行っている」と述べ、「人は課題を探求する過程で、自らのアイデンティティを問い直している」（高村1997：243）と示している。つまり、自己課題の探求とアイデンティティの問い直しは密接に関連していることは先行研究からもわかる。そこで、住民のアイデンティティ形成が促進されていたかを確認する指標に、住民自身が抱える課題と向き合い、その課題を改善・解消できていたかを検証していく。

検証の流れは次の通りである。まず、2018年1月（第1期）/2019年11月（第2期）に開催された「研究テーマ発表会」で受講生（1期生14名、2期生11名）が発表した原稿をもとに、講座に参加する前の自身の様子を語った「わたし研究する前のわたし」、講座を経て自身の変化を語った「わたし研究をした結果」の箇所をテキストとして抽出した⁴⁷。さらに、「わたし研究する前のわたし」の語りから抽出したテキストと、「わたし研究をした結果」の語りから抽出したテキストを、佐藤（2008）が提唱する質的データ分析法を用いて分析した⁴⁸。まずは一人ずつの発表原稿から分析対象となるテキストを抽出し、それらを意味のあるセグメントに分解した。次に、各セグメントに対してその内容を抽象化したコードを生成した。この際、ひとつのセグメントに対して複数のコードを生成する場合もあれば、分析内容の趣旨に合わないためコードがつけられないセグメントもあった。また、コードの内容は何度も見直しを行い、恣意的な解釈への偏りを避けるため、必要に応じて原文のテキストに立ち返り発言の文脈を確認している。続いてすべてのコードを意味内容が類似するものにまとめ、小カテゴリーを生成した。さらに小カテゴリー同士を見比べ、同様の手続きを通して大カテゴリーを生成した。最後に、分析結果の比較を行い、受講生が講座を通して自己課題と向き合い、最終的にその課題が改善・解決に向かっていたかどうかを確認した。

なお、調査対象者であるすべての1期生・2期生には、「とよのわたし研究室」の初回講座にて研究の趣旨を文書と口頭で説明し、語りや写真を研究に使用することの同意を得た。また、調査対象者には全員同意書に署名をしてもらった。

6.1.2. 結果と考察

次に示す表21・23は「わたし研究する前のわたし」「わたし研究をした結果」についての語りをそれぞれ分析した結果である。以下本文では、原文の引用を「」、コードを【】、小カテゴリーを〈〉、大カテゴリーを『』、を用いて表すこととする。

⁴⁷ ほとんどの受講生は、発表原稿を読み上げるかたちで発表を行っていたが、一部は原稿をメモ書き程度にとどめ、本番は口頭で内容を補足しながら発表する者がいた。その場合は、実際の発表の語りを書き起こしたテキストデータを用いることとした。

⁴⁸ 分析方法は、本手法を用いて社会実験の分析を行っている飯塚（2016）を参考に実施する。

表 21 「わたし研究する前のわたし」についての受講生の語りの分析結果

[1] 充実して満たされた暮らし		22
良好な人間関係に恵まれた暮らし	8	好きなことをして暮らしている
充実した幸せな暮らし	7	自分らしく満足して生きている
[2] 時間に追われた生活		25
時間に追われる毎日	6	忙しさに疲れ果てている
家族中心の生活を送っている	4	仕事中心の生活を送っている
家事と仕事の両立に奮闘する	3	同じことをこなす毎日
身を粉にして頑張らなければならない	3	自分のことは後回しにしている
[3] 自分に対する課題（自分らしさを発揮する阻害要因）		47
将来に対して不安を抱えている	7	やりたいことがわからない
自分を責めて落ち込む	6	理想と現実のギャップに苦しんでいる
育児・仕事・家事に追われてイライラしてしている	5	忙しくてなかなか行動に移せない
自分が楽しむことに引け目や罪悪感がある	4	今の自分のままでいいのか葛藤している
気持ちを分かってもらえないジレンマがある	4	自分の存在意義に悩んでいる
思い通りにならない現実に苛立っている	3	言い訳ばかりしている
気持ちを抑圧する	3	やりたかったことへの後悔
自分に自信が持てない	3	変わることへの諦め
[4] 人間関係に関する課題		18
人に振り回されて疲れている	4	人と距離をとってしまう
子どもや家族に当たってしまう	4	空気を読む
人との関わりに臆病になっている	3	人とトラブルになることがある
周りに気を使い合わせすぎてしまう	2	自分の弱みを誰にも見せられない
[5] 研修を通して実現したいこと		20
自分を変えてみたい	6	仕事も家庭も完璧にこなしたい
自分らしさを探求したい	4	何かの役に立ちたい
今後の生き方を考えたい	3	人と関わりたい
人生をより楽しみたい	2	一歩を踏み出したい
楽しんでいる姿を家族に見せたい	1	
[6] その他		7
人生の節目	4	聴覚過敏
自分には関係ないと思っていた	1	ワクワクしている

上記のように、「わたし研究する前のわたし」に関する大カテゴリ [1] ～ [4] からは、充実して満たされた暮らしを送る一方で、時間に追われ、自分自身や人間関係について課題を感じている受講前の受講生の様子がわかる。

大カテゴリ [1] の『充実して満たされた暮らし』からは、「私のやりたいことを、家族が全面協力してくれ、子育ても作家活動も、とても楽しく充実していて、本当に有り難いなあと思っています。」「ママ友や趣味仲間、仕事にも恵まれ、何より家族もみんな元気。私には充分過ぎるくらい幸せな生活をさせてもらっていました。」などの語りに代表されるように、家族や友人・同僚などの人間関係に恵まれ、日々好きなことをしながら自分らしく過ごす充実した受講生の暮らしぶりがうかがえる。

しかし、その一方で、大カテゴリー [2] の『時間に追われた生活』からは、「日々の生活に追われ、家事や育児をする中で自分の思い通りにいかないことにイライラしたり落ち込んだりすることが多かったように思います。」とあるように、家族や仕事を中心の時間に追われた生活を送っており、自分のことは後回しにして頑張り続ける受講生の疲れが見てとれる。

続く大カテゴリー [3] 『自分に対する課題』は、6つの大カテゴリーのなかでもっともコードが集中したカテゴリーである。ここには、不安、自己卑下、苛立ち、引け目、ジレンマ、抑圧、自信のなさなど、受講生が抱える様々な内的な課題が表れている。特に集中しているのは「このままのライフワークバランスでは、疲弊していくばかりで、数年後を想像してみても素敵な自分が見えていませんでした。」の語りに代表される〈将来に対して不安を抱えている〉、「こんな私が育児をしてはだめなのではないか。」の語りに代表される〈自分を責めて落ち込む〉、「『ゆっくりと本を読みたくても、自分の時間を持てる日はほとんどない。まわりにふりまわされて、イライラするばかりだ』といつも感じています。」の語りに代表される〈育児・仕事・家事に追われてイライラしている〉だった。これらの感情は、『時間に追われた生活』の環境に紐づいたものと考えられる。

大カテゴリー [4] 『人間関係に関する課題』では、人に振り回されてしまう、家族に感情をぶつけてしまう、人との関わりに臆病になっているなど、家族や身近な人と関係性における受講生の課題が表れている。「人の言葉や行動に敏感で、ストレスを少しでもなくすため、距離感を保ち周囲に気を遣いながら暮らしてきました。」、「思いとは裏腹に、子どもには感情をぶつけてしまうことも多々あります。」などの発言からは、人との距離感や関わり方を気にする受講生の様子がうかがえる。

そして、大カテゴリー [5] 『研究を通して実現したいこと』からは、「今の“自分”を変えてみたい、今の自分を見つめ直して“今後の人生”をより楽しく過ごしたいと思い受講する決心をしました。」という語りに代表されるように、〈自分を変えてみたい〉という自己変革の願望や、アイデンティティの探求・確認を求める受講生の様子が読み取れる。

大カテゴリー [6] 『その他』からは、子どもの自立や転職・退職などの人生の節目を迎えたことを契機に「とよのわたし研究室」に参加した受講生がいることが読み取れる。他にも、〈自分には関係ないと思っていた〉とあるように、積極的な参加ではない受講生もいたことなどがわかる。

表 22 「研究する前のわたし」小カテゴリーとコード

[1] 充実して満たされた暮らし							
良好な人間関係に恵まれた暮らし	8	良好な人間関係	5	好きなことをして暮らしている	4	好きなことをしている	3
		協力的な家族	1			やりたいことに挑戦	1
		家族に恵まれている	1			これまでの自分に満足	2
		仕事や人間関係にも問題なし	1			自分らしく生きている	1
充実した幸せな暮らし	7	充実した暮らし	3	自分らしく満足して生きている	3	好きなことをしている	3
		幸せな生活	2			やりたいことに挑戦	1
		子育ては楽しい	1			これまでの自分に満足	2
		イキイキと暮らしている	1			自分らしく生きている	1

[2] 時間に追われた生活							
時間に追われる毎日	6	仕事や家事に追われる	2	身に粉にして頑張らなければならない	3	頑張らなければならない	3
		子育てに追われる	2			疲れている	2
		仕事や子育てに手一杯	1			しんどさを感じる	1
		自分の時間が持たない	1			仕事中心の生活	1
家族中心の生活を送っている	4	家族中心の生活	2	仕事中心の生活を送っている	2	仕事を抱え込む	1
		子ども中心の生活	1			同じことをなんとなくくり返す日々	2
		子ども優先の生活	1			自分のことは後回しにしている	2
家事と仕事の両立に奮闘する	3	家庭と仕事の両立	3				

[3] 自分に対する課題 (自分らしさを発揮する阻害要因)							
将来に対して不安を抱えている	7	将来への不安	3	思い通りにならない現実と苛立っている	3	思い通りにいかない	2
		家庭と仕事の両立への不安	1			上手くいかない	1
		子どもの成長への不安	1			気持ちを抑える	2
		職場復帰への焦り	1			本当の思いを口にしない	1
		将来を悲観	1			自信がない	2
自分を責めて落ち込む	6	自分を責めてしまう	4	自信が持てない	3	自信を失う	1
		変わらなかった自分が嫌	1			やりたいことがわからない	3
		思い通りにいかず落ち込む	1			理想と現実のギャップに苦しんでいる	2
		イライラした気持ち	5			理想の子育てとのギャップ	1
育児・仕事・家事に追われてイライラしている	5	後ろめたい気持ち	1	忙しくてなかなか行動に移せない	2	行動に移せない	1
		子どもへの罪悪感	1			なかなか前に進めない	1
		夫に対する引け目	1			今の自分のままでいいのか葛藤している	1
		幸せなのは自分だけかもしれない	1			自分の存在意義に悩んでいる	1
自分が楽しむことに引け目や罪悪感がある	4	わかってもほしい	1	言い訳ばかりしている	1	忙しさを言い訳にする	1
		認めてもらいたい	1			やりたかったことへの後悔	1
		どこか満たされない	1			変わることを後悔	1
		自分ばかりが大変	1			今更変わるの無理	1

[4] 人間関係に関する課題							
人に振り回されて疲れている	4	周りに振りまわされる	1	周りに気を使い合わせぎてしまう	2	周りに気を使う	1
		人間関係に疲れる	1			周りに合わせる	1
		周りに気を遣う	1			人と距離感を保つ	1
		育児に翻弄されている	1			家にもこる生活	1
子どもや家族に当たってしまう	4	子どもに怒ってばかり	2	人と距離をとってしまう	2	空気を読む	1
		家族に八つ当たりしてしまう	1			調和を乱すのを避ける	1
		感情が態度に出してしまう	1			人とトラブルになることがある	1
		人にに対して臆病	1			自分の弱みを誰にも見せられない	1
人との関わりに臆病になっている	3	人に傷つけられるのが怖い	1				
		人に傷つけられるのが怖い	1				
		人の感情が怖い	1				

[5] 研修を通して実現したいこと							
自分を変えてみたい (6)	6	自分を変えたい	2	今後の生き方を考えたい	3	今後の生き方を考えたい	2
		日々の生活を変えたい	1			何を大切に生きるか考えたい	1
		自信を持ちたい	1			人生をより楽しみたい	2
		前向きな考えになりたい	1			楽しんでいる姿を家族に見せたい	1
		優しくなりたい	1			仕事も家庭も完璧にこなしたい	1
自分らしさを探求したい	4	自分らしさが知りたい	2	何かの役に立ちたい	1	何の役に立ちたい	1
		自分とは何かを知りたい	1			人と関わりたい	1
		自分を見つめ直す機会にしたい	1			一歩を踏み出したい	1

[6] その他							
人生の節目	4	子どもの自立	2	自分には関係ないと思っていた	1	自分には関係ないと思っていた	1
		新たな職場	1			競争過敏	1
		もうすぐ退職	1			ワクワクしている	1

続く表 23 は、「わたし研究をした結果」についての受講生の語りを分析した結果である。この結果からは、受講前に抱えていた課題を解消・克服している様子や、新たな変化が生まれている様子が読み取れる。

表 23 「わたし研究をした結果」についての受講生の語りの分析結果

[1] 自己課題への対応			46
人間関係の課題を克服した	9	課題を自覚した	7
課題や囚われから解放された	8	自分に対する課題を克服した	6
自分に対する課題を克服するための実践をはじめた	8	特に変化はない	1
心が軽くなった	7		
[2] その他の新たな変化			57
新たなアイデンティティを発見した	20	本心に気づいた	4
ありのままの自分を認め、受け入れた	13	ますます幸せになった	1
自分の気持ちを重視するようになった	7	地域に親近感が湧いた	1
人間関係に変化が生まれた	5	長年使用していた耳栓がいらなくなった	1
感謝が生まれた	5		

大カテゴリー [1] 『自己課題への対応』からは、受講前に抱えていた課題が講座を経たどのように変化したかを読み取ることができる。もっとも多かったのは〈人間関係の課題を克服した〉ことに関する語りである。このカテゴリーからは「心も軽くなって、家族や友人に対しても接し方が変わってきた。」、「人の嫌なところが気にならなくなった。」など、他者への接し方が変わり、これまで抑圧していた自分の気持ちや意思を周囲の人に伝えられるようになった、あるいは、人に対して苛立ちや責める気持ちがなくなったなどの行動変容や意識変容を読み取ることができる。

次に多かったのは、〈課題や囚われから解放された〉ことに関する語りである。このカテゴリーからは「そのままの自分を良しとし、気を張らずに、自然体でいようと決めたとき、あの苦しみが嘘のように消えていきました。」、「忙しさにまぎれて、見過ごしてきた、たくさんの心のモヤモヤやトゲトゲがなくなった。」などの語りで見られるように、これまで抑圧していた感情や、理想、苦しみ、不安、もやもやした気持ちなどのネガティブな感情から自由になっている受講生の姿が見てとれる。これらの感情は、先に示した「研究する前のわたし」の大カテゴリー『自分に対する課題』に対応するものであり、受講生の潜在的可能性を發揮する阻害要因になっていたものと考えられる。この結果から、講座を通して受講生の内的な課題が解消されたことにより、受講生が本来潜在的に持っていた可能性が發揮されやすい状態が生まれていたのではないかと推測される。

これに関連して、「私の心は軽く自由になりました。」「ものごとに対する捉え方が以前よりも穏やかで寛容になった気がしています。」などの語りで構成される〈心が軽くなった〉は、〈課題やとらわれから解放された〉時に合わせて起こった現象と考えられる。その他にも、『自己課題への対応』では、家の片付け、実家の手直し、英語の勉強など、これまで興味がありながらも行動に移せずにいたことに取り組み始める様子や、これまで気づいていなかった課題を自覚して問題の原因を発見している様子を読み取ることができる。

以上の結果から、各自が抱えてきた課題から解放されている様子、あるいはその課題を克服するための具体的な実践を始めている様子がわかる。一方で、〈特に変化はない〉という小カテゴリーがあるように、必ずしも全員が課題を改善したわけではなく、自覚できる変化がなかった受講生も存在することがうかがえた。

大カテゴリー [2] 『その他の新たな変化』からは、講座を受講したことによる受講生の様々な変化がうかがえる。なかでも「自分自身の本質的なもの、今の私を人として作ってきた様々な要素がみえてきた。」「人が面倒くさがったり嫌がったりするようなことを、喜んでできていた自分がいたことを思い出しました。」などの語りに見られるように、自分の新たな一面や長所、好きなこと、大切にしたいこと、実現したいことなどの〈新たなアイデンティティを発見した〉ことに関する語りをもっとも多かった。すなわちこの小カテゴリーは、受講生の潜在していた可能性が見出された様子を表すとも見てとることができるだろう。

次に多かったのは〈ありのままの自分を認め、受け入れた〉ことに関する語りである。「弱い私も、ダメな私も、どんな私も愛すべき私。自分でぎゅうっとしてあげます。」などの語りに代表されるように、受講生が良い面も悪い面も含めたありのままの自分を認め、受容している様子がわかる。また、「『私、なかなか頑張ってきたよな』と素直に思えました。」とあるように、自分のこれまでの人生や頑張りを認める発言も見られた。これらの自己受容は、SAM の実践結果として生まれたものと推測される。その他の変化を表す語りとして、「相手を気にしすぎるところがあったのですが、まずは自分の気持ちはどうであるか、ということを考える」ようになったなど〈自分の気持ちを重視するようになった〉という語りや、家族など身近な人との関係性の向上に関する語り、周囲の人に対する感謝に関する語りなどが挙げられた。

表 24 「わたし研究の結果」小カテゴリーとコード

[1] 自己課題への対応						
回復済みのブックを開きますか?						
人間関係の課題を克服した	9	イライラしなくなった 2 人に悪態を伝えられるようになった 2 他者への接し方が変わった 1 他者に対する見方が変わった 1 人の嫌なところが気にならなくなった 1 人を責めなくなった 1 人からの承認を求めなくなった 1				
	課題や困りから解放された	8	ため込んでいた感情からの解放 1 理想からの解放 1 あるべき姿からの解放 1 苦しみからの解放 1 不安からの解放 1 もやもやした気持ちが解放 1 ぐちゃ不満を手放した 1 心を解き放った 1			
		自分に対する課題を克服するための実践をはじめた	8	家の片付けをはじめた 1 実家の手直しをはじめた 1 英語の勉強をはじめた 1 よりよい環境をつくるための努力を始めた 1 目の前のものを意識するようになった 1 子どもに理想を押しつけなくなった 1 子どもを責めるようになった 1 今まで言えなかったことを人に打ち明けるようになった 1		
			心が軽くなった	7	心が軽くなった 3 心の重しがとれた 1 気持ちに余裕が生まれた 1 穏やかに寛容になった 1 イライラせず楽になった 1	
				課題を自覚した	7	理想と現実のギャップを発見 1 コンプレックスを発見 1 磨りを見るのができていなかった 1 人に合わせすぎていた 1 成功体験の不足 1 悩みを作ったのは自分 1 気持ちを抑える原因を発見 1
					自分に対する課題を克服した	6
特に変化はない						1

[2] その他の新たな変化								
新たなアイデンティティを発見した	20	自分の長所の発見 2 自分の新たな一面を知る 2 一番大切なのは家族だと気づいた 2 自分らしく生きることの大切さを実感 2 人が好きだと気づいた 1 話を聴くのが好きだと気づいた 1 話を聴いてもらえることが嬉しいと気づいた 1 人から認めてもらうことが好きだと気づいた 1 食事づくりが大切だと気づいた 1 あり方が大切だと気づいた 1 自分の中に輝くものがあると気づいた 1 自分の本質が見えてきた 1 やりたいことが明確になった 1 これから何がしたいか見えてきた 1 大切にしたいことが明確になった 1 自分自身のあり方にたどり着いた 1						
		自分の気持ちを重視するようになった	7	自分の気持ちを大切に行動するようになった 6 自分の気持ちを尊重するようになった 1 無意識に自分の心と向き合うようになった 1				
			人間関係に変化が生まれた	5	家族との会話が増えた 1 家族から前向きな反応を得られた 1 周囲の協力を得ることができた 1 なんでも話せる関係ができた 1 地域に知り合いができた 1			
				感謝が生まれた	5	親への感謝 1 地域の人への感謝 1 新たな出会いへの感謝 1 参加できることへの感謝 1 参加してよかった 1		
					本心に気づいた	4	自分の気持ちを確かめる 1 本当の気持ちに気づく 1 気づいていなかった感情を知る 1 本来の自分を思い出す 1	
						ますます幸せになった		1
						地域に親近感が湧いた		1
		長年使用していた耳栓がいらなくなった				1		

ここまで、講座に参加する前の自身の様子を語った「わたし研究する前のわたし」と、講座を経たのちの自身の変化を語った「わたし研究をした結果」の語りの分析結果を概観した。その結果、全体的な傾向として講座開始前に抱えていた受講生の課題が講座を終える頃には解消されている様子や、受講生が課題解消に向けた行動をはじめている様子が見られた。このことから、受講生が第1フェーズにあたる自己教育プログラムを通して自己課題と向き合い、最終的にその課題を改善・解消できていたことが確認できた。加えて、新たなアイデンティティの発見や自己受容、自分の気持ちを尊重するようになる、人間関係が変化するなど、第1フェーズを経た受講生に様々な変化が生まれている様子が確認された。

以上のことから、「第1フェーズを経ることで、受講生のアイデンティティ形成が促進される」という仮説④は、受講生の全体的な傾向として支持されたと結論づけることができる。また、受講生がこれまで自覚していなかった自分の新たな一面を発見している様

子を表した〈新たなアイデンティティを発見した〉という小カテゴリーが生成されたことから、アイデンティティ形成が促進されたことが裏付けられるだろう。

6.1.3. アイデンティティ形成に作用した要因の検討

続いて、第1フェーズのなかで受講生のアイデンティティ形成に作用した要因を検討していきたい。アイデンティティ形成に自己課題の探求が密接に関係していることは先にも述べたとおりである。そこで以下では、受講生が自己教育プログラムを受講するなかで、どのような体験をしたのかを明らかにし、何が受講生のアイデンティティ形成に作用していたのかを特定していく。

《分析方法》

「とよのわたし研究室」を受講生した1期生14名、2期生11名が「研究テーマ発表会」で使用した発表原稿の中から、受講中の自身の様子をふり返った「わたし研究をするなかで」の語りを抽出のうえ、M-GTAを用いた分析を行った⁴⁹。分析テーマは「『わたし研究』をするなかでの受講生の体験」、分析焦点者は「『とよのわたし研究室』の受講生」である。

《結果と考察》

分析の結果、3つの領域、12のカテゴリー、35の概念が生成された(表25)。「わたし研究」をするなかでの受講生の体験をプロセス化し、領域やカテゴリー間の関係を検討した結果を図9に示す。

以下ではまず、概念図のストーリーラインを説明したうえで、各カテゴリーを構成する概念について説明を行う。なお、領域は【】、カテゴリーは『』、概念は〈〉、を用いて表記した。また、調査対象者の語りを引用する場合には「」を用いて表記した。なお、分析結果については、分析焦点者6名や講座に同席したこころ館スタッフ、豊能町職員に提示し、結果が恣意的にならないように努めた。

⁴⁹ M-GTAの手順については第3章第3節第1項を参照。

表 25 M-GTA 概念一覧

領域	カテゴリー	概念	定義	
自己課題を 探求する プロセス	研修に対する不安感	苦手意識	集団で学ぶことなど、研修に関わる苦手意識。	
		緊張	初めての挑戦に対する緊張。	
		抵抗	他者に自分の内情を話すことなど、研修に対する抵抗感。	
	葛藤	ネガティブな感情との葛藤	辛さや情けなさなどの否定的な心情と葛藤すること。	
		他者との比較による葛藤	他の受講生との関わりや比較によって葛藤すること。	
	素の自分	ワークは楽しくもあり苦しい	自分と向き合う過程で楽しさと苦しさの両方を味わうこと。	
		緊張がほぐれる	研修の回数を重ねるなかで緊張がほぐれていくこと。	
	気づき	感情が整理される	研修の回数を重ねるなかで感情が整理されていくこと。	
		とらわれに気づく	過去の失敗や特定の出来事、思い込みなどにとらわれていた自分に気づくこと。	
		理想に縛られている自分に気づく	理想に固執していたことに気づくこと。	
	解放	新たな自分に気づく	これまで自覚していなかった自身の新たな側面を発見すること。	
		相手の立場や気持ちに気づく	家族や職場の同僚等、相手の置かれた状況や心情を理解すること。	
	価値観や捉え方の変化	抑圧していた感情があふれ出す	無自覚に押しさえ込んでいた感情が表出すること。	
		感謝があふれる	身近な人や当たり前の日常に対する感謝が湧き上がること。	
「わたし研究」の 構成要素	SAM	物事の見方が変わる	過去の出来事についての意味づけが変化すること。	
		何事も自分次第だと思うようになる	自分のものの捉え方次第で感じ方が変わること。	
		自分と向き合う	自分の感情や課題を直視すること。	
		自分を客観的に見る	自分自身を感情を挟まずに客観的・俯瞰的に捉えようとする。	
	ワーク	自問自答	自分自身のあり方を問いかけ、自ら答えを導き出そうとする。	
		自己開示	自分の状態や心情について正直にありのまま語る。	
	Being ファシリテーション	ワークに取り組む	「わたし研究」のワークに取り組むこと。	
		課題にチャレンジ	「わたし研究」を通して発見した自己課題を克服しようとする。	
	フィードバック	ファシリテーターからの働きかけ	ファシリテーターからの問いかけや声かけによって受講生の気持ちが動くこと。	
		ファシリテーターからサポートを受ける	ファシリテーターのサポートによって気持ちが整っていくこと。	
	他の受講生からの 影響	傾聴	新たな見方・感情を知る	他の受講生からのフィードバックを通して、これまで気づいていなかった新たな捉え方や感情を知ること。
			自信をもらう	他の受講生からのフィードバックを通して、自信を得ること。
		傾聴	人の本心にふれる	普段はあまり耳にする機会のない、人の本心や心情について聞くこと。
			感化される	他の受講生の変化に気づき、感化され、自らも変わろうとすること。
魅力に着目するようになる			他の受講生の話を聞くなかでその人の魅力や長所に着目するようになること。	
エピソードを自分ごと化する			他の受講生の辛さを自分ごとのように受け取ること。	
安心感	他の受講生と接するなかで、自分だけが不安ではないという安心感を得ること。			
全肯定されている実感	他の受講生から評価なしに傾聴されている実感を持つこと。			

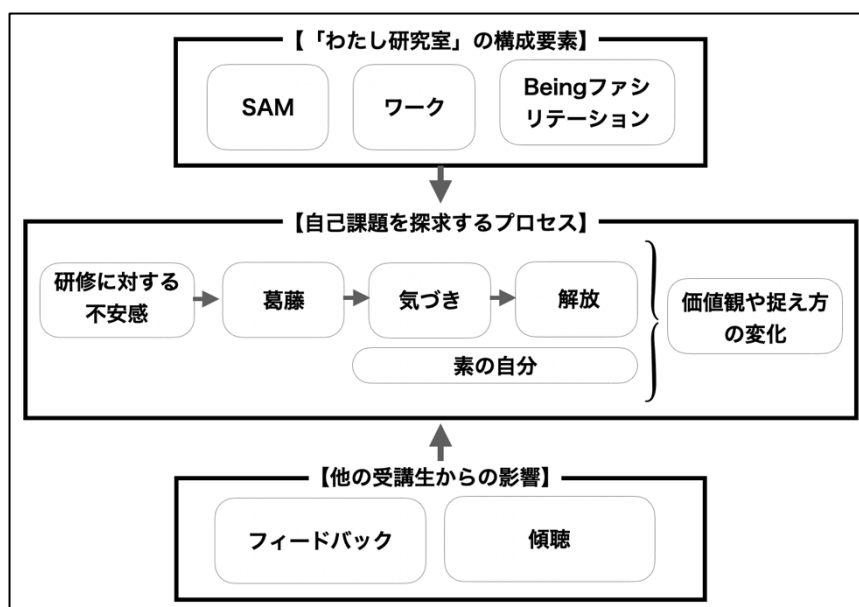


図 9 「わたし研究」をするなかでの受講生の体験（筆者作成）

《ストーリーライン》

概念図から生成したストーリーラインは次の通りである。

講座が始まった当初、『講座に対する不安感』を受講生は抱えていた姿が見られた。また、自分と向き合いあうなかで『葛藤』が生まれている姿もあった。しかし、講座が進むにつれて『素の自分』で参加している受講生の様子がうかがえ、自己課題についても真摯に向き合っていた。また、他の受講生との対話やファシリテーターからの問いかけ、ワークを通じて『気づき』を得ることで、これまでのとらわれや抑圧から自分を『解放』していく姿が見られた。その結果、これまでとは違う『価値観や捉え方の変化』が受講生に起こり、新たなものの見方を手に入れていく様子が確認された。

以上のように、受講生の【自己課題を探求するプロセス】が促進された要因には、次の2点が挙げられる。1点目は、『SAM』や『ワーク』、『Being ファシリテーション』にあげられる【「わたし研究」の構成要素】である。そして2点目は、他の受講生による『傾聴・フィードバックからの影響』や『他の受講生の話を聞いた影響』に挙げられる、【他の受講生からの影響】である。これらの要素は、自己課題の探求を促進した要素であることから、アイデンティティの形成に作用した要素とも位置づけることができるだろう。

《領域ごとの考察》

続いて、【自己課題を探求するプロセス】、【「わたし研究室」の構成要素】、【他の受講生からの影響】の領域ごとの分析結果を記す。

【自己課題を探求するプロセス】

この領域は、『講座に対する不安感』、『葛藤』、『素の自分』、『気づき』、『解放』、『価値観や捉え方の変化』の6つのカテゴリーで構成される。これらのカテゴリーからは、受講生が自己課題を探求するプロセスを知ることができる。

1つ目のカテゴリーである『講座に対する不安感』は、3つの概念で構成される。1つ目は、講座に対する〈苦手意識〉である。「人前で自分のことを話すのがとても苦手です。」「私は、集団というものが得意ではありません。」などの発言に見られるように、受講生は集団で学ぶことに対する苦手意識を持っている様子があった。2つ目は、初めての挑戦に対する〈緊張〉である。「人前で話したことのなかった私は、最初緊張と不安でいっぱいでした」とあるように、他者の前で自分について語るという初めての状況に緊張し、戸

惑う受講生の姿が読み取れる。そして、3 つ目は、他者に自分の内情を話すことに対する〈抵抗〉である。「知らない人たちに自分の内情を話すことに抵抗がありました。」という発言からは、普段人に見せない自分の気持ちを開示することのハードルの高さがうかがえる。以上のことから、受講生が講座初期に抱いた不安感を知ることができる。

さらに、講座が進むにつれ、受講生に様々な『葛藤』が生まれている姿が見られた。この『葛藤』の内容は大きく次の3つに分類される。1 つ目は、辛さや情けなさなどの〈ネガティブな感情との葛藤〉である。「回数を重ねるごとにしんどさを感じることもあり」、「いつも愚痴をこぼしているだけで、成長しない自分が途中から恥ずかしく情けない気持ちになりました」などの発言があるように、自分のなかでのわだかまりを自覚している姿が見てとれる。2 つ目は、他の受講生との関わりや比較によって生まれた〈他者との比較による葛藤〉である。「(他の受講生の皆さんは)回数を重ねるごとにいろんなことに気づかれて、変化されていく様子を見ていて、とても羨ましかったです。」、「『わたしはみんなみたいに上手に伝えられへんわ』とか『こんな事言ったら変かな?笑われるかな?』といった邪念が働いていました。」などの語りからは、他の受講生に対する羨望や比較による自己卑下などのネガティブな感情と葛藤する様子がうかがえる。さらに、講座期間を通じて受講生が経験していたと考えられるのが〈ワークは楽しくもあり苦しい〉という心情である。「毎回のワークは楽しくもあり苦しくもありました。」という発言に代表されるように、新たな自分の一面を発見する楽しさと、これまで直面してこなかった自己課題と対峙する苦しさは、受講生の大半が味わった心情と見なすことができるだろう。

以上のような葛藤は、一方で、受講生を奮起させる刺激にもなっており、のちの意識変容を促す契機になっていたとも推測される。

上で述べたように、楽しさと苦しさの両方が交差する「わたし研究」であるが、次第に受講生の心情に変化が見られるようになっていく。その表れのひとつが、続くカテゴリーの『素の自分』である。本カテゴリーは、講座を重ねるごとに受講生が等身大の自分自身を取り戻していく様子が表れたものであり、2つの概念で構成される。1 つ目は、受講生の気持ちがほぐれていく様子が表れた〈緊張がほぐれる〉である。「回数が進むにつれて、少しずつ緊張がほぐれ、リラックスして話せるようになってきました。」という発言があるように、徐々に講座に慣れ、緊張が和らいだ状態で「わたし研究」に臨む受講生の姿が読み取れる。2 つ目は、自分のなかに潜在していたとらわれやわだかまりなどの気持ちが整理されていく様子が表れた〈感情が整理される〉である。「今までしてこなかった、思

ったことを言葉にして口から出すという作業は、狭いところでこんがらかった感情がほどかれ、すっきりと整頓されていくのです。」とあるように、「わたし研究」を通して自分の気持ちを語ることが、自分の感情について理解を深めることにつながっていたことがわかる。

このような過程のなかで、受講生は様々な『気づき』を得ていく姿が見られた。気づきの内容は大きく4種類に分けられる。1つ目は、過去の失敗や特定の出来事、思い込みなどにとらわれていた自分に対する気づきである。「何だかわからない不安こそ、もっと人生を楽しみたいと思う私の足を引っ張っているものだったのです。」という発言に代表されるように、受講生が自らつくり出していた〈とらわれに気づく〉様子がうかがえる。2つ目は、理想の自分像に支配されてきたことについての気づきである。「『できない自分』がいつもいて、『できる自分』になりたいから、また理想にむけて頑張る。でも、その理想は自分の気持ちに正直な理想ではなく、できない自分を克服するための理想であったのだと気づけた時、肩の荷がおりたような気がしました。」などの発言からは、受講生が〈理想に縛られている自分に気づく〉様子を知ることができる。上記2つの気づきは、自分の成長や可能性の発揮を阻害してきた要因を発見した瞬間とも見なすことができるだろう。続く3点目は、これまで自覚していなかった自分の新たな側面に関する気づきである。「頑張らないと認められないという不安がいつしか、『私はこんなに頑張っているのに』という気持ちに形を変え、人に対して厳しかったり、人を見下して安心する自分がありました。」などの発言からは、〈自分でわかっていない別の自分がいたことに気づく〉様子がわかる。そして、4点目は、家族や職場の同僚等といった相手の置かれた心情・状況に対する気づきである。「『正当』を掲げた自分が周りの人にしんどい思いをさせていた。」とあるように、自己課題を探求するなかで〈相手の立場や気持ちに気づく〉瞬間があったことが読み取れる。

以上のような様々な気づきは、受講生の気持ちを『解放』に導く契機になっていたと考えられる。「わたし研究」をするなかでは、2種類の解放が見られた。ひとつは、無自覚に抑圧していた感情の解放である。「今まで忘れていたことや心の奥底に沈めていたものがどーっと出てきたり、じわじわ滲み出したりしてきました。」という発言にあるように、〈抑圧していた感情があふれ出す〉様子が見て取れる。もうひとつは、感謝による解放である。「気がつくと、日々の子供たちと過ごす時間や、周りの人たちに対しても感謝の気持ちが溢れるようになりました。」とあるように、家族などの身近な人や当たり前の

日常に対して〈感謝があふれる〉様子が見られ、心が解き放たれている受講生の姿が読み取れる。

こうして、気づきを契機に自分を解放した受講生が経験するのは、『価値観や捉え方の変化』である。このカテゴリーでは、「当たり前的事だと思っていたけど、それが私にとってかけがえのない時間で、そして心の安定にもつながっていたのです。」という発言にあるように、過去の出来事に対して、自分にとってより豊かな意味づけができるようになるなどの〈ものごとの見方が変わる〉様子が見てとれた。また、「ちょっとした、気持ちの持ち方で、毎日が楽しくもなり、苦しくもなるのだということを感じることができたと思います。」とあるように、自分の捉え方次第で出来事に対する感じ方が変わることを実感し、〈何事も自分次第だと思うようになる〉姿も見られた。

以上のように、本領域では【自己課題を探求するプロセス】の詳細が明らかになった。M-GTAの結果から、当初不安や葛藤を抱えながら「わたし研究」をはじめた受講生が、楽しさと苦しきの両方を味わいながらも、次第に等身大の姿で講座に参加できるようになっていく様子が読み取れた。また、様々な気づきを契機に自分を解放し、その結果、新たな価値観や物事の捉え方を獲得している姿が確認できた。

【「わたし研究室」の構成要素】

続く領域である【「わたし研究室」の構成要素】は、『SAM』、『ワーク』、『Beingファシリテーション』の3つのカテゴリーで構成される。これらのカテゴリーからは、「わたし研究」の構成要素が受講生のアイデンティティの形成に与えた影響について読み取ることができる。

1つ目のカテゴリーである『SAM』は、受講生がSAMの構成要素であるマインドフルネス、リフレクション、自己開示に取り組む様子が表れたものである。たとえば、これまで直視していなかった自分のなかにある感情や課題と向き合う様子が表れた〈自分と向き合う〉では、「自分と向き合い、見つめ直すことができる貴重な体験でした。」とあるように、受講生がマインドフルネスやリフレクションを実践している様子がわかる。その実践のなかで行われていると考えられるのが、自分自身のあり方を問い直し、自ら答えを導き出そうとする〈自問自答〉である。「なぜ今私はこういう気持ちになったのだろうか、この気持ちを方向転換させるにはどう考えたら良いか?」、「今現在、なんの不満もなく幸せと思っていた毎日が、本当にそうなのかと自問自答する機会をもらえた。」などの語

りからは、普段外に向いている意識を自分に向け直す、マインドフルネスを通して観察した感情をリフレクションにより吟味している様子、その捉え方が本当に適切であるのかを精査する様子が見て取れる。その結果、「不思議とこれまでに見たことがない角度から、『自分』が客観的に見えてきたように感じていました。」「自分の感情を客観視すると、イライラは膨らむのではなく、自然消滅するのを感じました。」とあるように、自分のことを冷静かつ俯瞰的に観察する〈自分を客観的に見る〉態度が生まれていたことが推測できる。こうした発見について、受講生は「今までの自分は結構『ええカッコしい』で肩書きや学歴を気にしたり、結婚して一人前みたいな既成概念にとらわれていたり、好きになれなかった父親の性格にとっても似ている事がわかりました。」などと隠すことなく語っており、SAMにおける〈自己開示〉をしている様子が見てとれた。

2つ目のカテゴリーである『ワーク』は、講座で用いたワークに取り組む様子が表れたものである。本カテゴリーは2つの概念で構成される。1つ目は、「わたし研究」でワークに取り組む様子を表した〈ワークに取り組む〉である。「ワークとして、自分の過去をふり返り、頑張ったことや幸せを感じた時、親との関わりなど、今までの自分について色々見つめ直してきました。」などの語りがその例にあたる。本概念を構成するラベル数は他の概念と比べても多い点から、ワークの実践が受講生にとってとりわけ印象に残るものであったと推測することができる⁵⁰。2つ目は、受講生が「わたし研究」を通して発見した自己課題を克服しようと努める様子を表した〈課題にチャレンジ〉である。「私と違う意見も相手の立場に立って、一旦はそのまま受け入れるようチャレンジするという課題ができました。」などの語りからは、これまで苦手としてきた自分の課題に向き合おうとする受講生の姿が読み取れるだろう。

3つ目のカテゴリーである『Being ファシリテーション』は、「わたし研究」を促進する手法のひとつである Being ファシリテーションが、受講生のアイデンティティ形成に与えた影響について読み取ることができる。このカテゴリーは、次の2つの概念で構成される。1つ目はファシリテーターからの問いかけや声かけがによって受講生の気持ちが動く様子を表す〈ファシリテーターからの働きかけ〉である。「(ファシリテーターから)『本当は人ともっと深く関わりたいんじゃない?』という言葉をもらい、その言葉がきっかけで、涙が止まらなくなりました。」という受講生の語りからは、ファシ

⁵⁰ 一方で、「研究テーマ発表会」での発表を想定した語りであるという性質上、来場者に対してワークについて説明する必要があったことから、結果として出現頻度が多くなったとも推測される。

リテーターの問いかけが契機となり、自分でも気づいていなかった感情が表出している。2つ目の概念は〈ファシリテーターからサポートを受ける〉である。本概念からは、「自分の気持ちを聞いてもらうことで、毎回、気持ちが整理されていくのを感じました」とあるように、ファシリテーターの声がけや傾聴が、受講生の「わたし研究」を深める援助となっていたことが示唆された。

以上のような【「わたし研究」の構成要素】は、受講生が【自己課題を探求するプロセス】を促進する要素として機能していたと考えられる。

《他の受講生からの影響》

3つ目の領域にあたる【他の受講生からの影響】は、『フィードバック』と『傾聴』の2つのカテゴリで構成される。これらのカテゴリからは講座を共にした他の受講生よりもたらされた刺激や影響が表れているものである。

1つ目のカテゴリである『フィードバック』は、自分の話に対して共感的なコメントやメッセージをもらえたことによる影響が表れたものである。本カテゴリは2つの概念で構成される。1つ目は、他の受講生の発言が、当人が気づいていなかった新たなものの見方や感情を知る機会になったことを表す〈新たな見方・感情を知る〉である。「この思いもよらぬ、自分では考えもしなかったこの言葉にハッとしました。」とあるように、他の受講生からのフィードバックは、受講生ひとりでは思い至らなかった新たな視点をもたらすものであったことがうかがえる。2つ目は、他の受講生の発言によって自信がもたらされたことを表す〈自信をもらう〉である。「自信をもらいました」という発言からは、他の受講生からのフィードバックによって、受講生が自分のなかに眠る価値に気づき、自信を得ている様子が見える。

2つ目のカテゴリである『傾聴』は、他の受講生からアドバイスを挟まずに話を聴いてもらえることや、他の受講生の話を聞くことによる影響が表れたものである。本カテゴリは6つの概念で構成される。1つ目は、他の受講生の胸の内を聞くことが印象的だったとする〈人の本心にふれる〉である。「講座の中で、一番印象的だったことは、他の受講生の皆さんの、貴重なお話を聞いたことです。」とあるように、普段あまり耳にする機会のない人の本心や心情などを聞くことが、受講生にとって印象深い体験であったことがうかがえる。2つ目は、他の受講生の変化に感化されている受講生の様子を表した〈感化される〉である。「他の人たちの頑張っている姿に影響されて受講生みんなの前でお弁当

作りを1か月頑張ってみると宣言しました。」、「皆さんの率直で素直なお話を聞くことで、私も落ち着いて、素直に、自分についてじっくり考えられるようになっていった気がします。」などの語りにあるように、他の受講生の努力に刺激を受け、自らも見習おうとする受講生の様子を見ることができるとある。3つ目は、他の受講生の話を聞くなかで、相手の魅力や長所に着目する様子を表した〈他の受講生の魅力に着目するようになる〉である。「受講生のなかには、他の受講生の方たちのことを『しっかりとした考えをもっている。私なんてとてもあんなふうには……』と言っておられましたが、私から見れば、その受講生の方もみなさんと同様、毎回ハッと気づかされるお話をされています。」、「とても素敵な方なのですが、自分では気づかないものなのですね。」といった語りのように、受講生同士が相手に対して好意の目を向け、その人の短所や不足している部分よりも、価値ある部分を認めている様子がうかがえる。4つ目は、他の受講生の話を自分ごとのように聞く受講生の様子を表した〈エピソードを自分ごと化する〉である。「何故、しんどいのか。それは自分ごとだから。かつての自分の経験とその時の気持ちが鮮やかによみがえってきて、置いてきたはずのその時に引き戻されるような感覚になってしまったからです。」とあるように、他の受講生の辛さを過去の自分の経験に照らし合わせ、自分ごとのように受け取る様子が見受けられる。5つ目は、この場に対する〈安心感〉である。この安心感には、大きく次の2種類があると考えられる。ひとつは、「みんなが認めてくれて共感してくれて、『そういう風に思ってもらえるんや。』と、とても大きな安心感」とあるように、他の受講生からの傾聴や共感によって、ありのままの自分を受け入れてもらえていると感じる安心感である。「ここは怖がらずにしゃべっていいとこや。泣いてしまっても大丈夫やろ。」といった発言も見られるように、日常的には他者に見せにくい感情も含め、感じたままの気持ちを素直に表現できている受講生の様子が見てとれる。もうひとつは、「自分と重ねたり、家族のことを考えたり、不安な気持ちなども、みんなと同じような思いを持っているんだなああと安心した。」など、他の受講生と自分との共通点を見出すことで得られる安心感もうかがうことができた。こうした安心感の醸成は、講座の場の心理的安全性を高める要因になったとも推測される。そして6つ目は、他の受講生から自分を評価なしに受け入れてもらえる実感を表した〈全肯定されている実感〉である。「『わたし研究室』は何を話しても、うまく話すことができなくても、耳を傾けてくれ肯定してくれる、どう思われるだろうかと考える必要がなくハードルがない場所でした。」などの語りにあ

るように、受講生はこの場ではどんな自分も肯定してもらえる実感を持っていることが示唆された。この実感が、受講生の自己開示を促進したとも考えることができるだろう。

以上のように、他の受講生からフィードバックをもらう体験や、互いに傾聴をする体験を通して、受講生は多くの刺激を得ている様子が見えてきた。こうした【他の受講生からの影響】は、受講生自身の自己課題の探求を促進する要因に位置づけられるだろう。

《アイデンティティの形成に作用した要因と考察》

ここまで、受講生が「わたし研究」に取り組むなかでどのような体験をしたのかを明らかにすることを通して、受講生が自己課題に向き合い、その課題を改善・解消することを促進した要素について検討した。以上の結果から、自己課題の探求を促進した要素には「わたし研究室」の構成要素である①SAM (マインドフルネス・リフレクション・自己開示)、②ワーク、③Being ファシリテーションと、④他の受講生からのフィードバック、⑤傾聴の5点が確認された。これらの結果から示唆されることは次の3点である。

1 点目は、自己課題の探求を促進するために有用なワークについてである。「わたし研究」に使用したワークには、これまでの人生のなかで「～でなければならない」と自分を縛ってきた規律を発見し、可能性の発揮を阻害してきた要因から自分を解放していくことを目指すものが中心である。このことから、自己課題の探求には、自分のなかにある固定観念を探り解放することができるワークが有用であることが示唆される。

2 点目は、自己課題の探求を促進するための環境要因についてである。上述した自己課題の探求を促進した要因のうち、⑤の傾聴は受講生同士の相互理解を促進しており、それによって生まれる共感・受容によって、自分のありのままを受け止めてもらえているという安心感を生み出していることがわかった。このように、自己課題の探求が促進されやすい環境の創出には、傾聴を通じた安心感の醸成が有効であることが示唆される。

3 点目は、自己受容の有用性についてである。SAM の結果生まれるとされる自己受容は、アイデンティティの形成に重要な役割を果たすことが先行研究においても指摘されており（上村 2007）、SAM は自己課題の探求を促進する要素、そして、自己受容を促進する要素としての2つの側面からアイデンティティの形成に影響していたと推測することができる。

以上のような受講生の自己課題探求に作用した要因が、受講生のアイデンティティ形成に作用した要因であると見なすことができるだろう。

6.2. 検証2（受講生の自利利他の精神の発現に関する検証）

続いて本節では、仮説②の検証として、プロトタイプの第1フェーズを経ることで受講生の自利利他の精神が発現していたかを確認する。そのうえで、その結果に作用した要素について検証1の分析結果を援用しながら検討を行う。

6.2.1. 検証の方法

検証の流れは次の通りである。まず、2018年1月（第1期）／2019年11月（第2期）に実施された「とよのわたし研究室」の「研究テーマ発表会」に参加した受講生（1期生14名、2期生11名）の発表原稿から、講座を通して発見した「これからの自分らしい生き方、叶えたい未来」について語った「わたしの研究テーマ」の箇所を抽出した。さらに、そのテキストを、検証1と同様の分析手法によって分析を行い、受講生の「研究テーマ」の傾向を整理した。そのうえで、検証1で整理した「わたし研究室」を受講する前の受講生の状況（表21）と比較し、自己教育プログラムを通して受講生に人の役に立とうとする気持ちや、地域貢献への意欲などの自利利他の精神が自分の実現したいこととして現れているかを確認した。

6.2.2. 結果と考察

続いて、前項(2)で示した質的データ分析法を参考にして語りの分析を行った。その結果、『新たなアイデンティティで生きていくことに対する希望』、『他者や地域のことを思う気持ち』、『取り組みたいこと①：地域のエンパワーメント⁵¹につながる取り組み』および『取り組みたいこと②：地域の課題解決につながる取り組み』の4つの大カテゴリーが生成された（表26）。

⁵¹ ここでいうエンパワーメントは、「元気にすること」、「力を引き出すこと」（安梅 2008：7）の意味合いで用いる。

表 26 「わたしの研究テーマ」についての受講生の語りの分析結果

[1] 新たなアイデンティティで生きていくことに対する希望		39
自分を楽しむ	11	周りに流されず主体的に生きる
自分らしく生きる	5	資格習得
心豊かで丁寧な暮らしの実現	4	身辺整理
他者の役にたつことが自分の喜び	5	人して成長する
気持ちを表現する	4	過去にとらわれない
できることから始める	3	謙虚に生きる
[2] 他者や地域のことを思う気持ち		58
周りの人や地域で暮らす人の役に立ちたい・応援したい	15	他者の立場に立って話を聴ける人になりたい
家族を幸せにしたい	10	地域で暮らす人の笑顔を増やしたい
人や地域とつながりを育みたい	6	自分が学んだことを地域で伝えていきたい
周りの人や地域で暮らす人の心に寄り添いたい	5	どんな人にも抛り所があってほしい
自分の特技を地域で活かしていきたい	5	子どもにいきいきと生きてほしい
共に学んだ仲間の夢の実現を手助けしたい	5	
[3] 取り組みたいこと①：地域のエンパワーメントにつながる取組		16
地域で暮らす人が活躍できる場づくり	6	地域の魅力を発信
地域で暮らす人の可能性を拓く手助け	4	地域で暮らす人を笑顔にする
地域アイデンティティの形成	4	
[4] 取り組みたいこと②：地域の課題解決につながる取組		14
生きづらさを抱える人の支援	5	地域課題の相談
社会的孤立の解消	2	空き家問題の解決
ボランティア活動	2	地域の安心・安全をつくる
子育て世代の女性の支援	2	

大カテゴリー [1] の『新たなアイデンティティで生きていくことに対する希望』からは、「まずは自分がワクワクすることを楽しめることが大前提」、「わたしらしく楽しんで過ごしている姿をこそ、大切な子どもたちに見せたいと思います」など、楽しく、自分らしく生きることを願う受講生の様子が読み取れる。そのうえで、「誰かの役に立てるといふ喜び」を感じて生きたい、地域の人が幸せに暮らしていける手助けをしたいなど、〈他者の役に立つことが自分の喜び〉であるという新たに発見したアイデンティティを活かして生きていくことを求める様子もうかがえる。その他にも、〈心豊かで丁寧な暮らしの実現〉を求める様子や、自分の感情や思いなどの〈気持ちを表現する〉ことを求める様子、自分の身の丈に合うことを【できることからコツコツと】始めていきたいとする小カテゴリーなどが見られた。

大カテゴリー [2] の『他者や地域のことを思う気持ち』は、4つの大カテゴリーのなかでもっともコードが集中したカテゴリーである。なかでも目立ったのが小カテゴリー〈周りの人や地域で暮らす人の役に立ちたい・応援したい〉であった。このカテゴリーは、【人を助けたい】、【人のためになることがしたい】、【人の役に立ちたい】および

【頑張っている人を応援したい】という4種類のコードから成っており、地域の人や職場の人、家族、友人など誰かのために行動したいと願う受講生が多いことが確認できた。次に多かった小カテゴリーは〈家族を幸せにしたい〉であり、「家族にハッピーになってもらうことが、今の自分が一番求めていることだと思ようになりました。」、「大切な家族の為に、家を最高に居心地のいい場所にする。」など、家族の幸せに貢献したいと願う受講生の様子がわかる。その他にも、人や地域とのつながりを求める様子や、自分の特技を活かして地域と関わろうとする様子、共に学んだ受講生の夢を実現する手助けを希望する様子などが明らかになった。

大カテゴリー [3] [4] は、今後受講生が取り組みたいこととして挙がっていたもののなかでも、将来的に『地域のエンパワーメントにつながる取り組み』および『地域の課題解決につながる取り組み』として見なすことができるものが集まったカテゴリーである。『地域のエンパワーメントにつながる取り組み』には、空き家となった実家や職場のコミュニティスペースなどを活用した〈地域で暮らす人が活躍できる場づくり〉、傾聴などを通じた〈地域で暮らす人の可能性を拓く手助け〉、豊能町ならではの特色を活かし、より魅力的な地域にすることをめざす〈地域アイデンティティの形成〉などが挙げられた。また、『地域の課題解決につながる取り組み』には、障害や生きづらさなどの何かしらの困難を抱える人を対象にした〈生きづらさを抱える人の支援〉、地域の人々の居場所づくりを通じた〈社会的孤立の解消〉、〈ボランティア活動〉、〈子育て世代の女性の応援〉などが挙げられた。

前章第1節に示したように、豊能町では地域の活動への参加意向のある住民が減少することで、地域コミュニティの弱体化、各世代の孤立化や地域の治安力、福祉力、教育力の低下などが懸念されている。上記に示された「わたしの研究テーマ」は、その実現によって既存の地域課題を解消する取り組みにも発展しうることが期待される。

以上、「わたしの研究テーマ」に関する語りの分析から、自己教育プログラムを通して受講生が発見した「研究テーマ」の全体的な傾向を整理した。その結果、4つの大カテゴリーが生成され、そのうち [2] 『他者や地域のことを思う気持ち』、 [3] 『取り組みたいこと①：地域のエンパワーメントにつながる取り組み』および [4] 『取り組みたいこと②：地域の課題解決につながる取り組み』の3つは、他者や地域の役に立つことを希望する受講生の傾向が表れたカテゴリーとなった。

また、大カテゴリー [1] 『新たなアイデンティティで生きていくことに対する希望』のなかにも、〈他者の役に立つことが自分の喜び〉という自利利他の精神を表す小カテゴリーが生まれていた。割合を確認したところ、生成された 127 のコードのうち、全体の 73% にあたる 93 のコードが自利利他の精神に関連するものであった。受講以前の受講生の状況を確認するために「わたし研究をする前のわたし」の分析結果 (表 21) を見返すと、〈家族中心の生活を送っている〉〈自分のことは後回しにしている〉など自分よりも他者を優先した生活を送っている様子が見てとれ、利他的な行為は以前から実践していることがわかる。ただし、その行為には〈身を粉にして頑張らなければならない〉〈忙しさに疲れ果てている〉などの消耗感や自己犠牲感が伴われ、自利利他の精神に関連する要素は小カテゴリー〈何かの役に立ちたい〉を除いて見受けられなかった。

このように、「わたし研究をする前のわたし」と「わたし研究のテーマ」の分析結果と比べると、講座を通して能動的に他者や地域の役に立とうとする意識が表出しており、受講生の自利利他の精神が顕現していることが確認できた。よって、「第 1 フェーズを経ることで、受講生の自利利他の精神が発言する」という仮説②は概ね支持されたと結論づけることができるだろう。一部の結果ではなく全体の傾向として自利利他の精神が発現していることから、自利利他の精神は、万人が本来的に持つ潜在的可能性のひとつとも考えることができるのではないだろうか。

6.2.3. 自利利他の精神が発現した要因の検討

では、そうした自利利他の精神が芽生えた要因とは何であったのか。推測される要因について、本研究では次の 3 点を挙げる。

1 つ目に考えられる要因は、自己課題を解決したことである。「これまでは自分の生活のことでいっぱいだった私ですが、わたしが変われば、地域が変わる！豊能町で自分らしく生きる人を増やすお手伝いを、少しずつですがやっていきたいと思います。」という受講生の発言もあるように、自分の意識を占めてきた自己課題を手放したことで、それまでの自分の生活で精一杯だった状態から解放され、他者や地域に目が向く余裕ができたことが推測される。注目すべき点は、上述した「わたし研究をする前のわたし」からもわかるように、受講生は自己教育プログラムに参加する以前から家族や身近な人に気を配り、他者を優先する利他的な生活を送っていたことである。ただし、その行為は母親や妻という役割規範の意識に基づく「やるべきこと」「やって当たり前のこと」であり、

上手くこなせない時には自分を責める、あるいは「なんでわたしばかり」という苛立ちが生まれるなど、自己犠牲を伴って消耗している様子が見られた。このようなわだかまりが募っている時に、利他的な行動を行うことはできても、自利利他の精神を発露することは困難であろう。検証1で示した「『わたし研究』をするなかでの受講生の体験」(図10)を参照すると、受講生は「わたし研究」を通して自己内課題を探求するなかで、〈相手の立場や気持ちに気づく〉瞬間があったことがわかる。そして、他者理解が進んだ結果、身近な人に対する感謝があふれ出し、人に対する捉え方が変化している様子がうかがえた。このことから、これまで抱えていた自己課題、とりわけ人間関係に関する課題を解消したことで、それまで義務的に行っていた利他的な行動を今度は自分の喜びとして能動的に行えるようになったと推測される。

2点目に考えられる要因は、自己受容に紐付いた他者受容の高まりである。自利利他の精神に近接する概念のひとつに挙げられるのが、自分とは異なる考えを持つ他者を受け容れる「他者受容」(上村 2007: 133)である。吉田・澤野・服部(1992)によって作成された「自己・他者受容尺度」からも読み取れるように、他者受容の度合いが高い人は、他者の役に立つことをするのが喜びになる、他人のために何かする時に見返りを期待せず振舞うことができるなど、自利利他の精神に共通する特徴を持っていることがわかっている⁵²。受講生の様子をふり返ると、「意見の対立があった時、相手の立場に立って一旦はそのまま受け入れてみるようにすると、今まで見えていなかった、相手の人の動きが見えるようになりました。」、「やっとなりのままの自分を認め自己受容が出来るようになり、ありのままの子供達を受け入れられるようになりました。『イヤイヤ!』と言う娘を『なんて可愛いんだろう。』とさえ思えるようになりました。」などの他者受容を表す語りが見られることや、前項で分析した「『わたし研究』をするなかでの受講生の体験」において〈相手の立場や気持ちに気づく〉という小グループが生成されていることから、全体的な傾向として他者受容が生まれている様子がうかがえる。

さらに、こうした他者受容が促進された要因として、多くの先行研究から他者受容は自己受容と正の相関関係があることがわかっており(Berger 1952)、実際に「わたし研究をした結果」にも〈ありのままの自分を認め、受け入れた〉という自己受容を表すカテゴリ

⁵² 他者受容尺度の指標のひとつである「たとえよく知らない人たちのためでも、ちょっとした親切をするのが楽しい」、逆転項目の「他人があとで何か良いことをしてくれるのでなければ、他人のために何かすることにはあまり利点があるとは思わない」がこの特徴を示している。

リーが生成されていた。以上を踏まえると、「わたし研究」を通して受講生に自己受容が起り、自己受容と正の相関があるとされる他者受容も高まっていったことで、自利利他の精神の発現へと至ったことが推測されよう。

そして、3点目に考えられる要因は、人が意識変容していく過程に立ち会うことの影響である。本講座では、人がこれまで語ってこなかった本音を打ち明ける瞬間や、無自覚だった本心に気がつく瞬間など、人の意識変容が起こる瞬間に立ち会う場面がしばしばあった。受講生の「みなさんと一緒に『わたし研究室』に参加していくうちに、一緒に参加している方たちのいろいろな思いを聞いたり、『わたし研究室』の回数をかさねていくたびに変化していく考え方や体調などいい方向へ変化する様子、表情などを見たりすることができました。そしてみなさんが変化していく姿をみることで、とても貴重な体験をさせていただいていると気づきました。」「講座に参加し、色んな方の話を聞くことは、大変刺激になり、考えさせられることも多かったです。」といった語りにもあるように、人の変容を目撃する体験は、受講生にとって刺激であり、本講座に参加する醍醐味でもあったことが推測される。

実際の現場においても、ひとりの受講生に気づきが起こる瞬間には、それをまわりで見守る他の受講生に共感・感動が広がる様子が見られ、まさに自利利他の定義である「自分の幸せではなく、他人の幸せにも目を向ける」（田中 2018：3）を体現していたことがうかがえた。このように、受講生は講座を通して人が意識変容する場面を何度も目撃し、その変化を自分ごとのように喜びに感じていく体験を積み重ねたと推測される。そうした自利利他を体感する体験が、受講生自身のなかにあった自利利他の精神を発現する機会になっていたとも考えることができるだろう。

以上の考察を整理すると、本社会実験を通して自利利他の精神が発現した過程には、①可能性の発揮を阻害する要因である自己課題と向き合い、②その課題から解放されることで、③自己受容が生まれ、さらに④相関的に他者受容が高まるという4つの段階があったことが示唆された（図10）。

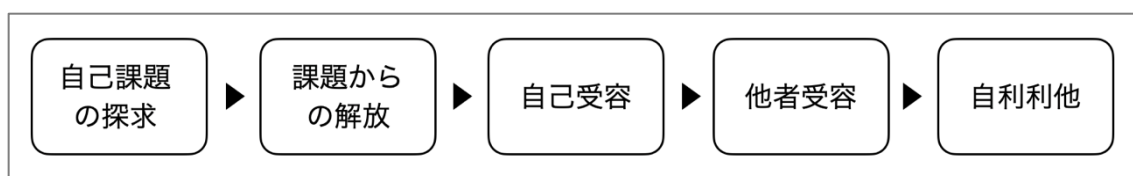


図10 受講生の自利利他の精神が発現するまでの過程（筆者作成）

同時に、他者の意識変容に立ち会うことを通して、他者の成長や幸せを自分ごとのように喜ぶ体験を何度も行ったことも、自利利他の精神の発現に寄与していたと推測される。以上のことから、自己教育プログラムに以上の4段階を含めること、そして意識変容が起こる瞬間を受講生同士が共有できる場づくりを行うことで、恣意的な方向づけを行わずとも自然に自利利他の精神が発現し、他者や地域に役立つことを志向した行動が生まれやすくなると推測される。

6.3. 検証3（相互扶助の醸成に関する検証）

続いて本節では、仮説③の検証として、プロトタイプの第2フェーズにあたる伴走支援を経ることで、住民同士に相互扶助の関係性が生まれていたかを確認する。そのうえで、その結果に作用した要因についての考察を行う。

6.3.1. 検証の方法

仮説③は、ミャンマーでのフィールド調査の結果に示された、心の開発^{かいほつ}を経験した村人が 開発僧^{かいほつ} や他の村人と共に働くことを通して相互扶助の関係性を築き、その関係性を土台にして地域の将来を考えて行動する「主体的に動く次世代」として活動している様子に基づいて設定されたものである。そこで、まず、仮説③を検証するにあたり、第3章第4節第2項（表6）に示したM-GTAの結果に基づき、相互扶助の関係性の指標を定めることとする。

M-GTA を通して生成されたカテゴリーのうち、相互扶助の関係性を表していると位置づけられるのが『支え合い、助け合う関係性』である。本カテゴリーは、開発僧^{かいほつ} が運営する学校を卒業した子どもたちが主体的にネットワークを形成している様子を示した〈卒業生のネットワーク〉、開発僧^{かいほつ} と村人、あるいは村人同士が協力して村の行事に取り組んでいる様子を示した〈関係性はとても深い〉、そして、他の地域にも思いやりの輪が広がる様子を示した〈国や地域を超えて助け合う〉の3つの概念で構成されている。これらの概念を日本での地域づくり実践を想定して解釈し直し、相互扶助の関係性を示す指標として以下に示す。

- ①受講生同士がネットワークを形成している。
- ②受講生同士が協働して地域活動を行っている。
- ③受講生が地域内外の人や団体と協働して地域活動を行っている。

それぞれの指標について、①は〈卒業生のネットワーク〉、②は〈関係性はとても深い〉、そして③は〈国や地域を超えて助け合う〉の概念を参考に生成した。

以下では、①～③のそれぞれの指標に相当する事象が伴走支援後に生まれていたかについて、事例と照合しながら確認していく。なお、以下に示す事例は、受講生本人や自治体職員・周辺の関係者から提供された情報に基づくものである。

6.3.2. 結果と考察

①受講生同士のネットワーク形成

まずは、1つ目の指標にあたる、受講生同士がネットワークを形成していたかについて確認していく。受講生同士のネットワークを象徴するものには、SNSグループと市民団体の2点があげられる。

1点目は、「とよのわたし研究室」受講後にすべての受講生で構成される、1期生・2期生合同のSNSグループが立ち上がったことである。本グループは、有志の1期生が呼びかけて立ち上がったものであり、「とよのわたし研究室」を修了したすべての受講生が加入できるグループである。現在は、各自が取り組む活動やイベントの告知など、気軽な連絡網として活用されている。受講生からは「お知らせがきて読み流す時もあるけれど、気が向いたら反応することもある。SNSグループ独特の、変な気の遣い方をしなくていいので気楽」、「返事とかしなくても、そのまま許してもらえているような、大きく認めてもらっているような気がする。『返事せえへんかったらどう思ったはるかなあ』とか、社交辞令のようなものが必要ない」、「いい距離感」などの声があり、無理なく関係性を保つことができる、ゆるやかなネットワークが形成されている様子がうかがえた。また、新型コロナウイルス感染症が流行し、各地でトイレットペーパー類が売り切れた際には、SNSグループ上で予備のある者が困っているメンバーに提供を申し出るなど、非常時のセーフティネットとしても機能する可能性がうかがえた。

2点目のネットワークにあげられるのが、第1期終了後、有志の受講生により発足した市民団体〈とよのわたし研究室〉⁵³である。本団体は、「とよので暮らす人たちのしあわせサポーター」を「研究テーマ」に掲げた1期生のMを中心に、2019年8月に立ち上がったものである。Mは「講座終了後も1期生で集うことが増えるなかで、『何か豊能町の

⁵³ 豊能町が主催する「とよのわたし研究室」の意思を引き継いでいきたい、という思いから、同名の団体名を踏襲した。

お役に立てることができたら』という思いと、一緒に学んだ仲間の“心の拠り所”をつくりたい。」(URL19)という思いから、志を同じくするメンバーの協力を得て、市民団体設立に踏み切った。現在は、活動を通して〈自分らしく幸せに生きる人でいっぱいの豊能町〉を実現することを目指し、①豊能町が主催した「とよのわたし研究室」受講生のプラットフォームとして各受講生の「研究テーマ」の実現を応援すること、②「自分らしき診断」を豊能町民に届けることの2点を活動の中核としている。市民団体の運営は、有志の受講生が自発的に行うようになり、現在は自治体職員や2期生を含めた受講生が会員として登録している。また、会員には登録していないものの、不定期に活動に参加する受講生もいることから、実質的にはほとんどの受講生が市民団体の活動に参加していることとなる。

以上のことから、「とよのわたし研究室」の受講生同士がネットワークを形成している様子が確認され、指標①を満たしていることがわかった。

②受講生同士の協働による地域活動の創発

続いて、2つ目の指標にあたる、受講生同士が協働して地域活動を行っているかについて確認していく。この点は、上述した市民団体〈とよのわたし研究室〉の活動内容から示すことができる。市民団体では、豊能町で暮らす人々が自分らしく幸せに生きることを応援する活動を行っており、その一貫として地域のマルシェなどで「自分らしき診断」とい

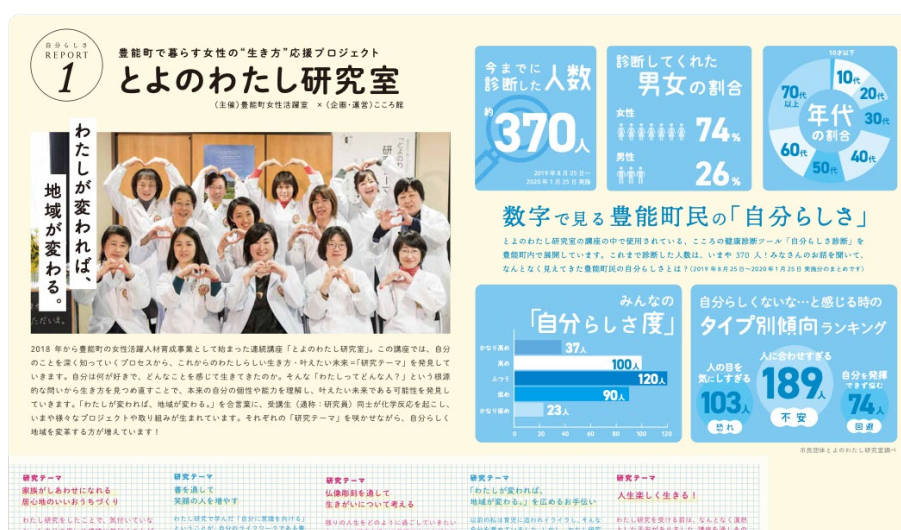


図 11 「自分らしき診断」診断結果の統計

(豊能町発行「自分らしき REPORT 2019-2020」より)

う出張診断を実施してきた。2019年度には、地域で開催されるマルシェ等のイベントや地域の社会福祉法人にて「自分らしさ診断」の出展・ワークショップの実施を行い、5ヶ月で約370名の豊能町民に「自分らしさ診断」を提供するという実績を生み出している。

こうした診断活動は、高齢者などの地域住民と交流する機会にもなっており、住民の孤立予防にも役立っていると考えられる。また、今後は子ども向けの診断開発を企画しており、子どものアイデンティティ形成を促進する教育活動へと広がりを見せる可能性を秘めている。以上の様子から、「とよのわたし研究室」の受講生同士が協働して地域活動を行っていることが確認され、指標②を満たしていると判断する。

③地域内外の主体や団体との協働による地域活動の創発

最後に、3つ目の指標である、受講生が地域内外の主体や団体と協働して地域活動を行っているかについて確認する。

上述の市民団体〈とよのわたし研究室〉は、団体設立に際しては、豊能町が実施する地域活動支援事業「トヨノノドリーム」の支援対象に採択され、町の助成金や自治体職員の助言等を活用しながら組織化を行っていた。組織化にあたっては、地域活性プロジェクトに多数携わる社会起業家やこころ館を含む中間支援団体が伴走し、活動が具現化するようサポートを行っている。

市民団体メンバーは、そうした支援を受けるにとどまらず、自ら積極的に地域内のイベントに足を運び、外部団体とのつながりを開拓していった。また、地域内外のプロジェクトに詳しい社会起業家がコーディネーター役として関わったことで、紹介によるつながりも生まれ、地域で活動を展開していく足がかりとなった。

そうした活動を重ねるなかで、地域内のマルシェに定期的に招待されるようになった他、地域の社会福祉法人や他団体との協働により「頑張っているお母さんたちを笑顔にする」ことを目指した「MothersSmile プロジェクト」が発足するなど、コラボレーションによる新たな企画も創出している。さらに、2019年11月には能勢電鉄沿線地域（川西市、猪名川町、豊能町、能勢町）の関係者が運営する芸術祭「のせでんアトライン」から声がかかり、地域外の人々に「自分らしさ診断」を展開する機会にも恵まれた。この他にも、こころ館が企業研修を担当してきた京都企業との協働による、地域の特産物を使った加工品の共同開発の企画が立ち上がるなど、地域外とのつながりも増加しつつある。

そうした協働を生み出しているのは、市民団体〈とよのわたし研究室〉だけではない。ある受講生は、研究テーマ発表会に来訪していた地域外の会社員とつながり、その縁を活かして地域活性化に関わる活動の運営方法について学んでいるとのことであった。

以上のように、「とよのわたし研究室」の受講生は地域内外の主体や団体と協働して地域活動を行っている様子が確認されたため、指標③は満たされているものと判断する。

このように相互扶助の関係性の指標①～③のすべてが満たされていたことを踏まえ、「第2フェーズを経ることで、受講生同士に相互扶助の関係性が生まれる」という仮説③は概ね支持されたと結論づける。

6.3.3. 相互扶助の関係性を醸成した要因の検討

以上のような相互扶助の関係性が醸成された要因として考えられるのが次の3つの要素である。1つ目に挙げられるのは、第1フェーズで醸成された自利利他の精神である。第3章で調査したミャンマーの地域開発の事例においては、心の^{かいほう}開発を通して醸成された自利利他の精神、そして村人同士が日常的に支え合い助け合う地域風土を基盤に、相互扶助の関係性が築かれている様子がかがえた。「とよのわたし研究室」の事例においても、第1フェーズを通して自利利他の精神が発現していることが確認されており、そのような他者の役に立ちたいと思う気持ちを持つ者同士が関わり合うことで、相互扶助の関係性に発展しやすくなったと推測される。

2つ目に考えられる要因は、第1フェーズの時点で受講生同士に信頼関係が構築されていたことである。本節第1項にも示されたように(図10)、自己教育プログラムを通して普段ほとんど聴く機会のない互いの人生観や自己課題などを共有するなかで、受講生の相互理解が促進されたと考えられる。また、傾聴・フィードバックを通して共感に基づく安心安全な関係性が生まれている様子もあり、これらの相互理解と共感・安心安全な関係性が、受講生同士の信頼関係を構築したことが推測される。この信頼関係があることで、「わたしの研究テーマ」(表26)にも表されるように、〈共に学んだ仲間の夢の実現を手助けしたい〉という気持ちが芽生え、やはり相互扶助の関係性が生まれやすくなったと考えられる。

そして、3つ目に考えられる要因は、第2フェーズを通して受講生同士が協力し合う場としてのプラットフォームが創出されたことである。第1フェーズで自利利他の精神が発現し信頼関係が醸成された受講生であるが、この時点では相互扶助の関係性には発展しな

かった。その後、第2フェーズの伴走ワークショップにて偶発的に市民団体の構想が生まれたことにより、受講生同士の協力を必要とする機会が生まれ、活動を通して相互扶助の関係性が醸成されていったと推測することができる。

以上の考察から、地域づくりにおいて相互扶助の関係性が醸成されやすくなる要件として、①住民に自利利他の精神が発現していること、②住民同士の信頼関係が構築されていること、そして③住民同士の協力を必要とする場を創出することの3点があるとの示唆を得ることができた。

6.4. 検証4（内発的イノベーションに関する検証）

続いて本節では、仮説④を検証するために、プロトタイプ第1・2フェーズを経ることで、内発的イノベーションが創発し、地域を担う人材や地域活性化につながる事業などの新たな価値が創出されていたかを確認する。そのうえで、その結果に作用した要素についての検討を行う。

6.4.1. 検証の方法

プロトタイプでは、可能性を発揮することで地域に生まれる新たな価値の例として、地域を担う人材の創出と、事業創出の2点が示された。以下では、これらに当てはまる事象が地域づくりを通して生まれていたかについて、事例と照合しながら確認していく。なお、ここでいう「地域を担う人材」とは、地域活性を目的とした活動を展開する人のみならず、本人が意図せずとも、結果的に地域に何かしらの価値を提供する人を含むものとする。また、「事業」とは、何らかの経済活動が発生する活動を指す。

6.4.2. 結果と考察

《地域を担う人材の創出》

まずは、1つ目の指標にあたる、地域を担う人材が創出されていたかについて確認していく。地域活動をはじめた事例として代表的なものは、先に述べた市民団体〈とよのわたし研究室〉があげられる。さらに、一部の受講生は、次年度以降の「とよのわたし研究室」の運営サポートにも関わっており、これまで学び手だった受講生が地域づくりに関わる人材へと立場を変化させている様子が見受けられる。

この他にも、新たな仕事を始めた人や、職場復帰を果たした人、より自分らしく働ける環境に転職した人など、仕事に関わる変化があった人がいた。これは、潜在していた地域住民の労働力が顕在化した例、あるいはこれまで以上に能力を発揮して働く住民が増えた例と見なすこともでき、地域の経済活動を支える労働人口の増加に寄与したとも考えることができるだろう。

自身の趣味や特技を活かして身近な人を喜ばせていく人もまた、地域を担う人材と見なすことができるだろう。受講生のなかには、「とよのわたし研究室」受講後、長年続けてきた書道の作品を初めて展示会に出展した人や、自身の特技である陶芸や彫刻の技を活かし、作品を友人に贈呈したり、友人向けの体験教室を開いたりする人がいた。これらは、一見すれば地域活性とは直接関係のない変化であるが、これまで自分だけで楽しんでいた趣味を他者と分かち合うようになるという行動変容は、地域に暮らす他者に新たな刺激をもたらしたという点で、自身の可能性を地域に活かしていると見なすことができるだろう。その他にも、家族との時間をより豊かに過ごすようになった人や、職場で他者の助けになれるよう行動する人など、他者との関係性のなかで自分の可能性を活かそうとする動きが見られた。

また、連続講座終了後に実施した伴走講座では、地域住民の居場所づくりや、発達障害児の支援に関わる活動など、受講生同士の「研究テーマ」から派生して地域で取り組んでみたい新たな活動案が生まれており、現時点ではアイデア段階であるものの、今後地域の課題解決や活性化につながる取り組みが生まれる可能性が示唆される。

以上のように、受講生は様々なかたちで地域を担う人材へと発展していることがわかる。なお、受講生のなかには、以前から地域活動や職場等で地域に関わってきた者も複数名おり、彼女たちは「とよのわたし研究室」を通して生まれたつながりを自身の活動にも活かしている様子が見られた。

《事業創出》

続いて、2 つ目の指標にあたる、事業が創出していたかについて確認していく。この指標に相当する事象として、ここでは2 つの事例を取り上げたい。

1 つ目は、個人事業主として起業した受講生の例である。彼女は「とよのわたし研究室」に参加する以前より資格取得と起業を目指しており、講座を通して、なぜその事業に取り組みたいかという起業の動機を自身の原体験と結びつけて明確化している様子が見られた。

そして、受講期間中に個人事業主として起業し、現在は豊能町を拠点に、母親のための「ものと心の片付け」をテーマにした整理収納に関する事業を展開している。

2つ目は、両親が亡くなり空き家となった実家をリフォームし、地域の人のための貸しスペースにした受講生の例である。彼女もまた、空き家活用の構想は「とよのわたし研究室」に参加する以前から持っており、講座を通してその構想を実現するための一歩を踏み出した。その結果、家族や周囲の協力を得ながら自らの手でリフォームを遂行し、現在は地域で新しいことに挑戦しようとする人に向けて、貸しスペース事業を行っている。このプロジェクトは、空き家活用という地域の課題解決にも寄与するものであり、地域発展の一助となると見なすことができるだろう。

以上の結果から、「個人の内発的発展」に基づく地域づくりを通して、地域を担う人材の創出と事業創出などの新たな価値が豊能町に生まれている様子が確認された。

ここまで見たように、豊能町の事例からは、住民が地域活動に参画する様子や、その支援のために地域外から豊能町に関わる人々が集まっている様子、また受講生同士に「互酬性と信頼性」を伴う「個人間のつながり」が生まれている様子が確認されており、本地域づくりを通じた活動人口・関係人口の増加、そして社会関係資本の醸成が看取できる。

上記のような、受講生から生まれたプロジェクトの事例は、「とよのわたし研究室」の取り組みとともに豊能町が発行した令和元年度女性活躍支援事業報告書「自分らしさ REPORT 2019-2020」(図 12)に掲載されている。

自分らしさ REPORT 2019-2020 の一部を構成する記事の概要を以下に示す。

- 2 市民団体とよのわたし研究室**
 - 豊能で暮らす人たちのしあわせサポーター
 - 私たちが提供しているサービスは、自分らしさ研究室内のメンバーが中心となって提供している。月一回の定例会を行っている。市民団体関係のきっかけは「とよのわたし研究室のしあわせサポーター」というわたしの研究テーマをメンバーがサポートしてくれたこと。オンラインで実施した。今の活動が成果のもの、全てメンバーがいてくれたおかげです。今度は、私を交えてオンラインの活動テーマを始め、参加者のみなさんが「自分らしくキラキラ輝く」ためのお手伝いをしていきます。
- 3 念願の整理収納アドバイザーに**
 - とよのわたし研究室を支援中に、整理収納アドバイザーの資格を取得しました。現在は自宅で定期的なお片づけ講座や、個人での片づけアドバイスを通して、自分らしさや家族との時間を大切にしたい暮らしをご提案しています。その中でも、整理収納アドバイザーのボランティア、月片づけ講座の仕事を執筆するライターとしても活動中です。気軽に楽しく片づけをしてみたい方は SNS のフォローをお願いします。
- 4 地域で頑張る人を応援する場づくり**
 - 2019年11月から地域交流スペース「心まえる縁起 En-GAWA」を運営する。自分の研究テーマである「地域で頑張る人を応援する場づくり」を行っています。
 - 現在は、とよのわたし研究室の自分らしさ研究ワークショップを開催し、週1回約10名が地域活動を実践したりと、様々な地域活動が生まれています。これらからも多くの声にこの場を知ってもらい「ここにあれば何が」と驚いていただける場を作りたいと考えています。
- 5 空き家をプチDIY! 集いのスペースに大変身**
 - もうすぐ50才！(空想)になってしまった実家を活用して、人生後に活かしたいという思いが50才を目前にワクワクと湧き上がってきました。そんなタイミングで参加したわたし研究室、仲間もたくさんあって、実家の空家1軒に思いがけました。おかげで10人程度が集えるスペース「maishu」がとよのわたし研究室になりました。思いがけずワクワクもあり、電気も付くあり、経費も安く済ませました。他にも活動できる場所、自分も生き生き、周りも生き生きできる場所になればと思っています。
- 自分らしさ診断出張します**
 - 自分らしさ診断出張します。これまでマザーズ会イベント開催や、講座を受けたワークショップなどを通じて、自分らしさを診断し、自分らしさを活かすためのヒントを伝えています。自分らしさを活かすためのヒントを伝えています。自分らしさを活かすためのヒントを伝えています。

47都道府県 大阪府 幸福度ランキング 31位

順位	都道府県	順位	都道府県
1位	愛知県	45位	東京都
2位	熊本県	46位	岩手県
3位	熊本県	47位	秋田県

図 12 豊能町発行「自分らしさ REPORT 2019-2020」より

以上、本章では、冒頭に示した仮説を検証することを通して、第3章第5節に示した「個人の内発的発展」を促進する自己教育を基礎とした地域づくりのプロトタイプの検証を行った。その結果、自己教育プログラムを通して、受講生のアイデンティティ形成と自利利他の精神の発現が促進され、伴走支援後には受講生同士や地域内外の主体、団体との相互扶助の関係性が構築されている様子が確認できた。また、受講生が地域活動等を通して地域を担う人材になっている様子や、事業創出を行っている様子が見られ、地域に新しい価値を創造していることが確認できた。こうした一連の取り組みは、地域の活動人口・関係人口の増加や、社会関係資本の醸成にも寄与していることがうかがえる。以上のことから、「とよのわたし研究室」を基盤とした地域づくりを通して、豊能町に内発的イノベーションが創発していたことが確認された。

ただし、これらの結論はあくまでも全体的な傾向を示したものに過ぎず、受講生一人ひとりの個別具体的な事象を検証することは今後の課題となる。また、この結果は、限られた人数の研究対象者と限られた期間における検証という制約条件のもとに示されたものであり、仮説が実証されたと言い切るためには、さらなる検証が求められるだろう。以上の点は、本研究の大きな課題として残される。

6.5. 地域づくりモデルの提案に向けた考察

ここまで、豊能町における「とよのわたし研究室」の事例を詳述し、その分析を通して地域づくりのプロトタイプのモデルの検証を行った。その結果、プロトタイプで示した仮説が一定程度妥当であったことが示され、「とよのわたし研究室」の取り組みが地域の発展や課題解決に寄与していく可能性が示唆された。一方で、本地域づくりが活動人口・関係人口の増加や社会関係資本の醸成に寄与する可能性が新たに示唆されるなど、プロトタイプでは想定しきれていなかった地域づくりの特徴や要点が存在することもわかっている。そこで、本節では、改めて「とよのわたし研究室」全体をふり返り、「個人の内発的発展」を重視した「内発的イノベーション地域づくりモデル」の提案に向けて、この地域づくりが機能した要因について考察していく。

1 点目は、「研究テーマ発表会」に準ずるフェーズの有用性に関する示唆である。社会実験の結果から、「わたし研究室」の構成要素のひとつであった「研究テーマ発表会」の場をきっかけに、来場した地域内外の研究者や企業関係者、自治体職員らが受講生に共感し、今後の活動を応援・協力しようとする様子が見られた。このような機会はミャンマ

一の地域開発においては見られなかったものであるが、地縁的なつながりが希薄化し、地域コミュニティが衰退する傾向にある日本の地域においては新たなつながりを生み出す契機となり、その後の具体的な活動が生まれる原動力になると考えられる。実際に豊能町においても、「研究テーマ発表会」に参加した地域外の人材が受講生の「研究テーマ」に共感し、のちに豊能町の活性化に関わるようになった例や、それまで豊能町を訪ねたことがなかった企業関係者とのつながりが生まれ、地域の特産物を活用した商品開発プロジェクトが構想されるなど、「研究テーマ発表会」をきっかけに様々な展開が生まれつつある。このことから、発掘した住民の可能性を地域内外の住民や企業関係者、自治体職員、有識者などの多様な人々に共有する発表・報告の場を設けたことは、その後の地域づくりが展開するうえでのひとつの要件になると考えられる。

2点目は、可能性を具体化するフェーズの有用性に関する示唆である。第5章第2節第3項にも述べたように、「とよのわたし研究室」では、当初伴走支援として予定していた「ファシリテーター養成講座」の前に、自分の可能性をどのように拓いていきたいのかイメージを具体的にする必要があると判断し、当初予定していなかった新たなワークショップを導入した。それが、「研究テーマ」をいかに具現化していくかを構想する伴走ワークショップである。実際に、このワークショップの中で市民団体立ち上げなどの構想が具体的に固まるなど、具体化するフェーズを入れたことがより可能性を発揮しやすくする仕組みとして機能している様子が見られた。このことから、住民が可能性を拓いていくプロセスには、漠然と抱いている可能性を具体化する伴走支援のフェーズが必要であると考えられる。

3点目は、プラットフォーム形成支援の有用性に関する示唆である。豊能町の事例では、「とよのわたし研究室」修了から1年以上が経った現在も、受講生同士が相互扶助の関係を築きながら地域活動を展開している様子が確認された。そのように活動が持続している要因として考えられるのが、受講生をつなぐプラットフォームとしての市民団体の存在である。この市民団体は、「とよのわたし研究室」で生まれたつながりをプログラム終了後も維持できるようにと、受講生の発案によって偶発的に生まれたものである。市民団体が発足したことにより、第1フェーズで生まれた受講生の自利利他の精神と受講生同士の信頼関係が活かされ、受講生同士が助け合い、支え合う相互扶助の関係性が構築されている様子がうかがえた。さらに、受講生として参加した自治体職員もこのプラットフォームに出入りしていたことで、地域づくりの運営者として住民と関わる際にも適切な情報提供

やマッチング等を行いやすくなったという側面があり、住民の活動の持続化に寄与したと推測される。先のミャンマーの事例においても、寺が村人同士の相互扶助を促進するプラットフォームとなっている様子が見られたことから、プラットフォーム形成は相互扶助の醸成において有用であると考えられる。以上のことから、住民同士が協働し互いの可能性の開花を応援し合う場、あるいは住民とその可能性の開花を支援する者との交流の場としてのプラットフォームが存在することで、そこに関わる者同士の相互扶助の関係性を醸成し、持続的な地域活動が生まれやすくなると考えることができるだろう。

4点目は、自治体職員が住民と共に学び、働くことの有用性に関する示唆である。「とよのわたし研究室」では、自治体職員が住民と肩を並べて自己教育プログラムに参加し、のちに生まれる地域活動にも関わり続けてきた。本章第2節でも述べたように、この地域づくりは運営する職員らが住民／職員の垣根を超えて「共に働く」姿勢で臨むことが重要となり、そのために自らも学び手になること、そして、住民の現状や課題に対する当事者意識を育むことを目的に、職員も自己教育プログラムの受講生として参加した。その後、参加した職員と住民の間に相互扶助の関係性が生まれ、共に地域活動を行っている様子も確認されており、共に地域の未来を考えていける関係性が育まれていることがわかる。職員は共に活動することを通して現場のニーズを把握しやすくなり、助成金の紹介や既存の地域プロジェクトとのつながりを生み出すなど、自治体職員ならではの知識やリソースを活かしたより適切な支援を提供している様子がうかがえた。

さらに、自治体職員が参加した利点としてあげられるのが、支援を行う際に現場に即した柔軟な対応がしやすくなった点である。本事例のなかでは、研究テーマ発表会後に当初予定していなかった伴走ワークショップが挿入されるなど、計画外の措置をとる場面があった。このような対応が可能であったのも、学習者として現場に参加していた職員自身が、自分自身も含めた受講生の可能性が発揮できるためにはどのような対応をとることがより適切であるかを、当事者の肌感覚で理解できていた影響が大きいと考えられる。

このように、地域づくりの運営者と住民が共に学ぶ機会を設けることは、地域づくりに様々な副次的効果をもたらすと言えよう。ミャンマーの事例においても、^{かいほつ}開発僧が村人とともに働いたことで、村人に必要な支援を把握している様子が見られたことから、地域づくりの担い手と地域住民とが協働することは、「個人の内発的発展」に基づく地域づくりを促進するうえでの要件になると考えられる。

そして 5 点目は、運営者が取るべき姿勢に関する示唆である。「とよのわたし研究室」の取り組みが機能するにあたり、大きく影響を与えたと考えられるのが、地域づくりの運営者の姿勢である。本地域づくりの枠組みにも示したように、「とよのわたし研究室」では住民一人ひとりの可能性に応じた支援が求められ、事前準備の時点ですべての見通しを立てることが難しい事業である。住民の潜在的な可能性は未知数で予測の範囲を超えるものであり、量的な成果指標の設定や費用対効果の算出も難しい。また、何が起こるかわからない現場への対応や、運営資金（予算）の確保、役場内を含む事業に懐疑的な人々への説明、受講生として参加することによる実務への負荷と職員を送り出す部署の理解など、普段以上に柔軟性が求められる事業であったと考えられる。そのようななか、今回「とよのわたし研究室」を主催した豊能町職員は、民間団体以上に制約の多い状況下において、相当の覚悟を持ってこの事業に取り組んでいたことがうかがえる。この地域づくりの原動力は、そのような職員をはじめとする地域づくりの運営者が、住民の潜在的な可能性が地域の資産であるという前提に深く共感し、住民の可能性が発揮できる地域を実現したいという信念ではないだろうか。

さらに、運営者の姿勢として重要であったと考えられるのは、この地域づくりの運営に関わるすべての構成員が、それぞれの役割を超えて運営に参加した点であろう。筆者自身は地域づくりの枠組みを考案し、自己教育プログラムのファシリテーションをする役割としてこの地域づくりに参画したが、結果的に伴走支援にも関与することとなった。同様に、伴走支援者として参画した社会起業家も筆者が担当する自己教育プログラムに足を運ぶなど、各々が自分の仕事とそれ以外の仕事を線引きするのではなく、互いに関与しあって事業を遂行していく結果となった。住民と職員が垣根を超えたように、運営者同士もまた互いの役割を超えて関与し合い、相互扶助を行ったことが「とよのわたし研究室」が機能するにあたっての重要な要因であったと考えられる。

以上、本節では地域づくりモデルの提案に向けて「とよのわたし研究室」の事例全体から得られた示唆を整理した。最後に、社会実験を通して示された本地域づくりの新たな可能性として、幸福の観点から言及しておきたい。

近年、幸福度計測の技術開発に取り組んできた株式会社日立製作所によると、人間が幸福を感じる大きな要因のひとつに「利他的な動機による行動」がある。同社の研究結果から、利他的な行動をとった場合、本人の幸福度も高く、周囲の人の幸福度も上がることがわかっており、それが結果として企業利益の向上にも結びつくことも示唆されている

(URL20)。このような「努力を重ねた結果としての、利他的で意義のある生活をしている人の幸せ」は古代ギリシャにおいてユーダイモニア (Eudaimonia) と呼ばれ、古来より人間の幸福に資すると考えられてきた (URL21)。本研究においては、社会実験の結果にも示されるように、内発的イノベーションによる地域づくりは住民の自利利他の精神の発現を促進することがわかっている。すなわち、この地域づくりは、自利利他の精神の発現を通して住民の幸福度を高める取り組みにもなっていることが期待されるだろう。このことは、ミャンマーの^{かいほつ}開発僧が「物心両面から誰もが幸せになる」ことを目指した際、心の^{かいほつ}開発から地域づくりに取り組むことにこだわった点にも通じると考えられる。

以上の知見を踏まえ、次章では、「個人の内発的発展」に基づく地域づくりのあり方を整理した「内発的イノベーション地域づくりモデル」を提案していくこととする。

7. 「内発的イノベーション地域づくりモデル」の提案

本章では、ここまでの論考を総括し、「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりの方法を示す「内発的イノベーション地域づくりモデル」の提案を行う。なお、以下に示すモデルは、晩年の鶴見和子によって議論された、個人の潜在的可能性に着目した内発的発展論と、社会教育学の領域における自己教育の理論を理論的枠組みとするものである。また、地域づくりの実践枠組みは、ミャンマー^{かいほう}開発僧による地域開発の事例と、大阪府豊能町で実施した社会実験の結果に基づき定めることとする。

7.1. 概要

「内発的イノベーション地域づくりモデル」とは、「個人の内発的発展」が促進され、新しい地域の価値を創造していくまでの一連の過程を示したものである。

このモデルの枠組みは、住民の潜在的可能性を発掘する段階と、住民が発掘した可能性を地域で発揮できるよう支援する段階の大きく2つで構成される。まず、アイデンティティ形成を促す自己教育プログラムを行い、住民が潜在的に持っていた可能性を見出していく。住民同士の相互学習を促しながら、住民のアイデンティティ形成と「他者の役に立つことが自分の喜びになる」自利利他の精神の発現を促進していく。次に、発見した可能性を、具体化・具現化するための伴走支援を行う。伴走支援は、行政・中間支援組織・社会起業家などの地域内外の多様なセクターや主体と協働し、住民の可能性が拓くための個別支援や、持続的なつながりを生み出すプラットフォーム形成支援などを行う。そうすることで、住民が他者との関わりを通してその可能性を地域で発揮できるようになり、結果として地域の課題解決や地域の発展が促進されるようになる。

なお、本モデルは自治体などの行政機関が最初の運営主体となり、地元住民組織、NPO 団体、社会起業家などと協働しながら実施することを想定したものである。次節では、その詳細を示していく。

7.2. 枠組み

本節では、豊能町での社会実験の結果をもとにプロトタイプを改訂し、「内発的イノベーション地域づくりモデル」（図 13）を提案していく。

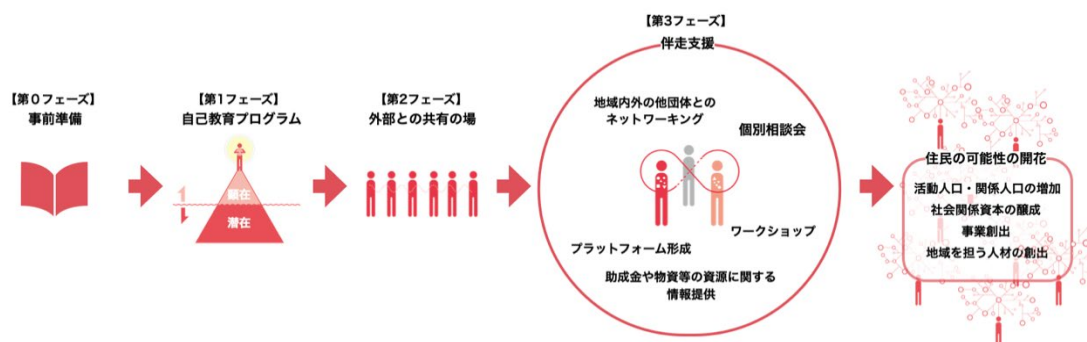


図 13 内発的イノベーション地域づくりモデル（筆者作成）

【第0フェーズ】事前準備

第0フェーズは、地域づくりを実践するにあたっての準備を行う段階である。このフェーズでは、地域づくりの計画立案を行い、その方針等を運営に関わる協力者全員と共有していく。

ここでは、まず、第1フェーズで実施する自己教育プログラムの対象者を定める。たとえば、豊能町の事例では、女性活躍推進事業の一環として、対象者を「『何か新しいことを始めたいけれど、何をしたらよいかわからない』といった迷いを抱える女性」や「人生の分岐点に立つ女性」とした。このように、地域に応じて対象者を設定していく。そのうえで、運営協力者の選定や、運営スケジュールリング、集客、プログラム設計等の準備を進める。ただし、この地域づくりでは住民一人ひとりの可能性に応じた支援が求められることから、事前準備の時点ですべての見通しを立てることが難しい。実際に運営していきながら、現場での状況に応じて柔軟に対応することが、このモデルでは求められる。

併せて、事前準備段階では、運営に関わる自治体関係者を対象に、事前研修を実施することが望ましい。その理由として、関係者の意識統一を図ることが、のちの地域づくりに影響するからである。また、地域づくりの目的や方針、望ましい運営のあり方を関係者全員と協議する機会を都度設けることも大事な要件と言えよう。

【第1フェーズ】自己教育プログラム

第1フェーズは、「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムを実施する段階である。住民はこのプログラムを通して、潜在的に持っていた可能性を発見していく。このフェーズは、内発的イノベーション地域づくりの基礎部分であり、第2フェーズ以降に大きく影響を与えていく重要なフェーズである。

このフェーズでは、主に自己探求を行うプログラムと住民同士の相互学習を通して、アイデンティティの形成を目指す。豊能町の事例では、こころ館が提供する自己教育プログラム「わたし研究室」を導入したが、この他にも、民間開発のプログラム⁵⁴を含めた既存の手法を導入することで、第1フェーズは実施可能となる。既存の民間プログラムを取り入れる際は、アイデンティティ形成を促すことを意識したワーク⁵⁵や、対話形式のワークショップを実施するようにする。そうすることで、住民のうちに潜在している可能性を見出していく。また、自己探求の過程を他者に共有することで、人の幸せを自分の幸せと感じる自利利他の精神を発現していく。

なお、このプログラムでは、住民の現状や課題に対する当事者意識を育むことを目的に、地域づくりを運営する自治体職員が自らも学び手となる。そうすることで、職員と住民の間に相互理解が生まれ、信頼関係が構築されることが期待される。また、職員は住民の現状やニーズを把握することができ、適切な伴走支援を提供することも期待される。さらに、このプログラムは職員自身の研修とも位置づけられ、自身の可能性を発掘する機会として活用することが可能となる。

地域づくりの運営主体である自治体職員や協力団体は、定期的なふり返しを行い、連携をはかりながら運営を進めていくことが望ましい。

【第2フェーズ】外部との共有の場

続く第2フェーズは、第1フェーズで発見した住民の可能性を外部に共有していく段階である。このフェーズでは、顕在化した住民の実現したいことや叶えたいことに対し、応援者を集っていく。具体的には、住民が可能性を地域で拓いていけるよう、地域内外の企業関係者、自治体職員、地域づくりの専門家、NPO関係者等の多様な人材を招き、発表会・

⁵⁴ Google社が開発したマインドフルネスに基づくリーダーシップ研修プログラムの「Search Inside Yourself (SIY)」、コーチングや心の知能指数「Emotional Intelligence Quotient (EQ)」等の理論を用いたワークショップなどがその一例である。

⁵⁵ たとえば、これまでの人生の幸福度を線グラフで表す「ライフラインチャート」などがある。

報告会などを行うことが望ましい。近年は、インターネットや SNS を活用した非対面型のイベント開催も増加していることから、オンラインを活用して地域内外に発信することも可能である。こうした機会を設けることで、地域内外の人々が交流する契機が生まれ、関係人口の増加につながることを期待される。

【第3フェーズ】伴走支援

第3フェーズは、住民の可能性の具体化・具現化を支援する段階である。運営主体は、それぞれの住民に応じて、助成金等に関する情報提供や、地域内外の人材とのネットワーキングなど、幅広い支援を行う。支援の方法は様々だが、ここではいくつかの支援の例を紹介する。

1つ目は、住民と個別に面談時間をとり、適切な支援方法を模索していく個別支援である。個別支援では、顕在化した可能性を発揮できる支援を行う。この段階では、社会企業家や地域のリソースに詳しい自治体職員等が、支援に関わることが望ましい。

2つ目は、伴走ワークショップである。住民のなかには、顕在化した可能性をどのように実現していくかについて漠然とした方向性しか見えていない者もいる。実現したい内容を見つめ直す機会を提供することで、住民が今後の展開を構想できるようにする。

そして、3つ目は、講座に参加した住民で構成されるプラットフォームの形成支援である。ここでいうプラットフォームとは、住民同士のつながりの維持や、互いの実現したいことを共有し、その取り組みを応援し合う協力体制を生み出すものを指す。この他にも、既存の地域活動とつなぐ、自治体主催の講座を紹介するなど、地域にすでにあるリソースを活かした支援も有用と考えられる。

以上の第0フェーズ～第3フェーズを経ることで、住民が他者との関わりあいながら可能性を地域で発揮できるようになり、結果として地域の課題解決や地域の発展に寄与していくと考えられる。なお、すでに可能性を具現化していける力量を持つ住民など、伴走支援を必要としない住民もいることに留意しておきたい。

7.3. モデルを機能させる諸条件

ここまで、「内発的イノベーション地域づくりモデル」の枠組みについて詳述した。以下では、この地域づくりモデルが有効に機能するための諸条件について整理する。

1 点目は、豊能町やミャンマーの事例にも共通するように、住民には本人も気づいていない可能性があると感じる姿勢で運営主体が地域づくりに取り組むことである。地域で暮らす住民の可能性が発揮されることが、結果的に地域の活性化につながるという思想を、地域づくりの運営主体が共通で持っていることを重視する。そのうえで、鶴見の内発的発展論が示すように、「それぞれの個人の人間としての可能性を十分に発現できる条件を創り出すこと」（鶴見 1980：193）を目標に置いて、地域づくりに取り組むことが求められる。

2 点目は、地域づくりの運営主体が協働し、一つの共同体として地域づくりを行うことである。地域づくりを運営するうえでは、それぞれの役割を担当者に任せきりにするのではなく、自らも当事者として考える姿勢が求められる。関係者が領域を超えて協力しあうことで、現場に応じた対応が可能になると考える。

そして、3 点目は、現場主義であることである。ミャンマーの^{かいほう}開発僧が村人と「共に働く」ことを通して信頼関係を構築し、村人に適切な支援を行っていた例や、「とよのわたし研究室」に自治体職員が受講生として講座に参加したことで、現場に即した計画変更を決断した例は、まさに現場主義の現れと言える。住民が可能性を発揮できる環境を整えるには、事前に立てた計画通りに進めるのではなく、現場から必要なことを汲み上げ対応や判断を下すことが重要となる。現場のニーズを把握するには、地域づくりの運営者は現場主義であることが求められる。

以上の3点を実践するうえでの前提となるのが、この地域づくりに取り組む覚悟を関係者全員が持つ、ということである。本論文で提唱する住民の潜在的可能性に基づく地域づくりは、住民一人ひとりの多様な可能性に応じた対応をすることが求められ、そのために多様な担い手の協力を必要とする。さらに、計画通りに進まないことを前提とする点や、住民に対して結果を出すことを求めない点など、ある意味では担い手に対する要求の厳しい取り組みである。実践するまで何が起こるか未知数であることから、特に事前の綿密な計画やその遵守が求められる自治体などの組織においては、この地域づくりに挑戦する覚悟が求められるだろう。言い換えれば、覚悟の度合いに応じて、この地域づくりの結果は変動するとも考えられる。

7.4. 総括

以上、本章では、ここまでの論考を統合し、「内発的イノベーション地域づくりモデル」の枠組みとその機能条件を提示した。

上述したように、内発的イノベーション地域づくりモデルは、「個人の内発的発展」の促進を通して、地域に新たな価値が創出していく内発的発展のひとつのあり方と捉えることができるだろう。

自治体が主導するこれまでの地域づくりでは、梅沢ほか（2020）が述べるように、地域づくりに興味がある住民を対象にした人材育成事業を行い、その多くは、地域の課題解決を担う人材の育成を目指していた。一方で、内発的イノベーション地域づくりは、従来のような、地域の課題解決を担う人材を育成するものではなく、地域で自分の可能性を發揮できる人材を創出することを目的としている（図 14）⁵⁶。

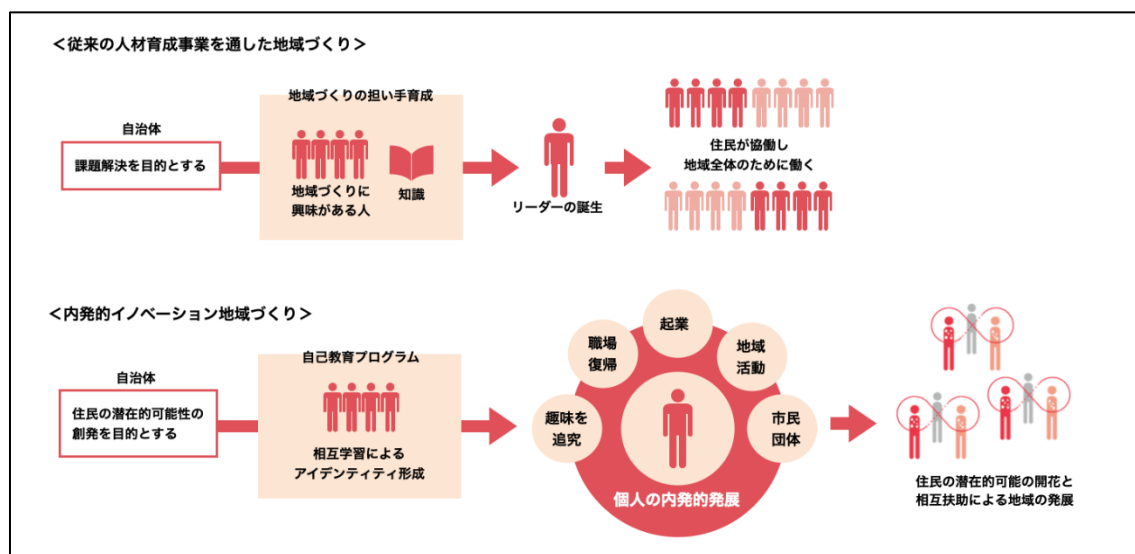


図 14 従来の地域づくりと内発的イノベーション地域づくりの違い（筆者作成）

内発的イノベーション地域づくりモデルは、住民の可能性を地域の大切な資産だと捉えており、住民のうちに潜在している可能性を引き出すことを地域づくりの起点に置いている。図 15 が示すように、この地域づくりモデルでは、一人ひとりの住民の可能性が地域の最も重要な資産となり、その可能性を地域でいかにして拓いていくのが地域の発展の鍵となる。

⁵⁶ 図 14 における「従来の人材育成事業を通じた地域づくり」の図は、梅沢ほか（2020）を参考に作成した。

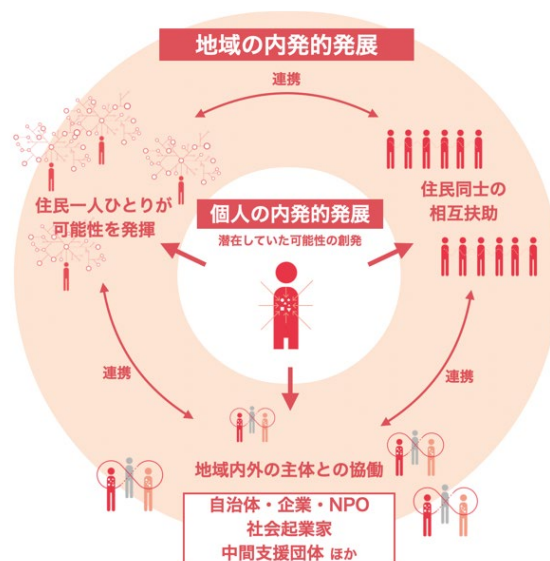


図 15 内発的イノベーションの創発過程（筆者作成）

この地域づくりでは、住民は自らの叶えたいことや実現したいことを地域で顕在化していく過程において、職場、友人など、地域の人々の役に立つことを喜びとする自利利他の精神を併せ持ちながら、可能性を地域で発揮するようになる。ここでは、「地域のことを自分ごととして考えられる住民」、「住民のことを自分ごととして考えらえる自治体職員」という、垣根を超えた相互扶助の関係性や社会関係資本が醸成され、今度は、地域を発展させていく共同体として協働していくようになる。さらに、この共同体が地域内外の個人や団体とも結びついていくことで、共同体の輪が広がり、結果的に活動人口や関係人口が徐々に増えていく。こうした一連の地域づくりは、住民の幸福感向上に資することが期待される。

以上のように、内発的イノベーション地域づくりモデルは、住民一人ひとりの可能性を拓きながら、地域が発展するというモデルである。

8. おわりに

8.1. 研究の総括

以上、本研究では、住民の潜在的可能性の創発する「個人の内発的発展」を重視した地域づくりのあり方を模索してきた。地域づくりの枠組みを設定するにあたっては、晩年の鶴見和子に見られる住民の潜在的可能性に着目した内発的発展論と、相互学習を通じたアイデンティティ形成を促進する自己教育を理論的枠組みとして設置した。さらに、実践枠組みをミャンマー^{かいほう}開発僧の地域開発実践に求め、そのプロセスや詳細を明らかにするためにフィールド調査を行い、その結果に基づいて地域づくりモデルのプロトタイプを構築した。また、地域づくりに導入する自己教育プログラムを検討するにあたっては、一般社団法人こころ館が提供する研修プログラム「わたし研究室」に着目し、「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムとして位置づけている。

そのうえで、本研究では、筆者が大阪府豊能町で実践する女性活躍人材育成事業「とよのわたし研究室」を基礎とした地域づくり事業を社会実験と位置づけ、その実践結果に基づき、プロトタイプを検証及び地域づくりの要点の検討を行った。そして最後に、本研究の論考を統合し、「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムを重視した地域づくりの道筋を示す「内発的イノベーション地域づくりモデル」を提案した。

以下、本研究を結ぶにあたり、内発的イノベーション地域づくりモデルの要諦を再確認し、この地域づくりの可能性を探っていく。人口減少や少子高齢化、地域格差が進み、限られた財政と人的資源のなかでの地域づくりが求められる現代日本においては、未だ発揮されていない地域住民の力がこれまで以上に重要な資産になると筆者は考える。本研究では、本人が自覚していない、才能、能力、価値観、人間性などの資質全般、すなわち、本人がまだ気づいていないアイデンティティを潜在的可能性と呼び、それが地域の重要な無形資産であるという視座のもと、いかにして地域づくりを通し「個人の内発的発展」を促進していくのかを考え研究を進めてきた。このような個人の可能性を重視する地域づくりは、鶴見の内発的発展論によって構想されてきたものである。一方、鶴見はその具体的な実現方法を示していないが、先行研究より、地域での社会教育活動に自己教育を導入することでその地域づくりが実現されることが示唆された。こうした「個人の内発的発展」を促進する自己教育を重視した地域づくりは、ミャンマーの^{かいほう}開発僧によってすでに現実化されており、調査を通して、彼らが「誰しも眠らせたままになっている可能性がある」という強い信念のもとに、心の^{かいほう}開発からアイデンティティ形成を促進する自己教育を起点

にした地域開発を行っている様子が明らかとなった。これらの先行研究や事例を枠組みに、筆者がこれまで実践してきた潜在的可能性を発掘する研修プログラム「わたし研究室」の要素を加えたものが、内発的イノベーション地域づくりモデルの原型となっている。

社会実験を通じた検証の結果、「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムは、他者との相互学習を通して、自己課題の解決を通してこれまで可能性の発揮を阻害していた要因から自分を解放し、アイデンティティ形成を促進するものが有用であると示唆された。また、他者との関わりを通じてアイデンティティ形成を行うなかで、他者や地域の幸せを自分の幸せと思う気持ち（自利利他の精神）が発現し、自らの可能性を他者や地域に役立てることに喜びを感じる人が創出されることも併せて示唆された。

さらに、発掘した住民の可能性が地域で発揮されるよう、個別の伴走支援や住民同士のネットワーキングを支援することで、相互扶助の関係性が醸成され、他者との関わりの中かで住民の可能性が地域で拓かれていく様子が見えてきた。その結果、地域の活動人口・関係人口の増加や社会関係資本の醸成が期待されるほか、住民が自身の可能性を地域で発揮することで、さらに地域課題の解決や地域の活性化も促進できると期待される。さらに、本モデルは、自利利他の精神の発現を通して、住民のユーダイモニア的幸福度の向上にも資する可能性を秘めていると考えられる。

8.2. 本研究の意義と独自性

続いて、本研究の意義を総括する。学術的研究の観点から、本研究には次の5つの意義があると考えられる。

1 点目は、内発的発展の地域づくりに関する研究において、これまで十分に議論されてこなかった住民の潜在的可能性を地域で発掘・発揮する手立てを示したことである。従来の内発的発展の地域づくりに関する議論において「自己教育を本質とした社会教育」の必要性は述べられてきたものの、実際の自己教育プログラムにおいては、地域に関する講習やワークショップ、コミュニティリーダーの養成講座、地域の情報発信を担うライターや養成講座などの知識・スキル習得を目的としたカリキュラムが中心であり、住民の潜在的可能性を見出すための自己教育活動はほとんど注目されてこなかった。そのような背景を考えると「内発的イノベーション地域づくりモデル」は、自己教育を本質とした社会教育という原点に立ち返り、その実現方法を示したものとも捉えることができるだろう。さらに、本モデルは、その道筋を踏襲することで、現在日本の各地域が抱える地域の担い手不

足や地縁的なつながりの希薄化等の課題解決にも寄与しうる地域づくりモデルとしての可能性を秘めていると考えられる。

2 点目は、晩年の鶴見和子が目指した内発的発展の地域づくりを実現しうる道筋を示した点にある。晩年の鶴見論を扱った先行研究において、その思想を現実化するための具体的な方法については課題として残されていた。それに対して、本研究で示した内発的イノベーション地域づくりモデルは鶴見が目指した「個人の内面からあふれ出てくるものを実現する場として地域を捉え、地域に生きる住民の成長の理論」（蜂屋 2017 : 23）を実現するひとつの方法と位置づけることができ、内発的発展論の研究領域に新たな可能性を示唆することができたと考える。

3 点目は、^{かいほつ}開発僧による内発的発展の事例研究を、これまで蓄積の少なかったミャンマーの事例に着目して進めた点にある。従来の^{かいほつ}開発僧研究は、内発的発展論の研究者である西川潤らを筆頭に取り組みされた、タイをフィールドとする研究が大半であった。軍事政権が長く続いたミャンマーにおいては、^{かいほつ}開発僧に関する先行研究はタイに比べて圧倒的に少なく、本研究はミャンマーにおける内発的発展の研究や^{かいほつ}開発僧研究の領域に、新たな知見を提供できたとと言えるだろう。

また、それらの知見を日本の地域づくりに応用するという試みは新たな挑戦であり、西川らが研究プロジェクトの理念に掲げた、アジアの智慧である仏教開発の実践や思想から学び、日本においても実践していこうとする試みを体現したとも見なすことができるだろう。さらに、その知見を社会的・文化的背景の異なる大阪府豊能町の地域づくりに応用したことは、本モデルの汎用性・確実性をより高めたと考えることができたという意味でも、本研究の独自性が示唆されたと捉えることができるだろう。

4 点目は、高い持続可能性が見込まれる、住民主体の地域づくりモデルを示した点である。住民主体による地域づくりの必要性が叫ばれる昨今、各自治体はこれまでも、地域づくりの担い手育成を目指した様々な社会教育プログラムを提供してきた。一方で、プログラム終了後に地域活動に参加する住民の定着率や、活動の持続性については、依然として多くの課題を抱えている。その点、住民自らの潜在的可能性を重視する本研究の地域づくりモデルでは、内発的に発見した自らの望みを実現する行動が、結果的に人や地域の幸せにつながるという無理のないサイクルが描かれ、幸福感をベースにした持続的な地域活動に発展していくモデルになると推測される。実際に「とよのわたし研究室」修了後から地域活動をはじめた住民からは「自分たちのしていることが地域の役に立っていたら嬉し

いけれど、それを狙っているわけではない」という声があり、あくまでも起点を「個人の内発的発展」に置くことが、この地域づくりを持続させる要因になったと考えられる。

最後に、5点目は、「内発的イノベーション」、「個人の内発的発展」、自己教育といった概念を用いることで、地域づくりに新たな枠組みを提示した点である。たとえば、冒頭にふれた山形県置賜地方の「人と地域をつなぐ事業」は、2016年度より取り組まれる地域づくりの事例であり、従来の地域おこしの型に合わせるのではなく、1人1人の持ち味や内発的な動機を起点とする点にその特徴がある（梅沢ほか 2020）。このような、個人の潜在的な可能性を重視した地域づくりを表す枠組みは、これまでの地域づくり研究では管見の限りでは見当たらなかったものである。しかし、本研究では、内発的イノベーションや「個人の内発的発展」などの潜在的な可能性に着目する概念を用いることで、新たな地域づくりの枠組みを提示した。これにより、住民に潜在する可能性を重視した地域づくりが注目されるようになり、新たな価値を見出すことができるのではないかと考える。また、内発的イノベーションという概念を生成したことで、地域で暮らす住民の潜在する可能性に着目した地域づくりが普及しやすくなることが期待される。

以上、本研究の意義についてまとめた。しかしながら、本研究はまだまだ発展途上であり、さらなる実践が必要となると考える。

8.3. 課題と展望

最後に、残された課題と今後の展望を述べて本論文を閉じていきたい。

本研究で残された課題は次の6点である。1つ目は、追加調査の必要性である。今回社会実験を行った「とよのわたし研究室」は、講座開始からようやく3年目を迎えた段階であり、今後の持続性や受講生の関係性、受講生自身の可能性の発展など、地域づくりとしての真価が問われるのはこれからであると考えられる。そのため、5年、10年と、長期にわたって動向を観察する必要があるだろう。2020年11月現在、「とよのわたし研究室」は3期目を迎え、第1期・第2期以上に多様なバックグラウンドを持つ人材が講座に参加するようになった。3期生に講座に参加した動機を聞くと、「自分の特技や能力を地域で活かしたい」、「地域とつながりを持ちたい」等、地域活動を視野に入れた参加者が多く、参加動機の傾向にも変化が見られるようになっている。このように、継続することで生まれる経年的な変化を含め、長期に渡る調査を続けていくことが求められるだろう。

2 つ目は、更なる検証の必要性である。今回は質的な研究方法を採用したが、今後はアイデンティティや自利利他、社会関係資本、幸福度などに関する指標を用いた調査研究を行うなど、さらなる検証を重ねていきたい。

3 つ目は、他地域での事例調査の必要性である。本研究で示した方法以外にも、内発的イノベーションによる地域づくりの方法には様々なやり方があると考えられる。今後は、内発的イノベーションによる地域づくりに相当する事例を調査し、知見を深めていきたい。

4 つ目は、さらなる実証実験の必要性である。第 5 章第 3 節第 2 項の結びにも述べたように、本研究の結果はあくまでも研究対象者の全体的な傾向を示したものに過ぎず、また、限られた人数の研究対象者と、限られた期間という制約下で示されたものである。そのため、仮説が実証されたと言い切るためには、他地域での社会実験などのさらなる検証が求められるだろう。

5 つ目は、より普遍性と汎用性の高い、「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムの開発である。本研究では、SAM や Being ファシリテーションの手法を用いた「わたし研究室」を自己教育プログラムとして導入したが、本プログラムは普段から対人援助を行う筆者を中心に運営するものであり、誰もが活用できるものではないのが実情である。今後は、自己課題の探求や、アイデンティティ形成を促進する各種問いかけを開発するなどして、自己教育プログラムの普及に貢献していきたい。また、これに関連して重要なのが、自己教育の担い手の育成である。自己教育プログラムを地域に普及していくためには、その担い手となる存在が欠かせない。実際に豊能町では、「とよのわたし研究室」を受講した住民が、今後の地域の自己教育を担う存在になろうとしており、今後は彼女たちが活用できる問いやワークショッププログラムを開発することが筆者の直近の課題となる。今回の研究を活かし、自己教育プログラムのファシリターを育成する教材やプログラムの開発を行っていきたい。

そして、6 つ目は、社会情勢への対応である。本研究の社会実験期間中、新型コロナウイルス感染症が流行し、対面での実施を前提とした本地域づくりは大きく影響を受けた。その時期に予定していた住民の伴走支援を十分に行うことができなかったという反省点を踏まえ、社会の変化にも対応した汎用性・確実性の高いモデルとして内発的イノベーション地域づくりを発展に導くことが今後の課題と考える。

次に、今後の展望を述べる。1 点目は、内発的イノベーション地域づくりモデルを学校教育や社員研修等の他分野に応用することである。特に近年は、文部科学省によって提唱

された「個別最適化された学び」が次世代の教育方針として挙げられているほか、2020年度の学習指導要領改訂により「非認知能力」への着目がなされており、これらは本研究で提示した自己教育プログラムを導入することで対応可能になるものと考えられる。今後は、こころ館の活動を通じて、これまで以上に「個人の内発的発展」を促進する自己教育プログラムを普及し、内発的イノベーションによる学校づくり、組織づくりへと展開していきたい。

2点目は、内発的イノベーションという概念の普及である。内発的イノベーション、すなわち「個人の内発的発展」から新たな価値創出を行う地域づくりや組織づくりを広めていくことで、一人ひとりの可能性が発揮される社会の実現につながると考える。普及に向けた方策として、現在は「個人の内発的発展」を促進するワークブック開発を企画しているほか、内発的イノベーションによる地域づくりや組織づくりに相当する実践を集め、その実践者によるフォーラムの開催を予定している。このように、今回の研究で得られた知見を活かし、一般に普及していく活動を行っていきたい。

3点目は、内発的イノベーション地域づくりモデルの政策への反映である。本モデルが、大阪府豊能町の男女共同参画事業計画に援用される予定であることを受け、本研究を政策論の観点からもさらに発展させていきたい。

4点目は、新型コロナウイルスの影響で社会のあり方が変化し対面でのプログラム実施が困難になっている点を考慮し、オンラインでの学び場を展開していくことである。対面での直接的な対話を介さずとも、参加者の潜在的可能性を見出していけるようプログラムを検討していく予定である。オンラインの利点は、自宅にいても地域や国を超えた学び合いを行うことが可能になる点にある。これらを踏まえ、より実践的なプログラムを提案していきたい。

そして、5点目は、内発的イノベーション地域づくりモデルをソーシャル・イノベーション創出の道筋を示すモデルとして展開していくことである。梅田はソーシャル・イノベーションを「新たな価値創造の主体としての普通の人々によるイニシアティブが誕生し、成長、発展していく中で一人ひとりが可能性を発揮し、イノベーションが起こり、又、それによってより善い社会に変わっていく」（梅田 2014：1）という営み全体を指す概念として用いている。内発的イノベーション地域づくりモデルは、地域で暮らす「普通」の人々のなかに眠っている可能性を地域の資産と捉え、「新たな社会的成果」をもたらしようという点において、梅田の示すソーシャル・イノベーションの概念を創出するモデルとして

も位置づけることが可能と考えられる。

さらに今里（2014）が、そうしたソーシャル・イノベーションの根源的推進力を「一人はみんなのために、みんなは一人のために」と表現されるような互恵的で相互責任的な関係性であると述べているように、内発的イノベーション地域づくりモデルでは、住民が自利利他の精神を基盤に相互扶助の関係性を築いていくことが想定される点から、本モデルに基づく地域づくりに参加した住民は、今里の示すソーシャル・イノベーションの根源的推進力を有しているとも見ることができる。言い換えれば、その住民はソーシャル・イノベーターとしての資質を有することになるとも見ることができるだろう。すなわち、本研究は社会変革の萌芽的な実践であったとも見なすことができ、社会変革に至るまでのひとつの経路を見出した点において、ソーシャル・イノベーション研究の一端を担ったとも捉えることができるだろう。今後は、ソーシャル・イノベーション研究の観点からも研究をさらに深めていきたいと考える。

このような研究結果と課題、そして今後の展望を踏まえ、この世界に生きる一人ひとりが本来持つ可能性を十全に発揮できる社会の実現に寄与していきたいと考える。以上の所信表明をもって、本稿を閉じることとしたい。

(125,290 文字)

参考文献

日本語書籍

- 飯盛義徳（2015）『地域づくりのプラットフォーム：つながりをつくり、創発をうむ仕組みづくり』学芸出版社。
- 榎本博明（1997）『自己開示の心理学的研究』北大路書房。
- 岡部真由美（2014）『「開発」を生きる仏教僧：タイにおける開發言説と宗教実践の民族誌的研究』風響社。
- 加藤洋平（2017）『成人発達理論による能力の成長』日本能率協会マネジメントセンター。
- 川勝平太・鶴見和子（2008）『「内発的発展」とは何か：新しい学問に向けて』藤原書店。
- 木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践：質的研究への誘い』弘文堂。
- 國光洋二（2017）『地域活力の創生と社会的共通資本：知識資本・社会インフラ資本・ソーシャルキャピタルの効果』農林統計出版。
- 藏本龍介（2014a）『世俗を生きる出家者たち：上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民族誌』法蔵館。
- ケネス田中（編）（2018）『仏教と慈しみ』武蔵野大学出版会。
- 見坊豪紀・金田一京助・金田一春彦・柴田武・市川孝・飛田良文（編）（2008）『三省堂国語辞典』三省堂。
- 佐佐木幸綱・鶴見和子（2002）『「われ」の発見：鶴見和子・対話まんだら 佐佐木幸綱の巻』藤原書店。
- 佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法』新曜社。
- 鈴木敏正（2009）『新版 教育学をひらく：自己解放から教育自治へ』青木書店。
- 鶴見和子（1954）『エンピツをにぎる主婦』毎日新聞社。
- 鶴見和子（1977）『漂泊と定住と：柳田国男のみた自然と社会の結び目』筑摩書房。
- 鶴見和子（1996）『内発的発展論の展開』筑摩書房。
- 鶴見和子（1997）『鶴見和子曼荼羅Ⅰ：基の巻-鶴見和子の仕事・入門』藤原書店。
- 鶴見和子（1998）『鶴見和子曼荼羅Ⅱ：人の巻-日本人のライフ・ヒストリー』藤原書店。
- 鶴見和子（1999）『鶴見和子曼荼羅Ⅸ：環の巻-内発的発展論によるパラダイム転換』藤原書店。
- 中野民夫（2003）『ファシリテーション革命』岩波書店。

- 中野民夫・堀公俊（2009）『対話する力』日本経済新聞出版社。
- 中村桂子・鶴見和子（2002）『四十億年の私の「生命」：生命誌と内発的発展論』藤原書店。
- 新村出（編）（2018）『広辞苑 第七版』岩波書店。
- 西川潤（2011）『グローバル化を超えて：脱成長期 日本の選択』日本経済新聞出版社。
- 西川潤・野田真里（編）（2001）『仏教・開発・NGO：タイ 開発僧^{かいほつ} に学ぶ共生の智慧』新評論。
- 宮崎隆志・鈴木敏正（2006）『地域社会発展への学びの論理：下川町産業クラスターの挑戦』北樹出版。
- 諸富祥彦（1997）『カール・ロジャーズ入門：自分が“自分”になるということ』コスモスライブラリー。
- 山崎亮（2012）『コミュニティデザインの時代』中公新書。
- 山崎亮（2016）『縮絨する日本：「参加」が創り出す人口減少社会の希望』PHP 新書。
- 山田定市・鈴木敏正（編）（1992）『地域づくりと自己教育活動』筑浪書房。

日本語論文

- 秋元由紀（2005）「ビルマ（ミャンマー）の開発と人権・環境問題：アメリカの NGO の視点」『公共研究』2（1）、6-22。
- 安藤清志（1986）「対人関係における自己開示の機能」『東京女子大学紀要論集』36（2）、167-99。
- 安梅勅江（2008）「コミュニティ・エンパワメント：当事者主体のシステムづくり」『小児の精神と神経』48（1）、7-13。
- 飯塚宜子（2016）「多様な異文化の民俗に学ぶ環境教育：都市住民における『人間と自然の関係性』の捉え方」同志社大学博士論文
- 飯長喜一郎（2012）「自己受容」人間性心理学会（編）『人間性心理学ハンドブック』創元社。
- 伊藤美奈子（1991）「自己受容尺度作成と青年期自己受容の発達的变化：2次元から見た自己受容発達プロセス」『発達心理学研究』22、70-7。
- 糸林誉史（2019）「内発的発展と地域社会」『文化学園大学・文化学園大学短期大学部紀要』50、1-10。

- 今里滋 (2014) 「ソーシャル・イノベーションの理論と実践」 同志社大学政策学部 10 周年記念出版編集委員会 (編) 『地域の自立は本当に可能か』 10-21。
- 岩本俊一 (1999) 「戦後日本における自己教育概念に関する一考察：自己教育と自己教育運動」 『東京大学大学院教育学研究科紀要』 39、69-76。
- 上村有平 (2007) 「青年期後期における自己受容と他者受容の関連：個人志向性・社会志向性を指標として」 『発達心理学研究』 18 (2)、132-8。
- 梅田一見 (2014) 「ソーシャル・イノベーション生成過程の研究：徳・卓越性の実践、使用価値の協創、そしてレバレッジ」 立教大学博士論文。
- 小栗有子 (2005) 「持続可能な開発のための教育論の展開方法としての内発的発展論：鶴見和子のコペルニクス的大転換の過程を中心に」 『鹿児島大学生涯学習教育研究センター年報』 2、18-29。
- 春日由美 (2015) 「自己受容とその測定に関する一研究」 『南九州大学人間発達研究』 5、19-25。
- 加藤昌彦 (2016) 「ミャンマーの諸民族と諸言語」 『法務省法務総合研究所国際協力部報』 69、8-26。
- 嘉村賢州 (2019) 「ファシリテーションの基礎」 鈴木康久・谷口知弘・嘉村賢州 (編) 『はじめてのファシリテーション』 2-23、昭和堂。
- 川勝平太 (1999) 「解説：内発的発展論の可能性」 鶴見和子 『鶴見和子曼荼羅IX：環の巻 -内発的発展論によるパラダイム転換』 348-56、藤原書店。
- 木村隆之 (2018) 「ソーシャル・イノベーションにおける地方自治体の役割：島根県隠岐郡海士町の島おこし事例」 高橋勅徳・木村隆之・石黒督朗 『ソーシャル・イノベーションを理論化する：切り拓かれる社会企業家の新たな実践』 文眞堂。
- 窪寺俊之 (2006) 「自己喪失とスピリチュアリティ：自己を求めて」 『先端社会研究』 5-23。
- 藏本龍介 (2014b) 「近代化を生きる出家者たち：上座仏教徒社会ミャンマー・ヤンゴン事例として」 『宗教社会』 17-32。
- 藏本龍介 (2016a) 「ミャンマーにおける宗教対立の行方：上座仏教僧の活動に注目して」 『現代宗教 2016』 99-117。
- 藏本龍介 (2016b) 「モラルを超えたモラル - 現代ミャンマーにおける仏教の公共的役割についての一考察」 『Contact Zone』 8、15-28。

- 小森谷浩志 (2012) 「内省の作法」『企業と人材』50-2。
- 坂田哲人 (2019) 「リフレクションとは何か」一般社団法人学び続ける教育者のための協会 (REFLECT) (編) 『リフレクション入門』2-11、学文社。
- 佐野淳也 (2020) 「小規模自治体における内発的地域イノベーション・エコシステム：創造的人口減少を可能にするまちづくり生態系」同志社大学博士論文。
- 猿山隆子 (2011) 「鶴見和子の生活記録運動における学習組織の展開：「生活をつづる会」における話し合いの記録ノートの分析から」『京都大学大学院教育学研究科紀要』57、559-72。
- 三田果菜 (2015) 「美容によるがん患者のウェルネスに関する実践的研究」同志社大学博士論文。
- 須賀由紀子 (2014) 「女性社会とローカリズム：これからの“生活者”像を求めて」『生活科学部紀要』51,35-46。
- 鈴木敏正 (1992) 「地域生涯学習計画への自己教育論的接近」山田定市・鈴木敏正 (編) 『地域づくりと自己教育活動』筑浪書房、15-48。
- 鈴木規之 (2001) 「農村社会の変容と仏教寺院」西川潤・野田真里 (編) 『仏教・開発・NGO：タイ ^{かいほつ} 開発僧 に学ぶ共生の智慧』149-68、新評論。
- 高村和代 (1997) 「課題探求時におけるアイデンティティの変容プロセスについて」『教育心理学研究』243-53。
- 田坂逸朗 (2018) 「聴く側からの創造性：ストーリーテリングカフェにおけるファシリテーション・スキルの研究」『広島修大論集』58 (2)、225-42。
- 鶴見和子 (1980) 「内発的発展論へむけて」川田侃・三輪公忠 (編) 『現代国際関係論』、東京大学出版会。
- 鶴見和子 (1989) 「内発的発展論の系譜」鶴見和子・川田侃 (編) 『内発的発展論』43-64、東京大学出版会。
- 長島洋介 (2015) 「コミュニティにおけるアクションリサーチの体系化と課題」『研究・技術計画学会 年次学術大会講演要旨集』30、98-102。
- 中村沙絵 (2011) 「現代スリランカにおける慈善型老人ホームの成立：ダーナ実践を通じたチャリティの土着化」『アジア・アフリカ地域研究』10 (2)、257-88。
- 西川潤 (1989) 「内発的発展論の起源と今日的意義」鶴見和子・川田侃 (編) 『内発的発展論』3-41、東京大学出版会。

- 西川潤（2001）「タイ仏教からみた開発と発展：プッタタートとプラ・パユットの開発思想と実践」西川潤（編）『アジアの内発的発展』29-59、藤原書店。
- 西川潤（2004）「内発的発展の理論と政策：中国内陸部への適用を考える」『早稲田政治経済学雑誌』354、36-43。
- 野崎明（2001）「社会開発に参画するタイの^{かいほう}開発僧」西川潤・野田真里（編）『仏教・開発・NGO：タイ^{かいほう}開発僧に学ぶ共生の智慧』119-48、新評論。
- 蜂屋大八（2017）「鶴見和子の内発的発展論における地域づくり主体形成の検討」『茗溪社会教育研究』8、15-28。
- 長谷千代子（1998）「タイ東北部に見るNGOと^{かいほう}開発僧の近代」『西日本宗教学雑誌』20、11-22。
- 林玲子（2018）「ミャンマーの人口高齢化に関する統計情報整備に関する調査」『人口問題研究』74（1）、93。
- 平岡和久・江成穰（2017）「農山漁村における戦略的移住政策の可能性：島根県海士町と奈良県奥大和地域の事例を素材として」『政策科学』24（3）、395-418。
- 藤田一照（2014）「『日本のマインドフルネス』へ向かって」『人間福祉学研究』7（1）、13-27。
- 舟橋一哉（1970）「釈尊における対機説法：一人と一人との対話」『佛教学セミナー』12、1-10。
- プラチャーナート（2001）「農村での開発実践：ナーン和尚と^{かいほう}開発僧のネットワーク」西川潤・野田真里（編）『仏教・開発・NGO：タイ^{かいほう}開発僧に学ぶ共生の智慧』新評論。
- 松原明美（2017）「『心のイノベーション』による自己変容の実践的研究：『自我錨著の習慣化』ワークショップの実験を通じて」同志社大学修士論文。
- 松原明美（2019）「内発的イノベーションによる地域づくり論序説」『同志社政策科学研究』21(1), 107-20。
- 松原明美（2020）「住民の潜在的可能性に基づく地域づくりに関する予備的研究：ミャンマーの一^{かいほう}開発僧による地域開発の事例を手がかりに」『地域活性研究』12、203-12。
- 松本貴文（2017）「内発的発展論の再検討：鶴見和子と宮本憲一の議論の比較から」『下関市立大学論集』61（2）、1-12。

- 三木真冴（2007）「内発的発展論とカンボジアにおける仏教開発の可能性スバイリエン州
トゥール・サラ寺院の事例」桜美林大学卒業論文。
- 無藤清子（1979）「『自我同一性地位面接』の検討と大学生の自我同一性」『教育心理学
研究』27（3）、178-87。
- 森雄二郎（2018）「外国にルーツを持つ子どもと社会をつなぐ場の創出に関する実証研究：
社会構造主義的アプローチを用いた教育実践を通じて」『同志社政策科学研究』19（2）、
169-84。
- 山本順彦（2017）「内発的発展と教育（2）」『帝塚山大学現代生活学部紀要』13、39-48。
- 矢守克也（2016）「アクションリサーチの＜時間＞」『実験社会心理学研究』56、48-59。
- 吉川満典・栗村昭子（2013）「大学生におけるアイデンティティの確立について：心理的
居場所との関係性から」『総合福祉科学研究』35-41。
- 吉田昭久・澤野有香・服部智（1992）「自己受容の基底因IV：Berger's scale の再検討」
『茨城大学教育学部紀要』41、289-308。
- 吉田奈央（2014）「マインドフルネスの諸技法を用いた認知行動療法的介入の効果検討」
『岩手大学大学院人文社会科学部研究科紀要』23、17-37。
- 若原幸範（2007）「内発的発展論の現実化に向けて」『社会教育研究』25、39-49。
- 和田悠（2003）「1950年代における鶴見和子の生活記録論」『慶応義塾大学大学院社会学
研究科紀要：社会学心理学教育学』56、75-88。

日本語その他資料

- 梅沢遥美・坂倉杏介・齋藤拓也・前神有里（2020）「『個人の内発的発展』を重視した新
たな人材育成事業に関する研究：山形県置賜地方の『人と地域をつなぐ事業』を事例に」
地域活性学会第12回研究大会。
- 小田切徳美（2011）「ネオ内発的発展論」『町村週報』2778、1。
- 熊倉浩靖（2011）「内発的発展論の系譜と特性」NPO ぐんま内発的発展論講義資料。
- 藏本龍介（2018）「ミャンマーにおける出家者の開発実践の変遷と行方」日本文化人類学
会第52回研究大会。
- 総務省（2019）「地方の創生（地域と関わる『関係人口』の創出拡大等）概要説明資料」。
- 土佐桂子（2012）「ミャンマーにおける宗教政策」日本記者クラブ研究会「ミャンマー」
③。

長野県（2013）「活動人口増加プロジェクト」『長野県総合 5 か年計画 2013～しあわせ信州創造プラン～』66-9。

新川達郎（2016）「人口減少時代における地方自治と地方分権再訪」自治労京都府本部『2016年総会記念講演』3-8。

Myat Kalayar（2008）「話題提供 1：ミャンマーにおける障害者の現状とソーシャル・ファームの可能性について」（財）日本障害者リハビリテーション協会・日英高齢者・障害者ケア開発協力機構『国際セミナー報告書 ヨーロッパとアジアのソーシャル・ファームの動向と取り組み：ソーシャル・インクルージョンを目指して』88-91。

外国語書籍

Berger, E. M.（1952）“The Relation between Expressed Acceptance of Self and Expressed Acceptance of Others,” *Journal of Abnormal and Social Psychology*, 47, 778-82.

Brown, B.（2012）*Daring Greatly : How the Courage to Be Vulnerable Transforms the Way We Live, Love, Parent, and Lead*, Gotham Books.（=2013、門脇陽子訳『本当の勇気は「弱さ」を認めること』サンマーク出版。）

Dag Hammaskjöld Foundation（1975）*What now—The 1975 Dag Hammaskjöld Report on Development and International Cooperation*, Dag Hammaskjöld Foundation.

Kabat-Zinn, J.（1994）*Wherever You Go, There You Are : Mindfulness Meditation in Everyday Life*, Hyperion.

Kabat-Zinn, J.（2003）“Mindfulness-Based Interventions in Context : Past, Present, and Future,” *Clinical Psychology : Science and Practice*, 10（2）, 144-56.

Maslow, A. H.（1970）*Motivation and Personality*, Harper&Row.（=1987、小口忠彦訳『人間性の心理学：モチベーションとパーソナリティ』産能大出版部。）

Mezirow, J.（1991）*Transformative Dimensions of Adult Learning*, Jossey-Bass.（=2012、金沢睦・三輪健二監訳『おとなの学びと変容』鳳書房。）

Nerfin, M.（1977）*Another Development : Approaches and Strategies*, The Dag Hammarskjöld Foundation.

- Putnam, R. D. (2000) *Bowling Alone : The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. (=2006、柴内康文訳『孤独なボウリング：米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。)
- Ray, C. (2001) *Culture Economies : A Perspective on Local Rural Development in Europe*, Centre for Rural Economy.
- Rogers, C. (1995) *On Becoming a Person : A Therapist's View of Psychotherapy*, Mariner Books. (=2005、諸富祥彦・保坂亨・末武康弘翻訳『ロジャーズが語る自己実現の道』岩崎学術出版社。)
- Seppälä, E. (2017) What Bosses Gain by Being Vulnerable, Authentic Leadership, *Harvard Business Review*. (=2019、DIAMOND ハーバード・ビジネス・レビュー編集部 翻訳「弱さを隠さない上司に起こる素晴らしいこと」『オーセンティック・リーダーシップ』ダイヤモンド社。)
- Tan, Chade-meng (2012) *Search Inside Yourself*, Harper Collins USA. (=2016、柴田裕之訳『サーチ・インサイド・ユアセルフ：仕事と人生を飛躍させるグーグルのマインドフルネス実践法』英治出版。)

電子書籍・電子ジャーナル・ウェブページ

1. 国土交通省 (2018) 住み続けられる国土専門委員会「内発的発展が支える地域づくり (プロセスデザイン・コミュニティデザインについて)」国土交通省ホームページ (2019年1月1日閲覧、<http://www.mlit.go.jp/common/001255459.pdf>)。
2. 中央教育審議会 (2018) 「人口減少時代の新しい地域づくりに向けた 社会教育の振興方策について (答申)」文部科学省ホームページ (2020年11月17日閲覧、https://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2018/12/21/1412080_1_1.pdf)。
3. 国土交通省 (2019) 「新たなコミュニティの創造を通じた新しい内発的発展が支える地域づくりについて」国土交通省ホームページ (2020年11月17日閲覧、<https://www.mlit.go.jp/common/001264414.pdf>)。
4. NHK 「鶴見和子」NHK アーカイブス (2020年8月25日閲覧、https://www2.nhk.or.jp/archives/jinbutsu/detail.cgi?das_id=D0009250130_00000)。

5. Department of Population (2020) 「MYANMAR POPULATION」 THE REPUBLIC OF THE UNION OF MYANMAR (2020年9月7日閲覧、<http://www.dop.gov.mm/en>)。
6. 外務省 (2019) 「ミャンマー基礎データ」 外務省ホームページ (2020年9月7日閲覧、<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/myanmar/data.html>)。
7. MYANMAR JAPAN ONLINE (2018) 「ミャンマー、2021年に最貧国の指定から脱却へ」 MYANMAR JAPAN ONLINE ホームページ (2020年9月7日閲覧、<https://myanmarjapon.com/newsdigest/2018/05/29-001828.php>)。
8. 特定非営利活動法人メコン・ウォッチ「ビルマ (ミャンマー) の開発問題」 特定非営利活動法人メコン・ウォッチホームページ (2020年9月7日閲覧、<http://www.mekongwatch.org/report/burma.html>)。
9. Charities Aid Foundation (2019) 「CAF WORLD GIVING INDEX 10TH EDITION」 Charities Aid Foundation ホームページ (2020年8月25日取得、www.cafonline.org/docs/default-source/about-us-publications/caf_wgi_10th_edition_report_2712a_web_101019.pdf)。
10. Fuller, P. (2015) 「The act of giving : what makes Myanmar so charitable? 」 MYANMAR TIMES ホームページ (2020年8月25日閲覧、<https://www.mmtimes.com/lifestyle/16317-the-act-of-giving-what-makes-myanmar-so-charitable.html>)
11. 白地図専門店 「ミャンマーの白地図を無料ダウンロード」 白地図専門店ホームページ (2020年8月25日取得、<https://www.freemap.jp/itemFreeDIPage.php?b=asia&s=myanmar>)。
12. JETRO (2016) 「ミャンマー BOP 層実態調査レポート」 JETRO ホームページ (2020年11月5日取得、https://www.jetro.go.jp/ext_images/theme/bop/precedents/pdf/lifestyle_education_201601_mm.pdf)。
13. 内閣府国民生活局 (2003) 「平成 14 年度 ソーシャル・キャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて」 内閣府 NPO ホームページ (2020年9月7日閲覧、<https://www.npo-homepage.go.jp/toukei/2009izen-chousa/2009izen-sonota/2002social-capital>)。
14. 日本語能力試験「N1～N5：認定の目安」 日本語能力試験ホームページ (2020年8月25日閲覧、<https://www.jlpt.jp/about/levelsummary.html>)。

15. Community Organizing JAPAN (2014)「コミュニティ・オーガナイズング・ワークショップ参加者ガイド」Community Organizing JAPAN ホームページ (2020年9月7日取得、<http://cojapan.sakura.ne.jp/wpdata/wp-content/uploads/2014/12/276f16001cf6e265a347991df0a42e71.pdf>)。
16. 豊能町 (2016)「豊能町人口ビジョン」豊能町ホームページ (2019年2月10日取得、http://www.town.toyono.osaka.jp/data/doc/1459383806_doc_7_0.pdf)。
17. 豊能町 (2016)「豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略」豊能町ホームページ (2019年2月10日取得、http://www.town.toyono.osaka.jp/data/doc/1459383806_doc_7_1.pdf)。
18. 豊能町 (2016)「豊能町まち・ひと・しごと創生総合戦略アクションプラン」豊能町ホームページ (2019年2月10日取得、http://www.town.toyono.osaka.jp/data/doc/1460520543_doc_7_2.pdf)。
19. 市民団体とよのわたし研究室 (2020)「誕生の経緯」市民団体とよのわたし研究室ホームページ (2020年11月17日閲覧、<https://toyonowataken.wixsite.com/website/story>)。
20. 日立製作所 (2020)「対談 心とデータで読み解く『ハピネス』【第5回】『他人のため』は、自分のため。」日立製作所ホームページ (2020年11月17日閲覧、https://www.foresight.ext.hitachi.co.jp/_ct/17362507)。
21. 前野隆司 (2019)「ビジネスと人生を豊かにする鍵は『感動』にあった！」現代新書ホームページ (2020年11月17日閲覧、<https://gendai.ismedia.jp/articles/-/67304?page=4>)

謝辞

今春ご退任される今里滋教授、新川達郎教授は、同志社大学大学院総合政策科学研究科にソーシャル・イノベーションコースを創設するために尽力されました。まずは、お二人が本コースを創設されたことへの畏敬の念を込めて、心より感謝申し上げます。今里教授と新川教授は、2006年に本コースを創立されて以来、社会起業家や地方議員をはじめとする数々のリーダーを世に輩出されてきました。ソーシャル・イノベーションという言葉が日本でまだまだ認知されていない状況のなかでこのコースを立ち上げられ、本当にご苦労も多かったことと想像します。しかしながら、「より良い社会のために変化を引き起こす人材を、このコースから生み出そう」というお二人の熱意は、学生にも伝播し、卒業生を活躍へと導きました。これは本当に素晴らしい功績であると感じています。

また、今里滋教授には、本研究を進めるにあたり、指導教官として終始あたたかいご指導を賜りました、改めて心から感謝の意を表します。

今里先生に初めてお目にかかったのは、2014年のことでした。当時の筆者は、教育現場を中心にした活動を行っていましたが、周囲の人には活動の趣旨をなかなか理解してもらえず、悶々とした日々を送っておりました。さらに当時は、団体の運営が全く成り立っていない状況で、教育現場の相談業務の給料で活動費をまかない、生活費を削りながら持ち出しを続ける日々でした。そんな時に、今里教授のもとで研究がしたいと申し出た筆者をあたたかく迎えてくださり、実践一辺倒だった筆者を研究者として6年にわたって育ててくださいました。また、筆者の抽象的な研究テーマを、否定されることなく、常に理解してください応援し続けてくださいました。今里教授の実践者に対するあたたかな眼差しは、ご自身も実践者として市民活動に尽力されてきたご経験があるからこそであり、大学院の授業のなかでうかがった先生の体験談に感動し、何度も励まされたことを覚えています。

後期課程に進んで研究を続行することを勧めていただいた時は悩みましたが、進学を決め、研究と実践を往復するなかで、それまではほとんど人に理解してもらえなかった活動が瞬く間に広がり、この数年のうちに、企業の研修、行政との連携事業、学校改革事業へと展開していきました。

2021年3月には、本研究で示した内発的イノベーションをテーマにした地域づくりフォーラムが開催されることになり、志を同じくする他地域での実践者の方とご縁をいただき、一人ひとりのうちに潜在している可能性を見出すことから始める地域づくりを発信していきたいと考えています。内発的イノベーションによる地域づくりが、今後の日本社会に

広がっていくことで、多くの課題を抱える地域の活性化に役立てることができるのではないかと希望が、本研究の成果をまとめることで見えてきたような気持ちであります。どの出来事も、大学院に進学すると決めた時には、全く思いもよらなかったことでした。ここまで来ることができたのは、筆者の研究が少しでも社会の役に立てればと励まし続けてくださった、今里教授のご支援があったからこそと感謝しております。

そして、同志社大学大学院総合政策科学研究科の関根千佳先生、佐野淳也先生、服部敦子先生には、研究に対する励ましとご支援を賜り、心より感謝申し上げます。同じく藤本哲史先生、太田肇先生には、研究や授業科目に関して多大なるご指導をいただきました。深く感謝しております。また、久保真人先生、Ofer Feldman 先生には、ワークショップ演習の担当教員として、実践への想いに偏ってしまう筆者を根気強くご指導いただき、手厚い博士資格論文の手ほどきをいただいたことを、心より感謝申し上げます。

現在は東京工業大学の教授を務めておられる中野民夫先生からは、同志社大学時代にワークショップ理論を学び、筆者がファシリテーターとして自分にできることは何かを自分に問い直す契機となりました。心より御礼申し上げます。

また、東京福祉大学教育学部の石崎達也先生にも、研究に関するアドバイスやご指摘をいただいたこと、心より御礼申し上げます。

さらに、ソーシャル・イノベーション研究コースの森雄二郎先輩には、的確なご指摘を数多くいただきました。本当に有難うございます。併せて、飯塚宜子先輩、中野陽子先輩には、丁寧に草稿をご確認いただいたことを心より感謝申し上げます。大学院生の方々、研究室のメンバーには、常に刺激的な議論をいただき支えられました。本当にありがとうございました。

そして、筆者のフィールドワーク調査に多大なご協力とご支援をくださった、ミャンマーの開発僧の皆さまに、深く感謝いたします。特に、筆者が支援活動に関わらせていただいた NPO 創設者の かいほつ 開発僧と かいほつ 開発尼僧には、言葉では言い尽くせない程に大変お世話になりました。「人を変えるのではなく、まずは自分が変わる」という、責任を自分に引き寄せ、自らの物事の捉え方を問い直す生き方、そして本当の自分らしさを見出すことの意味を、支援活動を通じて学ばせていただきました。その経験が本研究で提示した「内発的イノベーション地域づくりモデル」の礎となっていることを改めて実感しております。本研究の成果をまとめることができたのも、支援活動をご一緒させていただいた経験の賜物で

あり、感謝してもしきれません。あの時の実践が、本研究の成果としてまとめられたことは、筆者にとって奇跡のように思います。

また、大阪府豊能町役場の皆さまには、研究に対して、多大なるご協力を賜りました。本研究で示した地域づくりを実行に移すのは、とても大きな覚悟が必要だったと考えます。

「地域を本気でよくしたい」、「住民の皆さんの可能性を地域で拓きたい」という思いで、この地域づくりに真摯に挑まれる姿勢に、何度も心打たれ勇気をいただきました。筆者にとっても行政連携事業に挑戦するのは初めてのことでしたが、職員の皆さんと共につくりあげた3年間を、これからも一生忘れることはないでしょう。そして、とよのわたし研究室を受講してくださった45名の受講生の皆さまにも心より感謝申し上げます。特に、1期生と2期生の皆さまには、何度もアンケートに答えていただき、インタビュー調査にも多くの時間をいただきました。講座を終えて、一層輝きを増し、可能性を拓いて歩まれている姿を見て、これからの豊能町がどのような発展を遂げていくのか楽しみでなりません。豊能町が、一人ひとりの可能性を真に拓く地域のパイオニアとなり、この豊能町モデルが全国に広がっていくことを切に祈っております。改めまして、豊能町役所の皆さま、講座にご参加いただいた住民の皆さまに、心より感謝申し上げます。

そして、豊能町とのご縁を結んでいただいた、前田展広さんにも感謝申し上げます。イノベーターとして、常に人の幸せを本気で考えておられる姿勢を尊敬しています。豊能町の地域づくりのなかでは、講座を終えた受講生の皆さんの伴走支援を親身になって取り組まれたことで、住民の皆さんが自然に可能性を発揮できることにつながったのではないかと考えています。本当にありがとうございました。

最後に、これまであたたかく応援してくれた一般社団法人こころ館のスタッフの皆さん、本当にありがとう。こころの拠り所があったからこそ、諦めず研究を続けることができました。そして、研究に没頭する筆者をあたたかく見守り、応援してくれた大切な家族にも、心より感謝しています。

一人ひとりがうちにある可能性を拓き、自分の本来持つ力を十全に発揮して生きること、必ずやより良い社会が創出されると信じ、これからも歩み続けてまいります。